づ古人の押形を知らざれば、後學の因るべき所なし、學術も亦然り、古人の迹に因らざれば其跡なき道を悟ること能はず、一切の事みな常に心を用ひて、耳目の觸るゝ所を以て修行の種とし、事ある時は其時の變に任すべし、又軍中は敵味方共に大勢なれば、獨り働きの如く自由はなり難きものなり。常に古人の跡を考へて法を出し、士卒を錬り、駈引の自在なるやうに備を立つるを以て要とす。

吾人父祖の陰德によつて今日身に福ありと云へ共、一念僅に違ふ時は、其より種々の妄心生じて終に天狗界に入り、父祖の陰德を削り、身に禍ある事矢よりも疾し、汝等惧れ愼むべし、天狗界と云ふは己が小知に慢じて人を侮り、人の騒動するを悦び、是を以て是非得失の境をなして無事を樂しむ事を知らず、欲する所を必として己を省ることなし、只己に從ふ者を是とし、己に從はざるものを非とす、世間の是非を己が我執のしがらみに留めて、彼を惡み之を愛し、或は怒り或は困むで、常に心の靜かなる事なし。之を佛家に一日に三度熱湯を飲んで惣身より火焰を生ずといふ、此煩熱の苦みより種々轉動して邪をなし人

を害ふ、汝等よく心を修し氣を收め、魔界を去り人間に出て道を求むべし、汝等鼻なが く髯あり翅あるを以て、人に勝れりと思つて愚人を誑かす、汝の長き鼻尖れる髯輕き翅は、却つて心を苦しめ人を害ふの器なり、學術劍術共に只己を知るを以て專務とす、己を知るときは內明らかにして能く愼しむ、故に來つて我に敵すべき者なし、たとひ知足らずして過ちありとも、我が罪にあらず、天に任するのみ、己を知らざる者は人を知らず、私心を以て人を欺き勝を取らんと欲する者をば、人其私心の虛を討つ、慾を以て人を襲ふ者をば、人其慾を動かして其動の虛を討つ、勢を以て人を壓する者をば、人其の勢の衰ふる所を討つ、學術劍術皆同じ、只己を盡して無慾なる者は討つべきの虛なし、勢を以ても挫ぐべからず、慾を以ても動かすべからず、巧を以ても欺くべからず、吾此を思つて常に愼むといへども、凡情いまだ斷ぜず、只熱湯を飲む事を少しく免かるゝのみ、猶天狗の列にあり、何れの日か人間に出て道を悟らん、しばらく我が聞く所を以て汝に示すのみといひ畢て、草木震動し山鳴谷應へ、風起つて面を撲と見て夢悟めぬ、山と見えしは屏風にてありし、寢所に遽々然として

臥たり。

藝術論後

客あり此書を難じて曰く、子が論ずる所、理を開き情を盡し氣の所變を語つて未だ事の應用を審らかにせず、老人病身又は務め繁き者の志を養ふには可なり、藝術修業の者のためには足らざる所あり、曰く、吾れ劍術者にあらず、何ぞ人を導くことをせんや、只弱冠より好むで藝術ある人に親炙し、其事の利を訪ね、氣の變化を試みて其病を治し、その理を聞て心術を證せんことを求る者なり、たま〳〵心に默契することあれば筆記して予が童蒙に示すのみ、友人予が童蒙によつて頻に請ふ、然れども多言にして識者の謗りを招かんことをおそる、已むことを得ずして天狗を雇ふて戲談せしむ、寢語の小冊予豈みづから是とせんや。

天狗藝術論　終

茶話指月集

解題

本書は、茶道の心要を說けるものにして、茶道の祖と仰がるる千ノ利休の孫、宗旦が斯の道を問ふものに對へて、「本來禪によるが故に更に示すべきものなし」とて、平生語り傳ふる古人の茶話を示して、指月とされたものを、門人藤村庸軒が同門久須見鶴巢に傳へ、鶴巢はこれを雜記して「茶話指月集」と名づけたのである。

宗旦は利休の子宗淳の子にして父祖の道を傳へ初め大德寺に入りて禪を學び、大に茶禪一味を擧揚し世外に超絶して名利を避け、茶事を以て己が任とし、萬治元年、齡八十一を以て逝く、編者久須見鶴巢（一に鷗巢に作る）は名を疎安といひ、洗竹庵と號し、京都岡崎村に隱棲して、享保十二年五月八日壽九十又三にして沒した。

本書の初めに藤村庸軒の略傳を書いた宇遜庵的は、周防巖國の吉川氏の儒者、宇都宮由的といふ人にして、遜庵は其の號、嘗て日本人物史を著して德川氏の忌諱に觸れ、巖國に禁錮せられ、寶永六年五月二日七十七才にて病歿した。

自叙

本朝茶禮の行はるゝこと尙し、贈相國喜山公、眞能が傳を得たまひしよりこのかた、珠光・紹鷗に委しく、利休に大成するものならし、唐に陸東・岡盧・玉川がたぐひ茶を賞する人なきにしもあらねど、いまだ賓主禮讓の茶會あることを聞かず。今、昇平の御代比屋なを盛んに行はる。頃、茶道の正傳をはかるに、その支流いづれをか是とし、いづれをか非とせん。近くは唯休が孫千ノ宗旦號ハ元伯といふ人あり、生涯利門名路に奔らず常に窻簾をたれて清味を甘ふこと已に七十餘年、雪のあした月の夕、興いたる時は茶友を招き、興つくる時は獨座す。偶々、此道を問ふ人あれば答へていはく、本來禪によるが故に、更に示すべき道もなし。但、わが平生かたり傳ふ古人の茶話を以て指月とせば、をのづから得ることあらんと、かの京極ノ黃門、「和歌に師匠無し、只、舊歌を以て師と爲す」とのたまひしも、道異にして理は同じかるべし。こゝに藤村庸軒號ハ反古庵年來、旦翁に聞くところの淸潭につかり、余に又つたふ。余も亦、若かりし時、

○喜山公―足利八代將軍義政東山に銀閣を創立し、四疊半の茶室を始む。延德二年正月七日薨じ、太政大臣を贈らる、故に贈相國といふ

翁の茶席につらなる。因つてこれかれ聞くまゝにしるしとめて、久しく書笈にかくす。今茲（ことし）、元祿丁丑の秋、ひとりの少年來て乞ふて袖にし歸る。猶同參の人ありて傳へて話中のをもむき了せば、翁の指月、豈、末とをくてらさざらんや。

河東散人　鵜巢

藤村庸軒先生略傳

先生、氏藤村、號庸軒、又曰反古菴、本氏久田、後改於今氏、佐々木之枝葉也、爲人幽閑淡白、好讀書、善辭章、常慕陸鴻漸、玉川子之風、嗜喫茶、本朝自古稱茶僊者、千ノ利休居士也、先生漱其芳流、極其道之淵源、雪晨月夕、招好事之遊侶、論雲華之美色、次水泉之清味、茶話終則賦詩作歌、以此自娛、餘外不足取之、元祿己卯、九月十七日、行年八十七、病沒于家、所傳之茶式、載在指月集、門人得其術者甚多矣、予曾會先生子詞場者三四度、見其清標、實非尋常之人、今既入鬼錄、可勝惜哉、追憶往事、而作略傳。

元祿庚辰、十一月、一陽來復之日

宇遜菴的書

茶話指月集 上

ある時、豐臣關白秀吉公始めて千ノ宗易に臺子の茶湯仕るべきよし仰せ出さる。そのころ辻玄哉といふもの、古來の臺子をしる、宗易玄哉の所へゆきて古流をならひ、御殿において仕ふまつる。公、上覽の後、われもむかし臺子をならふ。汝が茶湯格にたがふところあり奈と御尤候を、宗易、古流はとこ〳〵品おほくおもはしからず候により、略して仕候と申上る。公さては其ならひしらざるにあらず最もにおぼしめす。向後茶に嗜るめん〳〵宗易が臺子見ならふべきよし仰せられ、却て御感に預る。夫より千家古流を閣き、利休が當流相承し來る。

右は宗旦物語此の以下數十件同前、但し雜話を後に附す。

附

宗易は泉州堺の人、其の先、室町家に仕へて、同朋の役を勤め、名を千阿

彌と曰ふを以て子孫千を以て稱號と爲す。

夫れ臺子は茶湯の濫觴、昔、能阿彌、慈照院へ、相傳へ申上るの後、珠光に傳ふ。光は紹鷗に傳ふ。鷗は故へありて玄哉に傳ふ。今宗旦より休の□臺子直傳は藤村庸軒一人存命の由、此の人若かりし時、古織を學び遠州公に親炙す。强年に及んで千家の蘊奥を探り、齡八十を過ぎで一日も爐火を斷さず、加之、平日書を讀み詩を題する事を好む、暇ある時は茶匙竹筒を製して俗事に涉らず、門流甚だ多し。

利休居士いまだ千ノ與四郎といひし時、堺にてはじめて茶湯を出し、先づ古老なれば北向の道陳をよぶ、その後道陳が知音を賴み異見を乞ふ。道陳、與四郎が茶湯を褒めて、やがて及ぶものあるべからず、一例いはゞ大茶入より茶をたぶ〳〵とすくひて點るを、茶をすくなく入れてかすりだてにたてさせたらば一きはよく有べしといへるを、與四郎聞きてやがて得心しつるとなり。

附 利休居士の傳 齋名、拋筌菴、號不審

○慈照院―喜山公の法名。

天正戊子の夏、秀吉公、數奇に長ずる者數人を擇んで、奏して綱位に昇す、然れども宗易獨り辭して命を受けず、還て居士と稱する事を請ふ、是に因つて公、大德の古溪に命じて、利休居士の號を授けしむ。

道陳、小座數は西表にてありしを、さる人畫の客に西日が入りて惡からんといへば、陳、朝ばかり茶湯すれば西日のよしあし覺えずとこたふ。宗旦、常に數奇屋を小座數といひ、にぐら上りをくぐり口といふ。

宗易露地の樹は凡そ松竹、した木には茱萸をうへたり、織部は僧正が谷にて樅の木のものふりたるを見て面白く思ひ、はじめて庭にうつす。

附　露地　南浦茶話　鹵路　羅山文集　露路　茶道錄

利休は柚の色づくを見て口切を催し、古織は樅のわか葉の出る比、風爐の茶湯よしと申されき

さる方の朝茶湯に利休その外まいられたるが、朝嵐に椋の落葉ちりつもりて、

○大德の古溪―臨濟宗大德寺の僧名は宗陳、古溪はその號なり。天正十八年十二月利休、秀吉に殺さるゝに及びては、大德寺に伽藍を破却せらるゝと知せず。時に和尚の豪奢なる一山安置になりを得。

○數奇屋―數とは、漢書李廣傳の中より出た文字で、物の偶數でなく、ちぐはぐなるをいふ。茶道では、餘り華美ならず雅致ある庵室を數寄屋といひ、れくゐた器物を好むものを數寄者といふ。

露路の面さながら山林の心ちす。休あとをかへりみ、何もおもしろく候、されば亭主無功なればはき捨るにてぞあらんといふ。あんのごとく後の入りに一葉もなし、その時、休、惣じて露路の掃除は、朝の客ならば宵にはかせ、晝ならばそのまゝ掃かぬが功者なりといへり。

ある時、住吉屋宗無茶湯に始の入りに亭主出でて、只今、名水到來候とて、釜を引上げかつ手へ入る、その間に宗易棚にあるふくべをおろし、炭をなをし申され候を、亭主ぬれ釜を持出し、しばらく炭を見て釜を掛くる。予も席にありしが、此の茶湯ことにおもしろかりつるとて、三齋公度々御物がたり候なり。

附

其比住吉天下茶屋の水、太閤も御賞翫あそばしたれば之を若水といへるにや、京にては醒井柳ノ水、宇治にては三ノ間。

休、手水鉢の前の捨石は、下人が目を閉がせ、ごろたを物にいれてくはらりと捨てさせ外へころびたるを少し杖にてなをし、そのまゝ置くがよし、わざと

○三齋公―細川忠興、足利、織田、豐臣、德川等に仕へ、正保二年十二月八十三才にて沒す。

捨てれば惡しといふ。森口といふ所にひとりの佗あり、利休と知る人なり。さればいつと茶をたべんと約す。ある冬の頃、大阪より京へのぼるに、かの佗をこゝろざし、夜ぶかに出て尋ねたれば、亭主よろこび迎へ、休、内に入る、栖居いとわびて、心にかなふ、やゝありて窓のもとに人の音なひしきるをみれば、亭主行灯に竹竿を持そへ出て柚の樹のしたに行灯をおろし、竿にて柚を二つばかりとりて内に入りぬ　休、打ち見るより是を一種の調菜にしつるよと、佗のもてなしつきはおもしろく思ふに、あんのごとく、柚味噌にしたゝめ出す、酒一献過ぎて、大阪より到來すとて、ふくらかなる肉餅を引く、休　さてはよべより知らするものありて肴もとゝのへ待るてこそ、始めわざとならぬ體にみせつるは作りものよと興さめて酒はまだ半なるに、京に用事あればまかるとて、いかにとむれども聞も入れず上りぬ、されば佗では有合たりともにせ□き物は出さぬがよきなり。

宗易、園城寺の筒に花を入れて床にかけたるを、ある人筒のわれめより水のしたゝりて疊のぬれけるをみて、いかゞと申されたれば易、此の水のもり候が

〇佗―わび、なやましさのいふ。佗住閑居、隱棲するをいふ、佗と寂びといふは、意味に住て、居に貧も安素なんじて、器具をもせいぬ。茶道のびとの奥儀である。

命なりといふ。

附

此の筒　韮山竹　小田原歸陣の時、千ノ少庵へ土産也、筒の裏に園城寺少庵と書付有り名判無し、又此の同竹にて先づ尺八を剪り、太閤へ献ず、其の次音曲已上三本、何れも竹筒の名物なり、音曲に利休狂歌あり其文今京の人所持す。

古織籠の花入を薄板なしに置かれたるを、休稱して、古人うす板にのせ來れどもおもはしからず、是はお弟子に罷成るとて、それよりぢきに置くなり。

利休盛阿彌が棗のよしあし見分くることいく度試に打よせみせてもちがはざるを人みな感じ待る。

休やゝもすれば今日の客は京衆じや、肩衝に茶をとれ、明日は堺の人じや棗に茶をはけといふ。

〇棗―棗の實の形をした茶入れ。

附

其の時分京には道具のみもて遊びて、茶湯は堺に及ばず、天正の末なり京盛んになりて堺は衰ふ。

春の比、秀吉公大きなる金の鉢に水を入れて床になをさせ、傍に紅梅一えだ置かせられ宗易に花つかうまつれと仰せらる。御近習の人々難題かなと囁かれたるを、宗易紅梅の枝さか手に取り、水鉢にさらりこき入れたそば開きたると蕾とうちまじり水上に浮みたるがえもいはぬ風流にてぞありける。公何とぞして利休めをこまらせうとすれども、こまらぬやつじやとの上意、御感斜ならず。

休ある時、中柱入りたる小座敷に、自在に釜をつりて獨りある所へ少庵見舞ふて、此の座敷にて自在取合申さずといふ。休むかしより誰も釣にいはれざるこしやくのとあれば、少庵誰がつろうとまゝよとかく自在は取あはぬといひ捨て、かつ手へ入る。今の人自在にて茶をたつる時よくにゆる釜を少しつり上ぐるは本意にあらず、なをにゆるやうに釣りさげても立てたきことなり、昔はせざることなり。

住吉の社家のなにがし、休と友としよし、その人貧しかりけるをあはれみ細工きゝなれば自在の鎰を刮らして休が判など加へ、よき價を得さしつ、この故にふるき鎰世に殘り侍る。

古人は露地の水打ちかげんを吟味したり、譬へば口切の時分は客の入りに一つの飛石三分一程晞あがりたるをよしとす。甚だ寒さする時は水打たずとも夏は涼敷きやうに打ちしめしたるよし、くゞり口の石一つはぬらさぬが故實にてあるなり。

附

客を見かけて水おほく打つは、いとさはがしく裳もぬれ、木などに打ちたるはそのしたゝり衣におちていぶせくこそと侍れ。

利休門下の人いかやうなる座敷がよく候ぞと問はれたれば、休、うめ木のおほい座敷がよく候と答ふ。

さる田舍の侘、利休へ金子一兩のぼせて何にても茶湯道具求めて玉はれとな

○露地―門内又は庭上の通路、狹き横丁路地といふはこれなり。

り、休、この金にてさらす白布を買てつかはすとて、侘は何なくても茶巾だにきれいなれば茶はのめるとぞいひやりける。

桑山左近、宗易へ露路のしつらひやういかゞと尋ね申され候時、

樫の葉のもみぢぬからにちりつもる奥山寺の道のさびしさ

此の古歌一首にて御得心候へとなり。

附

遠州公もさる人のもとへ庭の心入れ是にて御合點候へとて御つかはし候發句

夕月夜海すこしある木間かな

古織は山のあらはなるをきらひて、木の間よりみゆるを山に天井張りてよしといはれしなり、遠州古織の意にかなふものなりし、數寄屋は茅葺、柴の戸のをろそかなる山家をうつし、侘たるこゝろを主として床には法語繪賛の類、筒にうつろはぬ花さし入れ、爐に松風を烹て自足り、榮願を苓通に付す茶道のあらましかくとやいはん。さいつ比、櫻の御所、千ノ宗旦茶

○樫の葉の云々―此歌山家集に出づ。

○遠州公―遠洲流茶道の祖、小堀政一、徳川氏に仕へて遠江に田一萬石を賜る。春屋妙葩禪師に參じて宗南大有居士と號す。

○古織部―古田織部重然といふ。千ノ利休の門人にして織部流茶道の祖。

湯御所望ありて御成候とき、且、常の通り茶を點て茶椀をお前へさし出す。御所、なにと宗旦、臺天目にては何れの人へ茶をまいらするぞと御尋ねあれば、且、御所のやうなる貴人へ進上申候、され共かゝる容膝の小庵おもしろく思召し、まげて御成あそばさるゝにより、わざと常人のごとくもてなし奉るにて候。其うへむかしは長押に張付したる四疊半に臺子を飾り茶湯仕候を宗易數奇道の本意侘たるにありと覺悟いたし、竹椽、鏽壁やうの栖居にしつらひ替候ゆへ、かやうの小座敷には臺子取合申さず候、書院には臺子かざり置き申候、後程あれへ御出あそばし候はゞ、いかにも臺天目にて御茶上げさふらはんと申す。御所最におぼしめし御機嫌よく御茶まいりなど御遊ばされけるとなり。

ある夜、不審庵に客ありて深更に及び、休、短檠に油させよとあれば小姓出てよきほどにさす、やれさやうにさすは宵のこと、ふけてたぶ〳〵とさゝいては咄されぬものじやといふ。

○四疊半―茶室を四疊半としたのは、山慈照院の方丈に擬へたるも、茶禪一味の精神の現はれと見ることが出來る。

○短檠―高さ二尺ばかりの低き燈火。

秀吉公、宗易へ大佛の内陣をかこひて茶湯すへる者は誰ぞと御尋ねありしに易、しばらく思案して、道安が仕るべきよし申上げる。

休、ある時、有樂三齋など參らると云ふにかさねて何も手水の柄杓一本つゞ御好みにて御持參有り私も好み候はんといふ。扨て再會に何も持參あり、物數奇とり〳〵なるに休が好みたるをいだしければ、をの〳〵手をうちて、中々及ばざるよしのたまふ。

宗易、花の頃、さる侘を伴ひて東山へまいられ、みちにて其方宿に釜をしかけて出られたるやと問はれければ、今日は早朝より御供申により、しかけ申さずと答ふ、いやさやうのたしなみにて侘がならうか、是よりかへりてしかけておじやれ、晩に誰かよろうもしらずといふ。

茶湯に赤き花と牡丹は好まねども、休、うす色の芙蓉むらさきの牡丹はよしとて花に入れつるなり。織部が紫の木蓮を嗜ていけたるも同じもの數奇にや。

附

此の木蓮は紫玉蘭といふものなり、七十年以前までは世に稀にて豐國の神社に有りしを花のころは所望の茶人いとおほかりけるとぞ。

宗易庭に牽牛花みごとにさきたるよし、太閤へ申上る人あり、さらば御覽ぜんとて朝の茶湯に渡御ありしに、朝かほ庭に一枝もなし尤も無興におぼしめす、扨て小座敷へ御入あれば色あざやかなる一輪、床にいけたり、太閤をはじめ召つれられし人々目さむる心ちし玉ひ甚だ御褒美にあづかる。是を世に利休がさかほの茶湯と申し傳ふ。

附

かやうに咲きたる花を皆はらひ捨て、一輪床にいけて人をおもしろがらするは、休が本意にあらず、いかにといふ說あれども、朝かほを興にて茶湯つかうまつれと仰せらるゝへは、一輪床にいけたるが、休の物ずきのすぐれたる所なり。その後遠州公の比より露地に花をうへられず、是も茶湯の花を一段賞翫の義なり。

休、數奇に出す道具は、粟に芥子をまぜたるやうに組合するが功者なりといひし。

附

是れ重々敷き道具にさびて輕き物、又、大小を組合すが好しと云ふなるべし、昔より肩衝の茶入を出すには、薄茶は棘丸壺には、中次雲龍に盥の水指、大風爐には小板勿論の事、古織の細口の釜に小ぶりなる柄杓却つて取合すと云はれしも亦此意なり。

利休は過分の采地拜領して家まづしからざるゆへ、一とせ千鳥の香爐宗祇所持千貫に求めてやゝ時うつる程疊に置てみけるを、休が妻宗恩われにもみせ給へとてしばし見て足が一分高ふて恰合悪し截給へといふ。休われも先程よりさおもふなり、□屋をよべとてつひに一分きるなり。此の宗恩は物數奇すぐれて、短檠に昔は取手の穴なかりしをはじめて明させたる人なり。

附

○大小組合すこれも、ぐはぐを好むち。數奇道なり。西洋にては、道具、器類、建築等すべて幾何學的に並べたがるが、日東洋殊に、本の茶道にては、ちぐはぐを尊ぶ。これは、人の運命の兎角順調でないことを意味したもので、東西の人生觀の相違によるものであらう。

古來香爐の茶湯と云ふ有り、其故實知る人稀なり。先年三齊公に宗易より其後亡羊より藤村庸軒へ傳へ田子浦と云ふ香爐を與へて印證とす。の直傳有しを三宅亡羊香道の達人たるに依り、齊公より亡羊へ御傳授あり

ある時蒲生飛驒殿長岡幽齋翁兩人利休所にて茶湯過て後、蒲生殿千鳥の香爐所望あり、休無興のていにて香爐をとり出し、灰を打あけころばし出す。幽翁清見潟の歌の心にやと御申し候へば、休氣分なをり、いかにもさやうに候との返事なり。順德院御百首の中に、

清見がた雲もまよはぬ浪のうへに
　月のくまなるむら千どりかな

このこゝろは、けふの茶湯おもしろく仕舞たるに、なんぞや無用の所望かなとおもはるより、村千鳥を香爐に比したるなるべし。すべて何事も興の過たるはあしし。ことたりぬ所に風流餘りある理、古き書にも見え侍る。或人の云く、此歌千鳥の縁あるにより、當座引合せて其心にかなふ歌の本意は千鳥を賞するとぞ。

豊臣殿下西國退治あそばし御歸城の時、宗易も供奉す。尼崎にて藪内紹知が在所を尋て茶をのみ浴(ゆあみ)しつる後、紹知何にても花はなきか生(いけ)んとあれば庭に姫瓜の花咲て侍れどいけられさうなものとも見えず、其外何も侍らずといふを然ふ紹知むかしは花なければ笹の葉ばかりもいれたることよけれ生なんとてみづから起(たつ)て一枝きり、金の花入に姫瓜のつるを床縁まで生させたるがことにうるはしく出來にけり。是より紹知其花入を秘藏してひめ瓜と名づく。紹知京へのぼりて後も家に傳へてことに所持す。

附

天正十五年の春秀吉公西征の事幽齊翁道ノ記に載す。其の記の略に同年六月八日利休居士所へ關白殿渡御ありて發句つかうまつるべきよしあれば箱崎の八幡の心を

神代にもこえつゝ涼し松の風　幽齊

千宗易より

あまさかるひなの住居とおもふなよ
どつこも同じうきよならずや

といひおこせられける返事に

あまさかるひなには猶ぞたぐひなき
どつこもおなじうきよなれども

同

休、虎の尾といふ草花面白きものとて花に入つるなり。

ある時道安我をつれて古織の茶湯にゆきしが亭主鏁(くさり)の間にて炭所望あり。安灰土鏑(はいはうろく)をひきよせ爐中をとくと直して後炭を置く。その炭ことに興に入る。予歸路におよんで繊部いとの宗匠なるに爐中の直し以の外に覺え候といへば、安よし宗匠にもあれ何にもあれ爐中あしくては炭が置れぬといひし。

小座敷に衝上(つきあげ)を明けたるは道陳、床を四尺三寸に縮たるは道安にてありしが休もよしとおもひけるにやその通りにしつるなり、灰さしもむかしは竹に土器(かはらけ)などさしはさめるを安、金(かね)にして柄を付たり。休はじめは道安が灰すくひ飯杓

○我―宗旦なり

子のやうなとて笑ひけるが、是も後はそれを用ゆ、また休が衝上の障子をかけはづしにして不自由なるをさる人見て上に溝をほりてひきあげ給へといへば、いやさやうに操ることわれは好ずといふ。又床に掛る釣舟の折釘もおとしかけの外に打なり。内につりていづくより下たるにやと、かゆるは是もあやつりてあししといふ。聞く人□心するなり。

附

休が之意は漢陰桔槹を嗤ふ同日の論乎。

宗易いつの比なりけん、三齊へ鶴の庖丁所望申れば折節鶴はなくて驚にてあそばしけるを易稱して後末那板の恰合すこしひきし候はいかゞと問ふ。齊厨の者に御吟味あれば、頃、定法のまな板ふるび候てうへを一分ばかりしらげ候と申す。其時齊手を拊てのたまふはとかく臥剣とこそ存れ。

附

三齊翁吉田に御入候時、亡羊は御物がたり有しは予が宅にて利休と咄し居たる中その比脇指の鞘を好みて出來たるを休にみせたれば此前道具見世に古き鞘ばかりいくらも括合せて有つるなかに一つの鞘形あまり見事なればもし入ことともあらんと思ひとりて歸り土藏の内につらせてをきしが今に候らん。御好みなれども其鞘なりは及ばずといふ。予がさやは越中流とて人のゆるしつるにまされるはいかゞとおもひながらはやく見せ給へとて取につかはしたれば其鞘聞しにもまさりて覺えしゆへそれを本として家に傳ふとわが脇指の鞘も同じ通りとて亡羊へ御見せ有しなり。又さる方にて休小刀の入事ありて借しつれば返し侍るとて此柄の彫は誰ぞとたづぬ。是は祐乗が管絃の柄とて名ある物なりといへば、かやうの柄は小身者は面白かることに候。貴所などには似合申さずといふ。さらば好みて給べといへばかさねてまいらせんと約しておこせたるを今に秘藏して持とて是も御みせ候となしくみえつるよし亡羊齋庸軒へはなし申され候。

藥院の小座敷は宗易其の地に杖にて指圖し、此通大工に立よといひ付たれば本間ならぬ疊入組却ておもしろく出來たり。

休常に茶湯は伶人の裝束のやうに成りたがるもの也。事少なに仕舞がよき也といひし。

雲龍の釜はじめて出來候時、休、氣に入りでいまゝで圍爐裡にすへたる釜をのけ五德置ながら自在に釣りて茶湯なひ〳〵出すなり。又一とせの夏太閤の御前に雲龍の釜御しかけありて宗易に茶を點よと仰ける折しも、御近習おほくて十服ばかり點たるに其湯始終さめざりけるとなん。

附

雲龍の釜よく沸して茶を點る毎に水よき程にさせば湯はさめぬものなり。又雲龍の釜の內に湯少く見ゆるを嫌いつも八九分めあるやうに水を指合せ茶をたつる好されども仕舞に其まゝ蓋をすれば湯煮こぼるゝゆへ、湯少し杓に汲上水覆へ捨て仕舞が故實にて有るなり。是も亦古人話中より傳ふ。雲龍の茶湯の趣き不圖こゝに記し侍る。今の世習號し梓に錢茶錄の類ひ可

否紛然として信用しがたき事ともはいかんそや。さるに依て古へより何の道も相承の正き師を尋ね程門の雪にたゝずむ志を稱す。

むかしは四疊半の爐立に成りて板にて塞ぎ風爐をそのうへになをし釜をば鎖又は自在にても釣させ圍爐裡だてのやうに水指を置合せ茶をたつるなり。佗などには似合てことさら面白く覺えし。

休、柴垣など結するには薇繩ばかりは惡し、繩まぜてゆへといふ竹の籬はうへの長矩を揃へず、さる方にて少庵と杉皮塀をみて此人の物數奇竹にもまた成りなん後は常の壁になるものぞといひし。又ある人の連子窓の竹處々打替たるを少庵あれみよ新古取まぜて人をおもしろがらすること總てかやうの類數奇道にきらふなり。譬は連子竹損したらば皆打かへてよしさもなくば其儘置べし。されど貴人を申請るにはいつとても取かゆるがよきなり。

附

休沒後世間の茶湯一變して物毎改め侍る事に成りていとむづかし。さはい

○連子窓―格子のある窓、櫺子と書く。

へど口切ばかりは猿戸の押縁少しにても打かへたるははなやかにふくべなどもてはやすともやさしく竹輪のみとりも一きはきよらにみゆるこそおかしけれ。

雲山といへる肩衝堺の人所持したるが利休など招きてはじめて茶湯に出したれば休一向氣にいらぬ躰なり。亭主客歸りて後當世休が氣にいらぬ茶入おもしろからずとて五徳に擲ち破けるを傍に有ける知音の人もらうて歸り手づから繼て茶會を催しふたゝび休にみせたれば是でこそ茶入見事なれとことの外稱美すよく此趣きもとの持主方へいひやり茶入秘藏せられよとて戻しぬ。その後件の肩衝丹後の太守價千金に御求候てむかしの繼目ところ〴〵合ざりけるを繼なほし候はんやと小堀遠州へ相談候へば遠州此肩衝破れ候てつぎめも合ぬにてこそ利休もおもしろがり名高くも聞し侍れかやうの物はそのまゝにて置くがよく候と申されき。

附

〇肩衝―茶入の一種。

古織全き茶碗はぬるき物とてわざと缺て用ゐられしことあり。よからぬものずきといふ人もあれど此茶入われて後利休却て稱美し遠州公もかくのたまふにて茶道の風流別に有ことゝ知るべし。頃の茶湯人の心たけたるにや多くは古風をしたひ、物數奇も今やうの類にあらず。さるにより破れたる茶器損しぬる書畫ふりたるまゝにてめで侍ることになりぬ。徒然草にうすものゝ表紙はとく損するが佗しきと人のいひしに頓阿あがうすものは上下はづれ螺鈿の軸は貝おちて後こそいみじけれと申侍しこそ心まさりて覺えしか一部とある草子などの同やうにもあらぬをみぐるしといへど弘融僧都が物を必一具にとゝのへんとするはつたなきものゝする事なり。不具なることよけれといひしに心かよひ侍りぬる。

ある時利休道安所へ茶湯にまいられ露地にて同伴の人へ飛石のうらひとつ一寸高けれども亭主しらぬさうなと笑ひけるを道安うちにて聞付け、われも日比さおもひつるとて中起の間にそとなをし置しを休後の入りに立て侍り此石なを

したやらんひきく成りたるといふ其高低のくはしきを人感じ侍りし。

茶話指月集　下

○源君―徳川家康。

天正十四年穐

源君濱松より御上洛あそばされ候時豊臣關白大阪において御對面饗應最善美をつくし宗易をして茶を點ぜしめ給ふ。御歸國に及んでは豊臣公御太刀（不動國行）御茶壺（白雲）をまいらせらる。

附

茶壺の勝れたるを元眞壺と稱す。其次を呂宋と云ふ。文祿癸巳の歳堺納屋の助右衞門呂宋へ渡りて眞壺五十取りて歸り太閤の上覽に入れければ宗易に甲乙の品を分たせ價を定めて所望の人へ遣さるゝとなり。

宗易が盛あ阿彌に棗は漆の滓をまぜてざつとぬれ中次は念を入れて眞にぬれといひし紀三與三が棗は塗みごとすきておもくれたり。中次は秀次藤重をよし

○有樂公―織田長益、信長の弟、髪を剃りて利休の門人となり有樂齋如庵と號し後德川氏に仕へて江戸に第を賜ふ今の有樂町はその跡なりと傳ふ。

とす。

附

先年千ノ古宗佐物語に昔より中次は疵(きず)あるを嫌ふ。棗は厭はずといはれしも此意に合ふ。

ある時有樂公利休方へ御尋ありしにおりふし茶人に古き盖(ふた)取合せ居たるが其うち大ふりなるふたのとくとあはざりけるを却ておもしろく候とて有樂へみせ申す。その後公の茶入に件のとほり古きを取合せ休へ御みせ候へばかやうの物數奇一概によしとおぼしめしそ此茶入には新き盖のよく合候がましにて候といひし。

休、障子の紙のつぎめは、一分は細し一分半は太しといふ。

利休各晝の茶會の席にて勢多の橋の擬法師の中に形のみことなるが二つ有り見分る人なきにやとかたる。其座に古織居られたるが俄に見えず。何れもあやしむ所に晩方かへりまいられたれば休何の御用候へつるぞといへばいや別義も候はず彼ぎほうし試に見分け申さんためはや打にて勢多へ參り只今かへり候なり。扨二つの擬法師は東西のそこ〳〵にてや候と曰れたれば、休いかにもそれにて候と答ふ。一座の人々古織の執心ことに感じ申されき。

○予―宗旦なり

宗易、太閤の命に背く比予大德寺より京へ出るに山門の前にて利休が乘り物にのりて内へ入るに逢ぬ。休、乘物のすだれをあげて挨拶あり。おもへばそれが永決にて有しなり。

休、生害の後ある時太閤風爐の形(かた)何かと御好みありしがかやうのとき利休めを殺してことを欠(かく)と仰らるゝを。

○紫阜　紫野大德寺

權現樣利家公兼て宗易事不便がらせ給ひてよきをりとおぼし召少庵道安御免の御取成あそばされ下され早速御ゆるし蒙り、その後道安を御前へめし四疊半にて茶をたてさせ上覽ありて宗易が手前によく似たるとの御感に預る。

附

宗旦始は紫阜の喝食にて有しが秀吉公度々宗易へ御成の時分御給仕相勤め公御見知りあるにより、宗易認の數奇道具かの喝食にとらせよとの上意にて長櫃三棹拜領す。世に利休所持の道具といへるはおほくは千家より出て

宗且拜受のうちにるべし。天正十九年正月十三日宗易　太閤の御勘氣を蒙り不審庵を出て堺へ蟄居す。時に小棗一つ茶半袋を左右の袖中におさめ、乘物にのりて堺へおもむくよし流布の茶錄にみえたり。同じ比さるかたへつかはすせうそこに、

心たに岩木とならばそのまゝに
　みやこのうちも住よかるべし　　火　中

先年此自筆の文人のみせつるなり。其の心を曲げざること知ぬべし。又利休生害のこと多〳〵沙汰あれ共さしてのとがにあらざるゆへかみざまにも宗易所持の道具御自愛と成り世にもその物數奇あまねく人のめで侍ることになりぬ。又終りにのぞんで小姓に茶を點させ飲れけるがこの茶碗今よりは無用の物よと嘆じて庭に擲。かたはらに侍りし甫竹といふもの拾ひあつめ繼合せて其より傳へて今大阪にあり、かやうの物までをろそかにせざるはたゞ其人をしたふがゆへなり。

天正辛卯二月廿八日利休居士辭世

人生七十、力圍希咄、吾這寶劍、祖佛共に殺す。
　□□ゑ具足の一つ太刀今この時ぞ天になげうつ。

一とせ信長公より宗易へよき肩衝御所望のよし仰蒙る。その比利休天王寺屋宗及と不和なれども、よき肩衝所持するにより公へ御挨拶いたし茶入召しあけられ天王寺屋過分の黃金拜領す。これによて宗及一禮のため利休へ樽肴黃金しなん〳〵贈る。休その使者にあふてこの度茶入に依怙はならぬにより御挨拶申つるなり。日比の不和においては變ることあるべからず。しかるうへはこの贈り物受べき道理なしとてかへす。時の人その利なきこゝろざしを稱しき。

附

信長公へ宗易此の肩衝御挨拶申すのみにあらず、是より向公作物の御茶入の袋を易へ仰付られし時、此作物の記を相國寺惟高和尙書たりしと聞く。汝知らずやと宣へばさん候松永彈正茶の會席にて一覽申つるが、天正五年の亂に信貴の城に於て燒失仕り其寫堺に御座候とて取寄せ差上侍る。

昔年宗易茶器の新舊可否をわかち價を定るに私曲あるよし太閤へさかしら申者あり。かねて一事上意に背くのうへ終に生害に及ぶものか私曲なきことは宗及肩衝の挨拶にてしるべし。抑わが木像を龍寶の山門に上げ、船岡の墓しるしをおろし手水鉢に用ることはいかんぞや。尤僭したりといはんも然れども聊か至處をもて論せば儒には天地同根萬物一體といひ、釋には生佛一如とたてゝ、沒後貴賤をわかたず。其靈牌を佛殿に置高僧碩師もひとしく拜をなし院號をも授けらるるなり。また古きいしの橋杭礎石の類も一たび手水鉢にあらため井華水を湛へぬればうへつかたも御手にむすび漱ぎ御心地清涼ならしむ。夫れ如來はよく物を轉ず。もとより淨穢不二のことはり何ぞ怪ん、さる人千家に傳へ來る利休が四方佛の鉢は眞の佛にあらず、妓王妓女刀自佛の遺像なりといふ知らず。是も轉じていひならはせるにや。又近きころより石灯籠の大ぶりなるが晴嵐陰雨に年へたるを庭にうつしてみものとす。たま〳〵寺社の舊跡遠山深林の中に有をたづね禮をあつくして望む人少なからずと名高くきこゆるは春日の祓堂の灯籠三月堂にも建長六年十月十五日と彫付たる古代のものあり。京にては高桐院の燈籠利休所持今當院ニ有リ爲第一とす。其外太秦にも侍る世にこの類あらたにうつしてもてはやす人も侍るとぞ。

口切の時分宗易さる佗のかたへ鵙屋の宗安をともなひまいらせたれば、露地の中垣にふるき狐戸を釣りたり。宗安さびてをもしろく候とあれば、易われらはさびたりと存ぜず却て結構なる釣戸とこそ存れいかんとなればさだめてとをき山寺より所望し來るにはあらん。その人足等の雜用思ひはかるべし。たとへば佗の心ならば自身戶屋へゆきいかにも麁相なる猿戸がほしゐといはんに戶屋さやうならば松杉の板くづ續合せいたしまいらせんといひて出來たるをそのまゝ釣りてこそさびて面白しと申べけれ。かやうのことにて其人の茶湯はみえ侍る。

ある時今日庵主古宗佐へ物がたりに、宗易は尻脹の茶入を嗜て二つまで所持す。一つは三齋へまいらせ一つは予が家に傳へたるを若き時煩ひて厨乏かりけ

れば姪の九兵衛に其茶入替りにつかはし金子調させつるがそのまゝにてえ取りもどさず。先にはかゝるものともしらでうづもれやしつらん。茶入はあめ薬の一色なるものなりといはれし。

附

利休は静なる數奇道具を好みてけうとき物を愛せず、妻木といへる所持の茶入も飴くすりの一色にて侍るよしみたる人のものがたりなり。

今日庵は宗旦老人の別號明暦丁酉十二月十九日病て家に終る年七十八圓

明禪師其の肖像に賛す

今日庵中の舊主人、一生竟に風塵に走らず。言ふこと莫れ這の裡消息

絶すと、寫し出す丹青面目の眞

秀吉公聚樂におはしましけるときある雪の夜宗易をめしてこよひ町に茶湯すべきもの誰と御尋有しに上立賣に針屋が候と申上るさらば汝をつれて御なりあそばされんとて即刻渡御ありこゝろよく御茶まいり御褒美にあづかること人の耳にあれは語るに及ばず。昔のはり屋は僅四間口の家にて有しがかゝる所へ渡御ありしも茶の徳とこそ存れ。

附

一とせ休、雪の霞屋町の宅より蓑笠をきて紹知所へたづねられしが露地に入りてみの笠ぬくとて紹知迎に出たれば千鳥の香爐に火の取たるをこれ紹知とて右の袖より渡せば紹知左の手にうけとり、私も懐中候とて右の手より香爐をわたす。休はなはだ入興せらるゝとなり。

太閤夏の比大仙院へ御成のとき宗易に花つかうまつれと仰らる。幸窓前にうへ平かなる石をこたかくすへたるあり。其うへにかねの花入のおもしろきに水うちそゝぎて花を生たり。時に取てこの風流一ほに覺しめす。

附

利休物數奇輩を出ること多かり。昔長岡休夢の茶湯に圍爐裡の内隅もなくろくに見え侍りければ、庸軒其席にありてかやうにも仕り候やと尋申たれ

ば、宗易折々かくせられたるが面白かりつるとて三齊の嗜にてめされたるを我も見習ひ侍るとのたまふ。

又元伯老人休よりの傳ありて風爐の内に土器（かはらけ）を二枚立て茶湯いたされしを反古庵よくならひ置て。今人にも傳ふ。いづれもめづらしきことぞ。又先年さる人且翁へ見舞たれば折ふし茶湯前にて僕露地の掃除しつるを翁のみてあの片隅の蛛の巣ひとつはそのまゝ殘して仕まへとなり。古人の風流いまやうのたぐひにあらず感じ侍りぬとかたる。予も是を聞てかの兼好法師の何も事のとゝのほりたるはあしきことなり。し殘したるを扨うち置たるはおもしろくいきのぶるわざなり。といはれしをおもひあはせ侍りぬ。

道安暑氣の時分眞の手桶にはじめて水をうちて四疊半に置く。いにしへはせざることなれ共各これをよしとす。

附

其後風爐の茶湯にあつき比は水指のぬり蓋にも水をはじく。このときは小板のうへをのごひて茶巾を置がならひなり。

利休ある年の口切にふるき丸釜をいだしたれば例の七人衆こゝかしこたづねらる。其うち獨り似たる釜取出し茶湯あり。休各の物數奇いまだ至らぬと存る。たとへば某丸きを出さは却て四方なるを御出し候へかし。此釜よく似たれどもはや第二義におちておもしろからずといふ。もとより名物といはるゝ程のものはどこぞに勝れたる所有て第二におちず。又重名の品にもかぎらず輕き物にもありなん。予が家に宗易作の竹輪所持しつるを加州の太守御所望ありてまいらせたればめづらしき物とて御祕藏の餘り黃金數片賜る。是も宗易の手がらなり。

釜を上ぐる時重たる環の内へ指をいれて持は三十六ぺんの數珠をつまぐるやうにてあしきとて嫌ふ。右にては輪のそとを持ち左にては手の内に載て持が好（よし）、凡そ小座敷の客今のやうに居替ることは席さはがしきとて昔の人は前後同じ所になをるなり。

附

四帖半のざしきはゐ替りたるがよしと申傳ふ。古宗佐物語

○烏丸亞相―烏丸光廣

ある時宗且老人予が久須見鵜巣茶席にて咄し申され侍りしは昔は露地にじやり土を置て山路のおもかげをうつしつるが今はじやりを堅く打て手水鉢のあたり老人はすべりさうにてあやうし。又手水鉢も今はまへ石の間(あひ)とをくて柄杓のとりにくきは人の手もむかしにかはり長く成たるにやといひて笑ぬ。

附

休、雨の後山路の處々じやりの出たるを見て面白く思ひかく置れたる故古人はじやりを置と云て打とは云ざりしなり。

天正十六年十月北野大茶湯の時、豊臣公宗易を召つれられ方々茶亭の風流御遊覧ありて烏丸亞相のかこ居の前を過させ給ふを、易このうちによき肩衝御座候と申て入れまいらせ御目にかゝる。

山科のほとりにへちくわんといつる佗ありしが常に手取の釜一つにて朝毎糝といふ物をしたゝめ、食し終りて砂にてみがき、清水のながれを汲いれ茶を樂むこと久し。一首の狂歌をよみける、

手どりめよおのれは口がさし出たぞ
　増水たくと人にかたるな

ある時利休日比聞をよびたる佗なり。たづねてみんとてこれかれ伴ひまいられたれば、へらくわんが家の外面に石井あり。休人馬の輕塵いぶせかりけるを見て、此水にて茶は飲(のま)ず。各々いざ歸(かへ)らんといひてやゝ過るをへらくわん聞つけ、表に出てよびかけ、此の水は筧(かけひ)て取(とり)がそれでもお歸りあるかといふ。休その外の人々それならばとて立かへり、茶事こゝろよく時をうつされけるとなん。

附

いつの比なりけん。下京に福阿彌といふ□ありけり。是も家の貧きをいとひて茶三昧にて暮しつるが、一とせの春歌をよみてやさしきことに申傳ふ

煤はかず門松たてず餅つかず
　かゝる家にも春はきにけり

夜船閑話

○栂尾の上人　栂尾の明裏上人

本よりこれらの佗たる人桑門はさらなり。人間の榮耀林下の幽閑にしかざることはりを知り、生涯椀中の物を以て隱具とするのみにあらず。富る人も繁花の世事心を惱し歌舞の宴席却て氣をそこなふに至りて、しばらくも静處に退ひて心氣をやしなはんとおもはゞ、只此物に託して塵胸をすゝぎ俗慮を消遣すべし。夫れ古へ栂尾（とがのを）の上人宋朝の茗實を山園に培養したまひしより、遍く扶桑に生茂す。然に予嘗てもろこしの鳳團を試み侍りしが、近世宇治の極品におよばず。むべなりかく佗にすける人のおほきこと抑こゝに於て清閑をうる人おもはず無心の妙處にいたるも惣て一味の徳とやいはん。或至人は無味をあぢはふ。ひたすら一味を賞するも不可なり。いかんと問ふ。予茫然として答ることあたはず。時に　踈牖の竹影漸くまさに暮なんとす。

茶話指月集　終

解題

著者白隱は禪門近代の巨匠で、夙に四方に遊學し、後信州飯山の正受老人の許に投じて、その辛辣なる接化の手段を受け、毫も屈することなく、苦修錬行、遂に大事を畢了して、老人の印可を得たが、其の間、辨道に熱心して身體を顧慮せなかつたが爲めに肺及び腦を病みて醫師の治療も功を顯はさず、焦悴其極に達したが偶々白川の隱者白幽子を訪ひて内觀養生の祕訣を授かり、これによつて健康を回復することが出來た。

其後、白隱が駿河にあつて法幢を建つるや、門下に集る雲水、常に百有餘人、其の中には禪師の秋霜烈日の如き接化に逢ふて、疲勞倦怠、或は心火逆上して、正に發狂せんとする者を出すに至る、白隱これを憐みて、先きに白幽子より傳ふる所の内觀の心要を傳授してこれを快癒せしめた。本書は、禪の立脚地より此養生保健の法を述べたもので、禪師の寂後故紙堆裏にあつて紙魚の食むに任せてあつた草稿を某書肆の求めに應じて訂正上梓したものであるといふ。禪師の傳は文藝篇の標註にも掲げたが名は慧鶴、俗氏は長澤氏、駿河の原の松蔭寺に居り、明和五年十二月を以て寂す、齢八十四、勅諡を贈て神機獨妙禪師といふ。

序

寶暦丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を裁して、吾が鵠林近侍の左右に寄せて云はく、伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑話とかや云へる草稿あり。書中多く氣を錬り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、專ら長生久視の祕訣を聚む。謂はゆる神仙錬丹の至要なりと。是の故に世の好事の君子是れを思ふ事、荒草の雲霓の如し。偶〳〵雲水の徒侶、竊に傳寫し來るあるも、秘重し珍藏して人をして見せしめず、天瓢むなしく櫃にをさめて匿したるが如し。願はくは是れを梓に壽かふして、以て其の渇を慰せん。聞く老師常に人を利するを以て老後を樂しみ現ふ。若し夫れ人に利あらば、師豈に是れを吝しみ玉はんやと。二虎含み來て師に呈す。師微々として笑ふ。此において諸子、舊書櫃を開けば、草稿蠹魚の腹中に葬らるゝ者中葉に過たり。諸子卽ち訂正傳寫して、既に五十來紙を見る。卽ち封裏して以て京師に寄せんとす。予が馬歯一日も諸子に長たるを以て、其の端由を書せん事を責む。予も亦辭せず

○鵠林―は白隱禪師の號

して書す

云く、師鵠林に住する事大凡四十年、鉢嚢を掛けしより以來、雲水參玄の布袴子纔に門閾に跨れば、師の毒涎を甘ない、痛棒を滋しとして、辭し去ることを忘るゝ者或は十年、或は二十年、鵠林々下の塵と成る事も亦總に顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各々西東五六里が間に分れて、舊舍廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として淸苦す。朝艱暮辛、晝餒夜凍、口に投ずる者は菜葉麥麩、耳に觸るゝ者は熱喝垢罵、骨に徹する者は瞋舉痛棒、見る者顏を攢め、聞く者肌汗す。鬼神も亦涙を浮べつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其の初め來る時は、采玉、河晏が美貌有りて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島が形容枯稿、顏色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂有つてか片時も湊泊する事を得んや。是の故に往々に參窮度に過ぎ、淸苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疝癖塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐み、是れを愁ひて、師不豫の色有る者連日、乍ち忽俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の臭乳を絞つて、是に授るに內觀の秘訣を以てす。乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五內調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是れを治せんと欲せば、縱ひ華陀扁倉と云へども、輒く救ひ得ること能はじ、我に仙人還丹の秘訣あり。儞が輩試に是れを修せよ。奇功を見る事、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を拋下し、話頭を拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず、眼を合せざる以前に向つて、長く兩脚を展べ、强く蹈みそろへ、一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々に此の觀を成すべし。我此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目なにの鼻孔がある。我此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家鄉、家鄉の何の消息かある。我が此の氣海丹田、總に此れ我が唯心の淨土、淨土何の莊嚴がある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀、彌陀何の法をか說くと打返へし〳〵、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つもらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下瓠然たる事、いまだ篠打ちせ

ざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將ち去て、五日七日乃至三七日を經たらむに、從前の五積六聚氣虛勞役の諸症、底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り持ち去れ、此において諸子歡喜作禮して密々に精修す。各々悉く不思議の奇功を見る。功の遲速な進修の精麤に依るといへども、大半皆全快す。各々内觀の奇功を讃嘆して休まず。師の曰く、儞が輩心病全快を得て以て足れりとする事勿れ、轉た治せば轉た參ぜよ、轉た悟らば轉た進め。老僧參學の時、難治の重病を發して、其の憂苦、諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひそかに思惟すらく、生きて此の憂愁に沈まんよりは、如じ早く死して此の革嚢を捨てんにはと。何の幸ぞや、此の内觀の秘訣をつたへて、全快を得る事今の諸子の如し。至人の云はく、此は是れ神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歳なるべし。其の餘は計り定むべからず。予則ち歡喜に堪えず、精神忘らざる者大凡三年。心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事を覺ふ此に於て重ねて心に竊に謂へらく、縱ひ此の眞修を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならんのみ。老狸の舊窠に睡るが如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪、鐵拐、張華、費張が輩を見ず。如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虛空に失つて死せず、虛空に後れて生せざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはと。此に於て眞正參玄の上士兩三輩を得て、内觀と參禪と共に合はせ並らべ貯へて、且つ耕し且つ戰ふ者、蓋し玆に三十年、年々一員を添へ、二肩を增し得て、今既に二百衆に近し。其の中間方來の衲子勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底の憐み、密に此の内觀の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉た悟れば、轉た進ましむ。馬年今歳古稀に越えたりと云へども、半點の病患なく、齒牙全く搖落せず。眼耳次第に分明にして、動もすれば靈鏁を忘る。毎月兩度の決施終に怠倦せず。請に他方に應じて三百五百の海衆を聚會して、或は五旬七旬を經に錄に雲水の所望に隨て胡說亂道するは、大凡五六十會に及ぶと云へども、終に一日も罷講齋を鎖さず、身心健康氣力は次第に二三十歳の時には遙に勝されり。是れ皆彼の内觀の奇功に依る事を覺ゆ。住庵の諸子各々悲泣作禮して云はく、吾が師大慈大悲願はくは内觀の大略を書

せよ。書して留めて、後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師卽ち頷す。立處に草稿成る。稿中何の說く處ぞ、曰く大凡生を養ひ長壽を保つの要、形を鍊るにしかず、形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝るときは氣聚る。氣聚る時は卽ち眞丹成る。丹成る時は形固し。形固きときは神全し。神全きときは壽し。是れ仙人九轉還丹の祕訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住庵の諸子此心要を勤めてはげみ、進んで怠らずんば禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到て、年來疑團あらむ人には、大に手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ。何か故ぞ、月高して城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正二十五書

窮乏庵主飢凍炷香稽首題

夜船閑話

白隱禪師

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を起激し、精錬刻苦する者、既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落飾す、從前多少の疑惑、根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して漚滅す。自ら謂へらく、道人を去る事寔に遠からず、古人三十二年是れ何の揑怪ぞと、怡悅蹈舞を忘るゝ者數月、向後日用を廻顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊、總に脫洒ならず。自ら謂へらく猛く精彩を着け、重て一回捨命し去らんと。こゝに於て牙關を咬定し、隻眼睛を瞪開し、寢食ともに廢せんとす。既にして未だ期月に亘らざるに、心火逆上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、擧措恐怖多く、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に淚を帶ぶ。此に於て遍く明師に投

○落飾―髮を剃るを落飾といふ―師は王公の出家落飾より云ふ―松蔭寺單巖傳公に謁して年十五なり。時に年十五なり。

し、廣く名醫を探ると言へども、百藥寸功なし。或人曰く、城の白河の山裏に巖居せる者あり、世人是れを名けて白幽先生と言ふ。靈壽三四甲子を閲みし、人居三四里程を隔つ。人を見る事を好まず、行くときは必ず走つて避く。人其の賢愚を辨ずる事なし。里人專ら稱して仙人とす。聞く故の丈山氏の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す、人あり禮を盡くして咨叩するときは、稀れに微言を吐く。退て是れを考ふるに大に人に利ありと。此に於て寶永第七庚寅孟正中浣、竊に行纏を着け、濃束を發し黑谷を越え、直ちに白川の邑に到り、包を茶店におろして、幽か巖栖の處を尋ぬ、里人遙に一枝の溪水を指す。卽ち彼の水聲に隨て遙に山溪に入る。正に行く事里ばかりに、乍ら流水を蹈斷す。樵徑もまたなし。時に一老夫あり、逢に雲煙の間を指す。黃白にして方寸餘なる者あり。山氣に隨て或は顯はれ或は隱る、是れ幽か洞口に垂下する所の蘆簾なりと。予卽ち裳を褰けて上る。巉巖を蹈み蒙茸を披けば、氷雪草鞋を咬み、雲露衲衣を厭す、辛汗を滴し、苦膏を流して、漸く彼の蘆簾の處に到れば、風致清絕、實に物表に丁々たる事を覺ふ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗す。且らく

○白幽先生―京都白川の山中に住し、石川丈山の師友なり、寶永六年八月九日示寂す。其の亨年長壽にして齡數詳かならず。

○丈山氏―洛東の隱士なり、名は凹、初の名は重之、嘉右衞門と稱す。丈山、六々山人、四明山人、凹凸窩、犬拙、烏鱗、山木山材、三足等の數號あり。人と爲り驍勇武事に熟練す。書を好み、詩歌を善くし、茶道に通ず、孝養の譽あり、寛文十二年五月廿三日歿す。

○山中半死の陳人―山中に隱れて居る腐爛無用の人の意。

○五內―下臟をいふ。卽ち脾、肺、腎、肝、心を稱するが、此處では只單に體內の意なり。

○禪病―參禪の眞訣を受けず、種々の妄見に陷り、種々の疫病を生じ、心身ともに病を起すを云ふ。

○扁倉―支那古代の名醫二人の姓、卽ち此處では名醫

巖根に倚て數息する者數百、少焉あつて衣を振ひ襟を正して、畏つ〳〵鞠躬して簾子の中を望めば、朦朧として幽か目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に到り、朱顏麗ふして棗の如し。大布の袍を掛け輭草の席に坐せり、窟中纔に方五六笏にして全く資生の具無し。机上只中庸と老子と金剛般若とを置く。予則ち禮を盡くして苦ろに病因を告げ且つ救ひを請ふ。少焉幽眼を開いて熟々視て、徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死の陳人、攄栗を拾ふて食ひ、麋鹿に伴つて睡る。此の外更に何をか知らんや。自ら愧づ遠く上人の來望を勞する事を。予卽ち轉た咨叩して休まず。時に幽恬如として予が手を投らへて、精しく五內を窺ひ九孔を察す。爪甲長きこと半寸、慘乎として顙を攢めてつげて言はく、己哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す。寔に醫治し難き者は公の禪病なり。若し鍼灸藥の三つの物を恃んで、而して後に是れを救はんと欲せば、扁倉(へんそう)力をつくし華陀(けた)顙を攢むるも、奇功を見る事能はじ。只今既に觀理の爲めに破らる。勤めて內觀の功を積まずんば、終に起つ事能はじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予曰く、願くは內觀の要祕を

の意。
○華陀―右の名醫なり。三國魏志方伎傳に、華陀字元化とあり。

聞かん。學びがてらに是れを修せん。幽粛々如として容をあらため、從容として告げて曰く、嗚呼、公の如きは問ふ事を好むの士なり。我か昔聞ける處を以て微しく公に告げんか。是れ養生の祕訣にして、人の知る事稀れなり。怠らずんば必ず奇功を見ん。久視も亦期しつべし。夫れ大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生類、先天の元氣中間に默運して、五臟列り經脉行はる。衛氣營血、互に昇降循環する者、晝夜に大凡五十度、肺金は牡藏にして腸上に浮び、肝木は牡藏にして腸下に沈む。心火は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む。五臟に七神あり、脾腎各々二神を藏くす。呼は心肺より出で、吸は腎肝に入る。一呼に脉の行く事三寸、一吸に脉の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脉一身を巡行する事五十次、火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し人察せず觀照或は節を失し、志念或は度に過ぐるときは、心火燔衝して肺金焦薄す。金母苦しむときは、水子衰減す。母子互に疲傷して、各々五位困倦し、六屬凌奪す。四大增損して、各々百一の病を生ず。百藥功を立する事能はず、衆醫總に手を束ねて、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふ事は國を守るが如し、明君聖主は、常に心を下に專にし、暗君庸主は常に心を上に恣にす。上恣にするときは、九卿權に誇り、百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧る事無し。野に菜色多く、國餓莩多し。賢良潜み竄れ、臣民瞋り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて。終に民庶を塗炭にし、國脉永く斷絶するに到る。心を下に專らにするときは、九卿儉を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝ事なし。農に餘まんの粟あり、婦に餘まんの布有りて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥え國强く、令に違するの丞民なく、境を侵すの敵國なし。國刁斗の聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。人身もまた然り。至人は常に心氣をして下に充たしむ。心氣下に充つるときは、七凶内に働く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず。營衛充ち心神健かなり、口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。庸流はつねに心氣をして上に恣にす。上に恣にするときは、三寸の火、右寸の金を尅して。五官縮り疲れ、六親苦しみ恨む。是の故に漆園曰く、眞人の息は、是れを息するに踵を以てし、衆人の息は、是れを息するに喉を以てす。許俊が曰く、蓋し

○刁斗―銅にて作りたる鐎壺は飲食を炊き、夕にはこれを擊ちて夜行すると、昔の軍略なり。

氣下焦に在るときは、其の息遠く、氣上焦に在るときは、其の息促まる。上陽子が曰く、人に眞一の氣有り、丹田の中に降下するときは、一隔また復す。若し人始初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是れが信とすべし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん事を要せよ。夫れ經脉の十二は、支の十二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一歳を全ふするが如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是れを地雷復と言ふ。冬至の候なり。眞人の息は、是れを息ずるに踵を以てするの謂か。三陽下に位し、三陰上に居す、是れを地天泰と言ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象、人是れを得るときは、營衛充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上に止まる。是れを山地剝と言ふ。九月の候なり。天是れを得るときは、林苑色を失し、百世荒落す。是れ衆人の息する喉を以てするの象。人是れを得るときは、形容枯槁し、齒牙搖落す。所以に延壽書に言はく、六陽共に盡く、則ち是れ全陰の人死し易し。須らく知るべし、元氣をして常に下に充しむ。是れ生

○六欲―色欲、形欲、威儀、姿態欲、言語音聲欲、細滑人相欲なり。

を養ふ樞要なる事を。昔吳契、初石臺先生に見ゆ、齋戒して鍊丹の術を問ふ。先生の曰く、我に元玄眞丹の神秘あり。上々の器にあらざるよりんば、得て傳ふべからず。右へ黄成子是れを以て黄帝に傳ふ。帝三七齋戒して是れを受く。夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり爾の六欲を去り、五官各々其の職を忘るゝときは、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ。是れ彼の大白道人の謂はゆる我か天を以て事ふる所の天に合せる者なり。孟軻氏の謂はゆる浩然の氣、是れをひきひて臍輪氣海丹の田間に藏めて、歳月を重ねて是れを守て守一にし去り、是れを養ふて無適にし去て、一朝乍ち丹竈を掀飜するときは、内外中間八紘四維、總に是れ一枚の大還丹、此の時に當て初めて自己卽ち是れ天地に先つて生ぜず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん。是れを眞正丹竈功成る底の時節とす。豈に風に御し霞に跨り、地を縮め水を蹈む等の鎖末たる幻事を以て懐とする者ならんや。大洋を攪いて酥酪とし、厚土を變じて黄金とす。前賢曰く、丹は丹田なり。液は肺液なり。肺液を以て丹田に還へす。是の故に金液還丹と言ふ。予が

曰く、謹んで命を聞いつ、且らく禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ處は、李士才が謂はゆる請降に偏なる者にあらずや。心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからむか。幽微々として笑つて言はく、然らず、李氏いはずや、火の性は炎上なり。宜しく是れを下らしむべし。水の性は下れるに就く、宜しくこれをして上らしむべし。水上り火下る。是れを名けて交を言ふ。交るときは既濟とす。交らざるときは未濟とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂はゆる清降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊を救はんとなり。古人言はく、相火上り易きは、身中の苦しむ所、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して、靜を主り、相火は下に處して、動をつかさどる。君火は是れ一心の主なり、相火寄輔たり。蓋し相火に兩般あり。謂はゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に比す。是の故に言ふ、龍をして海底に歸せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海か澤か、水にあらずと言ふ事なし。是れ相火上り易きを制するの語にあらずや。又曰く、心勞煩するときは、虛して心

○李氏―老子なり。楚の人、姓は李、名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ。その言行錄は老子道德經なり。

熱す。心虛するときは、是れを補するに心を下して以て腎に交ゆ。是れを補と言ふ。既濟の道なり。公先きに心火逆上して、此の重病を發す、若し心を降下せずんば、縱ひ三界の秘密を行し盡したりとも、起つ事得じ。且つ又我が形模、道家者流に類するを以て、大に釋に異なる者とするか、是れ禪なり。他日打發せば、大に笑ひつべきの事有らむ。夫れ觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者は邪觀とす。向に公多觀を以て此重症を見る。今是れを救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清凉にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん、是れ眞觀清淨觀なり。言ふ事なかれ、しばらく禪觀を放下せんと、佛の言はく、心を足心にをさめて、能く百一の病を治すと。阿含に、酥を用ゆるの法あり。心の勞疲を救ふ事尤も妙なり。天台の摩訶止觀に、病因を論ずる事甚だ盡くせり。治法を說く事も亦甚だ精密なり。十二種の息あり、よく衆病を治す。臍輪を緣して豆子を見るの法あり。其の大意心火を降下して、丹田及び足心に收むるを以て至要とす。但た病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く。蓋し繫緣諦眞の二止

○摩訶止觀―隋智二十卷、天台三觀一頭說、大部の心門を開說せるものなり。

○永平の開祖師―曹洞宗の開祖道元禪師なり。貞應二年明全和尚に從つて入宋。寧宗の嘉定十七年天童山にのぼり如淨禪師に謁す。

○白雲和尚―臨濟宗、東福寺の僧、讃岐の人、比叡山に登り、行泉法師に師事し法華玄義及摩訶止觀を聞く十七才得度す永仁五年十二月二十五日示寂、壽七十五。

あり。諦眞は實相の圓觀、繫緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是れを用ゆるに大に利あり。古へ永平の開祖師、大宋に入て如淨を天童に拜す、師、一日、密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子、坐禪の時、心を左の掌の上におくべしと。是れ卽ち顗師の謂はゆる繫緣止の大略なり。顗師初め此の繫緣內觀の秘訣を敎へて、其の家兄鎭愼が重痾を、萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に說けり。また白雲和尚曰く、我つねに心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し衆を領し、賓を接し機に應じ、及び小參普說七縱八橫の間において、是れを用ひてつくる事なし。老來殊に利益多き事を覺ふと。寔に貴ぶべし。是れ蓋し素問にみゆる恬澹虛無なれば、眞氣是れにしたがふ。精神內に守らば、病何れより來らむと言ふ語に本つき玉ふ者ならむか。且つ夫れ內に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す。これ生を養ふ至要なる事を知るべし。彭祖が曰く、和神導氣の法、當さに深く密室を鎖ざし、牀を安じ席を煖め、枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて、動かざる事三百息を經て、耳聞く處なく、目見る處なく、斯くの如くなるときは、寒暑も侵す事能はず、蜂[illegible]も毒する事能はず。壽三百六十歲、是れ眞人に近しと。又蘇內翰が曰く、已に飢て方に食し、未だ飽かずして先つ止む。散步逍遙して、務めて腹をして空からしめ、腹の空なる時に當て、卽ち靜室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に至り、百より數へ放ち去て千に至りて、此身兀然として、此心寂然たる事虛空と等し。斯の如くなる事久ふして、一息おのづから止むる。出でず入らざる時、此息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん。此時人に尋ねて路頭を指す事を用ひず。只要す尋常言語を省略して、儞の元氣を長養せん事を。是の故に言ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に默すと。予が曰く、酥を用ゆるの法、得て聞いつべしや。幽が曰く。行者定中四大和せず身心共に勞疲する事を覺せば、心を起して應さに此の想を成すべし。

譬へば色香清淨の輭蘇鴨卵の大さの如くなる者、頂上に頓在せんに、其氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるほし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃脊梁臀骨次第に沾注し將ち去る。此の時に當て胸中の五積六聚、疝癖愧痛、心に隨て降下すること、水の下につくが如く、歷々として聲あり。遍身を周流し、雙脚を溫潤し、足心に至つて卽ち止む。行者再び應さに此觀を成すべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積上り堪えて、暖め蕉す事恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是れを煎湯して浴盤の中に盛り湛えて、我が臍輪已下を漬け薰ずが如し。此の觀をなすとき、唯心所現の故に、鼻根乍ち希有の香氣を開き、身根俄に妙好の輭觸を受く。身心調適なる事、二三十歲の時には遙に勝れり。此の時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず。若しそれ勤めて怠らすんば、何れの病が治せざらむ、何れの德がつまざらん。何れの仙か成せざる、何れの道か成せざる。其の功驗の遲速は、行人の進修の精麤に依るらくのみ。走始め艸歲の時、多病にして公の患に十倍しき、衆醫總に顧みざるに到る。百端を窮むといへども、救ふべきの術なし。此に於て上下の神祇に祈て天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや計らずも此の輭酥の妙術を傳受する事を。歡喜に堪えず、綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半銷除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。癡々兀々、いつしか忘れたるが如し。馬年今歲何十歲なる事もまた知らず。中頃端由有りて、若丹の山中に遭逢する者、大凡三十歲、世人都て知る事なし。其中間を顧るに、恰も黃粱半熟の一夢の如し。今の此の山中無人の所に向て、此枯稿の一具骨を放て、太布の單衣纔に二三片を掛け、嚴冬の寒威綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するにいたらず。山粒すでに斷えて穀氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終いに凍餒の覺もなき事は、皆此の觀の力ならずや。我今旣に公に告くるに、一生用ひ盡くさゞる底の祕訣を以てす。此の外更に何をか言はんやと言つて、目を收めて默坐す。予も亦淚を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末纔に殘陽を掛く、時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで、且づ〳〵回顧すれば、遙に幽が巖窟を離れて

自ら迓り來るを見る。即ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し、恐らくは歸客を惱せん。老夫しばらく皈程を導かんと言つて、大駒屐を着け、痩鳩杖をひき、巉巖を踏み嶮岨を陟る事、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下りて、彼の溪水の所に到つて、卽ち曰く、此の流水に隨ひ下らば、必ず白川の邑に到らむと言つて、慘然として別る。且らく柴立して幽が回歩を目迓するに、其の老歩の勇壯なる事、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し。且つ羨み且敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐する事能はざる事を。徐々として歸り來て、時々に彼の內觀を潛修するに、纔に三年に充たざるに、從前の衆病、藥餌を用ひず鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず、從前手脚を挾む事得ず、齒牙を下す事得ざる底の難信、難透、難解、難入底の一着子、根に透り底に徹して、透得過して大歡喜を得る者、大凡六七回。其の餘の小悟恰悅、蹈舞を忘るる者數を知らず。妙喜の謂はゆる大悟十八度小悟數を知らずと。初めて知る、寔に我を欺かざる事を。古へ二三輩の襪を着くといへども、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今旣に三冬嚴寒の日と言へども、襪せず爐せず、馬齒すでに古稀を越えたりといへども、指すべき半點の小病も亦なき事は、彼の神術の餘勳ならんか。言ふ事なかれ、鵠林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して、以て佗の上流を誑惑すと。是れつとに靈骨あつて、一槌に旣に成する底の俊流の爲に設くるにあらず、癡鈍予が如く、勞病予に類する底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しき補ならんか。只恐る別人の手を拍して大笑せん事を。何が故ぞ、馬枯箕を咬んで午枕に喧し。

夜船閑話　終

配所殘筆

解題

本書は著者山鹿素行が「聖教要錄」を著はし當時幕府の官學とせる程朱の學說を批判したるのみならず、兵學を以て一家を成し、其門に集るもの頗る多きを以て幕府の忌む所となり寛文六年、播州赤穗に配流せらるゝ身となりし時の體驗記である。素行の學說に就ては「國體篇」幷に「士道篇」に收め、且つ略傳も之れを叙したれど、本書は自己の體驗記にして、且つに自己の略歷等をも加へられたれば、此偉人が如何に其の心要を養ひしかを見るべき好著として之を收めた。

配所殘筆

山鹿素行

○幼少より六歳の頃の事、

○九歳より十一歳の頃の事、

我等儀、凡下之者、殊更無德短才、中々御歷方の御末席へも出座仕候者に無レ之候處、幼少之時分より、似合に人も存じ候て、御歷々方御取持被レ下候。此段全く我等德義の故とは不レ存候。天道之冥加に相叶ひ候故に可レ有レ之、愈々天命をおそれ候て、物每日用相愼候事に候。

六歳より親申付候て、學問被レ爲レ仕候へ共、無器用に候て、漸く八歳之頃迄に四書五經七書詩文之書大方よみ覺候。

九歳之時、稻葉丹後守殿御家來塚田李助我等親近に候故、我等を林道春老弟子に仕度由賴み入り候。李助序に丹後守殿迄申上候へば、幼少にて學問仕候事奇特成る由被レ仰、於二御城一林道春へ直に丹後殿御賴被レ下候。就ては李助拙者を同道仕候て道春へ參り、道春永喜一座にて、我等に論語の序、無點の唐本に

て讀せ被レ申候。我等讀候へば、山谷も取出し候て被レ爲レ讀候、永喜被レ申候は、幼少にて如レ斯讀候事奇特に候。乍レ然田舍學問之者、師を仕候と相見え、點惡敷候由被レ申候、道春も永喜同意に被レ申候て感悅被レ仕、別而念頃に候て、十一歲迄以前讀候書物共又點を改め、無點之本にて讀直申候。

○十歲より十一歲の頃の事。

十一歲の春、歲旦之詩を初て作候て道春へ見せ候へば、一字改被レ申候て、則序文を書き幼少之述作別而感入候之由書狀被レ副レ之、和韻被レ仕候。

同年堀尾山城守殿家老揖斐伊豆我等へ被レ懸レ目候て、則山城守殿へ被レ召寄、書物を讀、伊豆是非共山城守殿へ奉公に出候樣、二百石は可レ被レ下由申候へ共、我等親同心不レ仕候。

十四才之頃は、詩文共に達者に仕候故、傳奏飛烏井大納言殿被レ爲二聞召一被二召寄一、卽座に詩を作候て懸二御目一候處、大納言殿和歌を御詠吟候て和韻被レ下候。烏丸大納言殿被レ及二聞召一候て、卽座に章句を被二成下一候。乍二慮外一我等も卽座に對を仕候。若輩の時分殊更に卽座の事に御座候間、只今申候ては笑草成儀に御座候へ共、各御感不レ淺候、其後兩公御懇請に被二成下一、折々奉レ得二御意一候て、

○十七歲より二十一歲の頃の事。

詩文贈答御座候。

十五歲之時、初て大學之講釋仕、聽衆大勢有レ之候。

十六歲之時、大森信濃守殿（其頃者佐久間久七）黑田信濃守殿（其頃者源右衞門）御所望にて、孟子之講釋仕候。蒔田甫庵老論語御所望、是亦同年講釋。いづれも翌年迄に講終候。是又若輩之時分故、定て不埒成事計可レ有レ之候へ共、其時分之義、蒔田權助殿富永甚四郎殿抔今以能覺候。

我等幼弱より武藝軍法不レ怠候。十五之時に尾畑勘兵衞殿北條安房守殿へ逢申候て兵學令二稽古一、修行候。廿歲より內にて門弟中に我等大方上座仕候て、則北條安房守殿筆者にて尾畑勘兵衞殿印免之狀給候。

廿一歲之時尾畑勘兵衞殿印可被レ仕候て、殊更に門弟中一人も無レ之候、印可之副狀と申候を我等に被レ與候。筆者は高野按察院光宥にて御座候。其文に、於レ文而感二其能勤一、於レ武而歎二其能修一、噫有二文章一者必有二武備一、古人言我又言と、末句に我等を御稱美之此文言をば、勘兵衞殿直に御好に御座候。

十七歲之冬、高野按察院光宥法印より神道令二傳受一候。神代之卷者不レ及レ申、

神道之祕傳不レ殘令二傳受一候。其後壯年の頃、廣田坦齋と申忌部氏之嫡流之者有レ之、根本宗源の神道令二相傳一候。其節忌部氏神道之口訣不レ殘相傳候書付證文を越候。其中頃より石出帶刀參候て、我等へ斷り神書承候。坦齋は頓に死去仕候に付、神書之事帶刀事拙者を賴候て、合點不レ參候は、所々承候得者、是又其書付今以有レ之候。

（二十二歳より二十四歳の頃の事。）

同年より歌學を好み、其廿歳迄の內に源氏物語不レ殘承候、源語祕訣迄も令二相傳一候。伊勢物語、大和物語、枕草紙、萬葉集、百人一首之部抄、三代集迄、廣田坦齋相傳仕候。依レ之源氏私抄、萬葉枕草紙三代集等之私抄注解大方撰述仕候て、詠歌に志ふかく、一年に千首の和歌を詠候へ共、存候仔細有レ之、其後は捨置候。今以て右廣田坦齋方より歌學の儀も不レ殘相傳仕候段書付御座候、尤職原抄官位の次第道春講釋に不レ殘承候、其後是又坦齋に具に承候て、猶合點不レ參候所は菊亭大納言殿へ申上候て、大納言殿より被レ染二御筆一、一々の口傳御書付被レ下候。此段人々存候事に候。就ては我等に職原を傳授仕候者數多候。若年の時より湫兵右衞門殿、小栗仁右衞門殿御取持にて、紀伊大納言樣へ七拾人扶持被二下

置一被二召出一、御小姓近習に可レ被レ召之由御約束にて、頓て御目見の用意仕候。內證者岡野權右衞門殿萬事御取持候。其節阿部豐後守殿被レ及レ聞、卽尾畑勘兵衞殿、北條安房守殿被レ成二御賴一、我等を御抱被レ成度由被レ仰候へ共、右之御先約故御斷申上候。然る所大納言樣御事豐後守殿御抱有レ之度由被レ成二御聞一、布施佐五右衞門殿爲二御使者一兵右衞門殿仁右衞門殿迄被二仰出一候は、豐後守殿御抱有レ之度由御申者を、大納言樣へ御引取被レ成候段、御遠慮に思召され候、たとへ御家來にて有レ之共、豐後守殿抔御所望之者に有レ之候は可レ被レ遣候。豐後守殿御用之事者、御公儀之御用同意に候間、豐後守殿へ被二召抱一候樣に可レ仕候。其段勘兵衞殿安房守殿へも右佐五右衞門被レ遣候由に候。佐五右衞門もはや可レ被二召抱一候段御兩所へ御約束被レ成候て御座候、只今此段如何に可レ有二御座一候と申上候へば、兵右衞門殿仁右衞門殿御事心易義に候間不レ苦候由被二仰出一候由に候。拙者奉レ存候者、大納言樣右之通り御遠慮被レ遊候上者、豐後守殿にも御抱被レ成間敷か、其上御老中家は遠慮仕候仔細御座候間、此方より左右方へ御斷申上度候段、岡野權右衞門殿御相談仕候て、其分に罷成候、右兵右衞門殿は、謙信之軍法者、御

歷々方に弟子衆大勢候得者、我等弟子に可レ被レ成候て、兵學御勤御念頃に候、仁右衞門殿者、我等に鞠身のやはら御相傳候て、奥儀迄承候故、別して得二御意一候。岡野權右衞門殿は、我等若年之時分より書物御聞き、殊に兵法之弟子に被レ成候て御一類中不レ殘我等に兵學御聞候故、御心易得二御意一候。右之翌年加賀松平筑前守殿拙者儀被レ及二聞召一可二召抱一由、町野長門守殿御取持に、拙者親申候は、知行千石不レ被レ下候はゞ罷出候事無用に可レ仕候旨申候て留申候。筑前守殿にも七百石迄は可レ被レ下候由御沙汰候由に長門守殿御申候由承候。正保四年丁亥秋大猷院樣北條安房守殿へ城取之作法本圖被二仰付一之時分、拙者瘧り相煩候て罷在候處へ、安房守殿私宅へ御出候て、右之本圖御相談にて、陰陽之兩圖出來候。右本圖之書付幷目錄迄、拙者と相談之上被二書付一候、其書付不レ殘拙者之所に御座候、其節久世和州公、安房守殿へ御出御座候て懸二御目一候、御覺可レ被レ成候。

拙者廿五歳之時、松平越中守殿拙者を御呼被レ成、學問兵學之御詮議御議論御座候。拙者申上候通御得心被レ成、別而御大慶被レ成、則被レ爲レ遂二誓狀一候て、拙者に兵學御相談被レ成候。右御誓狀之翌日、三輪權右衞門先達而被レ遣候、御太刀

○二十五歳の頃の事。

馬代書時服被レ下候、追而越中守殿爲二御禮一私宅へ御來臨被二成下一候。

其以後は毎度御懇意之詩文など折々御贈答被レ成候。拙者文章を書き候を表具被二仰付一候て、拙者御招請之時分御座敷へ被レ懸候。誠冥加之至却而迷惑仕候段、度々御斷申上候。其段者淺野因州公能く御存じ、常に被二仰出一候。越中守殿御事は、其頃六十に被レ爲レ成、御門葉と申、御譜代之御大名には珍敷御學問にて、兵法者尾畑殿仰可迄御究、東海道一番之御大名、人皆崇敬仕候處、拙者御信仰不二大方一候間、御答問之義迄委しく書付置候。其段今以家中衆被レ存候。

○老子莊子の講釋申上候事

同年丹羽左京大夫殿兼而我等に兵法御聞候、兵書之次而に、莊子之講釋御所望候て、折々講談申上候。荒尾平八郎殿揖裴與左衞門殿など御聞候。其時分は我等事老子、莊子之學を好候て講釋申上候。然るに武田道安事明壽院に老莊相傳候。近代世上に莊子之講釋は無レ之、拙者讀候事無二心許一候間、一坐聞申度之由を淺野因州公御賴被レ申、因州公拙者へ御尋被レ成候て、道安事丹羽左京大夫殿亭にて一座仕候て、拙者莊子聞被レ申候、道安殊の外、拙者を褒美不二大方一候。其段後迄因州公御咄に候。道安は醫師殊更學問も廣く無レ之候へ共、明壽院以來に不レ承

候由、別而褒美被レ仕候故、書付候事に候。

大猷院樣御前へ祖心昵近仕られ候時分、祖心被レ申候は、其方義御次で御座候て具達二上聞一候。折に其方事上意有レ之間、必ず家中へ奉公に罷出候事無用に可レ仕候。何卒御家人に罷成候やうに取持可レ被レ申由被レ申候。松平越中守殿御念頃故、右之次第具に御内意申上候へば、一段之之に候。表向越中守殿御取持可レ被レ下候。其方事松平伊豆守殿兼而能御存被レ成候間、當公方樣へ被二召出一候樣に仕候はゞ、早速首尾可レ仕候。祖心へも其段御相談可レ被レ成、先づ酒井日向守殿へも被二仰遣一候間、掛二御目一置候へと被レ仰候、御家老三輪權右衞門を差し添へられ、日向守殿へ拙者を遊され、懸二御目一候。其後越中守殿仰せられ候は、酒井空印公へ拙者事具に御物語被二成置一候間、左樣に心得候樣に被レ仰候。其節空印公事上意にて祖心下屋敷へ振舞申され候時分、拙者も被二召出一、御念頃之上、越中守殿拙者噂具に被仰候由御挨拶被レ成候。久世和州公上意にて祖心振舞被レ成。道春被二召寄一、老子經之講釋御座候時分、和州公被二仰下一、拙者も右之末座へ被二召出一候。祖心後に被レ申候者、此段皆上意に候間、難レ有可レ奉レ存候由被二申聞一候。卯年二

○皆上意候間難レ有可レ奉レ存候。

月御近習番頭駒井右京殿御事阿部伊勢守殿（其頃式部と被レ申小性被レ仕候）を御賴み成され、拙者弟子に被レ成、兵學被レ成二御聞一度由仰せられ候間、幸に御近所に北條安房守殿居被レ申候間、是に御相傳可レ然と達つて御斷り申上げ候へ共、思召入り有レ之由被レ仰候間、任二御意一候而參候所、急度被レ成二御馳走一候て、兵書御聞き被レ成、早速御登城候。御兩所の御咄は拙者不レ承候。脇にて承候へば、右京殿被二召寄一候事上意にて御座候由承候。此段具に祖心へ物語仕候へば、大方上意にて可レ有レ之候間、彌々以て諸事愼み、家中抔へ奉公は不レ入義に可レ存之旨被レ申候。其後薨御被レ爲レ成候。松平越中守殿其年極月御逝去に候。

翌辰五年淺野內匠頭拙者へ直に約束仕られ候て色々念頃の上、知行千石宛行はれ候。拙者儀相應の奉公申し付けられ候樣に達而賴み申し候へ共、いかゞ存ぜられて候哉、番幷に使者等一度も申し付けられず候。定めて拙者不調法者故にて可レ有レ之候。稽古日を定め置き、我等罷出候時分は馳走仕られ候て、浪人分に仕られ候。

巳年播州赤穗へ罷上候時分、於二大阪一曾我丹波守殿拙者兵學之弟子に御座候

○內匠頭方に九年有レ之候事、

故、別して御念頃に被レ成、二三日滞留仕候。其時分板倉内膳殿
御番故、丹波殿へ被二仰合一候て、九月廿一日丹波守殿にて内膳殿へ終日得二御
意一候。翌年五月罷下り候時分、内膳殿急度振舞被レ申候て、道具給レ之候。内匠
頭方に九年有レ之、存寄之仔細御座候て書付を差上げ、子年大島雲八殿奉レ頼、
知行斷り申上候。其時分は加増迄可レ被二申付一候由に御留被レ成候へ共、加増利
祿之望にて知行斷申候にては無二御座一候由達而斷申候て、知行返納候。大島雲
八殿具に御存じ被レ成候。知行斷り申候て、以後間御座候て、淺野因州公本多備
前守殿など私宅へ御出被レ成候時分、因州公仰られ候は、其方義以來は一萬石
にて無レ之候はゞ何方へも奉公仕間敷候由兼而申候一段、尤もに被二思召一候。古
來戰國の時には倍臣に高知行取候者鳥彌左衞門八千石取り候。丹羽五郎左衞門
拾貳萬石にて數多候。木村常陸介五萬石の時、木村惣左衞門五千石。長谷川藤
五郎八萬石の時江口三郎右衞門、坂井與右衞門一萬石宛取り候、箇樣の事不レ珍
候。結城中納言殿越前拜領被レ成候時分仰られ候は、御國を拜領被レ成候以前に
かはり、別して御滿足難レ有被二思召一候事二箇條有レ之、其第一は年來分限廣候
はば被二召置一度被二思召一候。久世但馬守今度二萬石被レ下被二召出一候。此段大
名に仰付られ候故願相叶申候由、被レ仰候段、石谷土入物語候。扨近來我等存
候ても、寺澤志摩守殿へ天野源右衞門を八千石にて被二召抱一候。松平越中守殿
へ吉村又右衞門を一萬石にて被二召抱一候。此者共名高き場所一兩度有レ之候者
に候。渡邊睡庵事藤堂泉州公へ浪人五萬石にて無レ之ば主取り仕間敷候由申し
候。其身覺書にも其段記し置き候。此者又右兩人より度々武功場數も有レ之殊
に一騎打之役儀より大勢之差引も心懸け候者に候。此兩三輩皆我等存候。然る
に其方事戰國に生れ候はば武功之段は右之者におとり申間敷候、此段は力業に
不二相成一事に候、第一博學多才、只今弘文院を差し置き、世上に有レ之間敷く
候、又聖學之筋目發明仕候事異朝にさへ無レ之候間古今に其方一人に候。我等
事十二歳より兵學稽古仕候て、畠山殿弟子に相成り、其流をきわめ、上泉流を
習ひ上泉治部右衞門相傳を極め、其後尾畑勘兵衞殿弟子に相成り、印可迄取
候。北條安房守殿は猶ほ以て心安く、晝夜被二仰談一候。然るに其方之影故、兵
學の筋目初て能く得心仕り、難レ有被二思召一候故、其方へ別けて誓紙を遣置候、

然れば兵法之儀は無雙のやうに被レ存候。如レ斯上は五萬石望み候共、似合申さゞる様には不レ存候。其上一萬石にて奉公不レ仕候ては、主用に立ち不レ申段申し、誠に當時相應の望み最之至に候。我等事分限無レ之候故、別而殘念に被二思召一候。其方一類之内一人にても二人にても被二召出一候事御賴み被レ成候間、左様に同心可レ仕旨仰せられ候。私申上げ候は、忝く御意に奉レ存候と計りにて差置候て共、本多備前殿へ度々被レ仰候故、達而一人遣はし候様に御執持ち候間、岡八郎衞門十六歳之時因州公へ被二召出一、過分に知行被レ下、今以て近習に被二召遣一候、御念頃成儀共に候。其節磯部彦右衞門を御使者に被レ下、八郎右衞門被二召出一、御滿足被レ遊候由、却つて御禮被二仰下一候。此段因州公は不レ及レ申候。松浦肥州公、本多備前殿御覺可レ被レ成候。松浦肥州公御事は、以前より家中へ第三郎右衞門被二召置一候、段々御取立被レ下、御厚志不レ淺、毎度御大恩を請け申候、拙者心底被レ爲レ成二御存一候事、因州公より尙ほ以て厚く被レ成二御座一候。松浦公、淺野公、本多備前守殿など御一座の時分、御分限被レ成二御座一候へば拙者に一萬石二萬石被レ下候事何より安き儀に候由度々被二仰出一候故、拙者申

上候は、御兩公樣右之通り被レ爲二思召一候へば、拙者儀冥加に相叶ひ候と奉レ存候、拙者儀御存じ不レ被レ成候御方には、定て無二途方一たわけ者に候。各樣御崇敬被レ爲レ成候を誠と存じ、如レ此高ぶりたる事申し候と可レ有レ之候。然る處因州公御事は、御老年と申し御學問之義只今の御大名には無レ之候、其上紀伊守殿但馬守殿御家に諸家之名高者大勢被二召抱一、高知之者罷在候。如レ斯者共之咄被レ爲レ聞、殊更に兵學之儀兼而被二仰聞一候間、拙者躰御噂批判可レ仕候樣無レ之候。松浦公御事は因州公より少々御年下に被レ成二御座一候御自分の御文學者無二御座一候へ共、晝夜書物等聞召、文武之諸藝儒佛之御勤御怠不レ被レ成候、其上當代之古考衆毎度御招請被レ成、御當家上方衆之近代之物語大分被レ成二御存一候、近年御家中に諸歷々方高知にて被二差置一、尤も能者共御使立被レ成候、依て中根宋閑石谷土入常に被レ申候者、御家中之作法、人の御使立て被レ成候樣、若年には珍敷武將にて可レ有レ之由、度々被レ申候を、石谷市郎右衞門殿並に拙者抔も承り候事に候。然れば此御兩公樣御事は、御自分より初め御家中御領内迄之御作法御仕置無二殘る所一候樣乍レ恐奉レ存候。然るに一兩度者時の御挨拶と奉レ存

候、度々被二仰せ聞一候御事に御座候へば、拙者存念は立候て安堵仕候。拙者事御存じ被レ成御方々樣者、御分限不レ被レ成二御座一候、御存じ無レ之御方者、無二途方一者に可レ被二思召一候間、拙者事は當分永之浪人と覺悟候故、諸事逼塞仕罷在候所存に御座候由、其節申上候。

○山口出雲守殿御出候事、

山口出雲守殿御出候て御申候者、津輕十郎左衞門殿御申候は、津輕越中守殿御知行高は少く御座候へ共、土地廣く新田多く候間知行之事は其方望みに御任せ可レ有レ之候。越中守殿初て兩御入部御座候間、拙者付申候て參り候樣に御賴み候と被二仰聞一候、拙者申候者、先づ以て忝奉レ存候。乍レ去越州公別而被レ懸二御目一候へ共、未だ御若年に被レ成二御座一候、尤も十郎左衞門殿出雲守被レ仰候御事に御座候へ共、家中衆又は他所衆承り候て御若年之御方樣へ如何樣にも申しなし候て此儀御座候などと、以來迄御沙汰御座候へば迷惑仕候間御免被二成下一候樣に御斷り申上候。其已後津輕十郎左衞門殿死去之時分、遺書にも拙者得二御意一候樣に御申置候故、其段御底意奉レ存候。越中公へ彌御懇意忝く奉レ存候て得二御意一候、村上宗古老我等別而申談候事各存ずる儀に候、拙者方へ御出之時分御申候は、我等事若き時分より物之師を取り誓詞仕候事無レ之、殊更武藝抔は人にさして習候者にて無レ之候。世上軍法者多く候へ共、師を仕候者我等所へ參り候て軍法の咄を仕り候へ共、我等尤もと存候者無レ之候。此段渡邊睡庵と書夜心易咄し候て、古來より軍法弓矢咄し毎度聞候故と存候、然に近年其方に逢候て、軍法兵學之咄評判詮義を仕り候に毎度可レ驚候、睡庵事は渡り奉公人に近代珍敷武士と存候、然れども軍法兵法の議論被レ仕候者、其方前にて口の明け可レ申樣者不レ存候。就レ夫當年五十三歲に至り恥入候へ共、今日初て誓詞仕り、其方兵學の弟子に成り申し度由御申候故、私申候者、私事左樣に被二思召一被レ下候事、別而恭奉レ存候、古戰物語武功者度々御咄承候て、拙者儀不レ淺大慶仕候、何事にても御相傳など有レ之儀者不二存寄一候由申候へ共、達而御望み故、任二御意一宗古老御誓詞候。其時分林九郎右衞門事彌三郎と申し候て、宗古念頃にて居被レ申候故、能可レ被レ存候。

寬文六年午十月三日未上刻北條安房守殿より手紙被二差越一候。

（切紙自筆）

○其方事不屆なる書物仕候事。

可二相尋一御用之事候間、早々私宅迄可レ被レ參候。　以上

十月三日

北條安房守

山鹿甚五左衞門殿

（切紙之御答）

御手紙被二成下一、謹而奉二拜見一候。御尋可レ被レ成御用之儀御座候間、早々貴宅迄參上可レ仕候旨、畏奉レ存候、追付參上可レ仕候。　以上

十月三日

山鹿甚五左衞門

房州樣

如レ斯相認遣候、夕料理未レ被レ下候故、食事心快認候而行水仕り、定而只事にては有レ之間敷存じ、乍レ立邊書相調へ殘置候。尤死罪被二仰付一候はゞ公儀へ一通差上可二相果一、是又相認令二懷中一候。此外五六ヶ所へ小翰相調へ、態と老母方へ不二申遣一、宗三寺へ參詣仕り、下人成程はぶき、若黨兩人召連、馬上にて房州公へ參り候。四日には津輕公へ可レ被二召寄一兼約御座候つるを、津輕殿門前にて存出し、明日參上仕間敷候由使を寄申候て、北條殿へ參り候。門前に人馬多く相見え候。只今何方へか打立ん樣子と相見へ申候。私事は刀を下人に渡し則拙宅へ押寄せ御蹈つぶし可レ有レ之樣子に御座候。此躰拙者若不參候はば、座敷へ上り申し候て、笑ながら申候は、如何樣之事候哉、御門前殊外人多く御座候由申し候て奥へ通り候。暫く候て北條殿被レ出候て逢ひ申し候。北條殿被レ申候者、不レ入書物作り候故淺野內匠頭所へ御預被レ成候、是より直に彼地へ可レ參候間、何にても宿へ用向にても候はば可二申遣一と、別而念頃に被レ申候。福島傳兵衞硯を持て拙者傍へ參り、申し遣度事は傳兵衞可二申次一候由申候間、私北條殿へ向ひ申し候は、忝奉レ存候、乍レ然常に家を出候より跡に心殘り候事は無レ之樣に勤め罷在候間、書置可レ申候事も無二御座一候由申候。其內に島田藤十郎殿御出候間北條殿も座敷へ御列坐にて、私被二召出一候間、脇指をぬき罷出候へ者、北條殿島田殿互に御式臺にて、北條殿被二仰渡一候は、其方事不屆成書物仕候間淺野內匠頭へ御預被レ成候旨、御老中被二仰渡一候由に候。私事申上候者、先以御意之趣畏奉レ存候、乍レ然對二御公儀樣一不屆成義者、右之書物之內何之所

にて御座候哉、承度義存候と申上候へば、房州御事藤十郎殿へ御迎へにて、甚五左衞門事譯も可レ有レ之候へ共、如レ斯被二仰付一候上は、不レ及二申譯一候御事と御申候、私申上候者、御意之上はとかくを可レ申樣無レ之由申罷立候。御歩行目付衆兩人居被レ申候て、內匠頭家來御呼被二仰渡一候。御歩行目付衆さはがしく被レ申候故、私笑ひ申候て一禮仕罷立候。此時分作法無二殘處一由、右內匠頭之者共其晚噂申候。內匠頭所へ參候ては不通之人にも逢不レ申候。淺野因州公より磯部彥右衞門御越候て、不レ苦候由家老共申候へ共、是へも逢不レ逢候。右之時分隣分不仕合成儀迷惑至極仕候へ共、心底是に而被レ申候事は聊も無二御座一候故、小事にても一ケ條も申置候、申遺候失念不レ仕候。九日之未明に御當地罷立候段御公儀より被二仰聞一候者、此者大勢弟子門人有レ之候、徒黨之輩可レ有レ之候間、道中者不レ及レ申、江戶罷立候時分、芝品川等にて奪取候事など可レ有レ之候間、油斷不レ仕候やうに被二仰渡一候由に候間、付候て參候者共も氣遣仕候故、朝より晝時書休より泊迄は大小用をも不レ辨候樣に心得申候て、同廿四日之晚に赤穗へ着仕候。我等匹夫之者に候所、一人之所采幣にて大勢をもしたがへ申候樣に諸人存候事者。不仕合成內に少しは武士の覺悟之所有レ之にも不可二罷成一候哉。此段皆虛說風聞に次第に罷成り候て、於二赤穗一は心易罷在候。

○我等配所へ被二仰付一候時分、

我等配所へ被二仰付一候時分、北條殿より呼に參り候節は、死罪に被二仰付一候哉、配所へ可レ參候哉不分明に候間、若死罪に候はゞ一通之書付を羞被可レ申と存、令二懷中一候。其案文今以殘候、此節は人間の一大事相究め、五十年之事夢の覺候樣に有レ之時分に候へ共、聊か心底に取亂候事無レ之候。尤も迷惑は仕候、此段は日頃我等學問工夫の勤故と全存候。人間之上には一生に如レ斯事有レ之者に候間、覺悟之處如レ左記置候。

蒙嘗二二千歲之今一。大明二周公孔子之道一。猶欲レ糺二吾誤於二天下一。開二板聖敎要錄一之處。當時俗學腐儒。不レ修レ身不レ勤二忠孝一。況天下國家之用。聊不レ知レ之。故於二吾書一無二一句之可レ論。無二一言之可レ糺。或借レ權而貪レ利。或構レ讒而追蹤。世皆不レ知レ之。專任二人口一而傳レ虛。不レ正二實否一。不レ詳二其書一。不レ究二其理一。强嘲レ書罪レ我。於レ玆我始安二我言之大道無レ疑。天下無レ辨レ之。夫罪レ我者罪二周公孔子之道一也。我可レ罪候道不レ可レ罪。罪二聖人之道一者。時世之誤也。古今天下之公

論不レ可レ遁。凡知レ道之輩。必逢二天災一。其先蹤尤多、乾坤倒覆。日月失レ光。唯怨生二今世一。而殘二時世之誤於一未代一。是臣之罪也。誠惶頓首。

十月三日

山鹿甚五左衞門

北條安房守殿

是は令二懷中一候迄に候。若死罪にて候はゞと存候へ共、別條無レ之候故出不レ申候。此文立ながら認て點を付け令二懷中一候。其以後今日取り出候て見申候へば、急成事故不レ宜書やうにも存候、乍レ恐日本大小之神祇一字も後に改候事は無レ之候、誠に我等辭世の一句にて候。

（此度内匠頭殿へ御預被レ成候事、）

我等儀以前知行斷候て、内匠頭殿家を出候に、此度内匠頭殿へ御預被レ成候。然に配所に罷在候内、別而念頃に被レ仕。常々被レ申候は、御預にて無之候はゞ、其方再此地へ可レ參候哉。隨分内々にて地走可レ仕候由被レ申候。就は衣服食物家宅段々念頃不レ淺候。大石賴母事朝夕之野菜今日迄毎日兩度づゝ送り候。賴母在二江戸一之内も右之通候。斷申候へ共賴母助申候者、此段全く自分之心入りにて無レ之内匠頭殿御念頃に被二思召一候。拙者事故、賴母助も如レ此仕候由申候て相送候。尤も配所に罷在候内者御預之者に候間、隨分意外無レ之之様に、家中之者迄慇懃に仕候様に被二申付一候て、拙者所へ内匠頭殿御出候以前より却而慇懃御座候て迷惑仕候。

（○兵法之禮儀師弟の道にて候事、）

我等奉レ得二御意一候て、兵學學問御聞被レ成、我等弟子に御成被レ成候御方々には、松平越中守をはじめ、右に申候如く別而御崇敬被レ成候。其外板倉内膳正殿御老中被レ爲レ成候ても、拙者處へ御狀は、拙者名に樣の字御付被レ成候故、度々御斷申上候へ共、不レ被二聞召分一候。別而淺野内匠頭は主人にて候へ共、上々樣へ口切の茶献上候後、必ず拙者へ口切之茶倉被レ給候て令二頂戴一候。采女殿尚以其通に候。其外之御衆大方上々樣へ御茶被レ爲レ進候以後、口切之御茶被レ下令二頂戴一候。尤も以前御出入仕候大名衆迄參候へば、御送迎被レ遊候て、御門を開候樣被二仰付一、御慇懃にて迷惑仕候段御斷申上候へ共、左樣にて無レ之候、私へ御禮とは不レ被二思召一候。兵法之禮儀師弟之道にて候由被レ仰候、然共冥加おそろしく存候て、度々御斷り申上候は、凡下之拙者無德之者にて任二御意一御指南申上候とても、左樣に被レ遊候程の御傳授不二相成一候由、度々御辭退申候へ

共、侍從四品諸大夫之御方々樣如レ此次第、天命も恐多候故、せめて自分に驕無レ之、日夜之勤聊無二怠慢一候段、此上我等愼と令二覺悟一候故、此段常々子孫共迄令二敎戒一候、今年配所に十年有レ之、唯今者一入天道のとがめを存候て、病中之外雖二一日一朝寢不レ仕、不作法成體を不レ仕候、此段朝夕之儀、下々迄存候事に候、就レ中磯貝平助殿能存候、以前より如レ斯心掛候故、益も無レ之候へ共、我等述作之書物は千卷計有レ之候、（目錄別に我等人に勝れ愚に候て、言行不レ正候、子孫共有レ之候）は愚成我等に十倍勤不レ申候ては人間之正義に不レ可レ叶被レ存候。

乍レ序我等存寄學問之筋少々記置候。我等事以前より異朝之書物を好み、日夜勤候て、近年新渡之書物は不レ存。十ヶ年以前迄異朝より渡り候書物大方不レ殘令二一覽一候。依レ之不レ覺異朝之事を諸事宜存。本朝は小國故異朝には何事も不レ及、聖人も異朝にこそ出來候へと存候。此段は我等計に不レ限、古今之學者皆左樣に心得候て異朝をしたひ學び候。近頃初而此存知入甚誤成りと知候。信レ耳不レ信レ目、棄レ近而取レ遠候事不レ及二是非一。誠に學者之通病に候。詳に中朝事實に記し候へば大概を爰に記置候。本朝者天照大神之御苗裔として、神代より今日迄其正統一代も違候事無レ之、藤原氏輔位之臣迄世々不レ斷して、攝籙之臣相續候事、亂臣賊子之不義不道成事無レ之候故なり。是仁義之正德甚厚成故にあらずや。次に神代より人皇十七迄は悉く聖德之人君相續あり、賢聖の臣輔佐奉りて天地之道を立、朝廷之政事國郡之制を定め、四民之作法日用衣食家宅冠婚喪祭之禮に至るまで各其中庸を得て、民やすく國平に、萬代之規模を立て上下之道明成は、是聰明聖知之天德に達せるにあらずや。況武勇之道を以いはば、三韓を平げて本朝へ貢物をあげ、高麗を攻て其王城を落し入、日本の府を異朝に設て武威を四海にかがやかす事、上代より近代迄然り、本朝武勇異國迄も恐れ候へ共、終に外國より本朝を攻取候事はさて置き、一ケ所を彼地へうばはるゝ事なし、されば武具馬具劍戟之制、兵法軍法戰略之品々、彼國の及處にあらず、是武勇之四海にまされるにあらずや。然者智仁勇の三は聖人之三德也、此三德一つもかけては聖人の道にあらず。今此三德を以本朝と異朝とを一々其印を立て校量せしむるに本朝遙に勝れり誠に中國といふべき所分明なり是更に私に言ふに非ず天下之公論なり。上古に聖德太子ひとり異朝を貴びず本朝之爲二本朝一

○我等存寄學問之筋記置候事、

事を知れり、然れども舊記は入鹿が亂に燒失せるにや惜哉其全書世に顯れず。

學問之筋古今共に其品多し、是によつて儒佛神道共に各其一理有レ之事に候、我等事幼少より壯年迄、專程子朱子之學問を勤、依レ之其頃我等述作之書者皆程朱之學筋迄に候、中頃老子莊子を好、玄々虛無之沙汰を本と存候、此時分は別而佛法を貴候て、諸五山之知識に逢參覺悟道を樂しみ、隱元禪師へ迄令二相看一候、然共我等不器用故に候哉、程朱之學を仕候ては、持敬靜坐之工夫に陷候て、人品沈默に罷成候樣に覺候、朱子學よりは老莊禪の作法は活達自由に候て、性心之作用天地一扱之妙用、高く明成樣に被レ存候て、何事も本心自性の用所を以仕候故滯處無レ之、乾坤打破仕候ても、萬代不變之一理は惺々洒落たる所無レ疑存候、然共今日之日用物之上に於ては更に合點不レ參候故、是は我等不器用故に可レ有レ之候、今少合點候て可レ參と存候て、彌此道を勤候、或は又日用事物の上の事は甚輕儀、如何樣に仕候ても不レ苦儀共存候へば、五倫之道に身を置、日用事物之間に應接仕候へば、左樣に者不二罷成一候てつかへ申候、然者樹下右上之住居仕、閑居獨身に成、世上之功名をすて候へば、無欲淸淨成事絕二言語一妙用

○儒佛神道共に各其一理有レ之事に候事、

自由成可レ有レ之樣に覺候、天下國家四民の事物に渡りては、大成事は不レ及言レ之、細事にても世上の無學成者程にも合點レ不參候、或は仁を體認せしむれば萬の間に天下の事相濟候と存、或は慈悲を本に仕候へば過去遠々の功德に成候と迄申候て、實は世間と學問とは別の事に成候、他人は存せず、我等は如レ斯存候故、是にては學問共至極と不レ被レ存候故、儒者佛者に右之所尋レ之、亦大德有レ之人と申候に右之品尋候ては、人の作略を見聞申候にも、世間とは不レ合、皆事物別に成候。神道は本朝之道に候へ共、舊記不二分明一事に候。端斗り知候て不全候。是は定て天下國家之要法も可レ有レ之候へ共、入鹿亂後舊記斷絕と相見申候。依レ之我等事學に不審出來、廣く書を見、古の學者衆申置候儀共考候へ共、我等不審に候條々埒明き不レ申候間、我等料簡相違可レ有レ之存候て、數年此不審不二分明一候所、寬文之初我等存候は、漢唐宋明の學者之書を見候故合點不レ參候哉、直に周公孔子之書を見候て、是を手本に仕候て、學問の筋を正し可レ申存、夫より不通に後世の書物をば不レ用、聖人の書迄を晝夜勘候て、初て聖學之道筋分明得心仕候て、聖學之理を定候。たとへば紙を直にたつに如何程細工能候て

も定規無之手に任せ候て裁ち候へば、不レ殘ろくには不レ成候、又其身はろくに候ても人々に左様に立せ候事は不レ成候所に、定規を當へ裁ち候へば大方幼若之者迄先其筋目の如くには裁レ之候。其間に尤も上手下手有レ之候へ共其筋目は一通りに參り候。然れば聖人の道筋は書を能く得心仕り候へば右之定規を知り候故何事にても其人之學問程には其道を合點可レ仕候、此故に聖學之筋には、文字も學問も不レ入、今日承候へば今日之用事得心參候工夫も、持敬も靜座も入不レ申事に候。さればたとへ言行正敷身を修めて、千言萬句を諳じて候者にても、是は雜學にて聖學の筋にては無レ之候と分明に知候。又一言半句申候ても、聖學の筋目を知候人と知候。是れ定規を以て正敷勘候故に候、只今終に不レ見不レ聞候事物之上にても、右之學筋にて尋候へば、十ヶ條に五七ヶ條は知れ申候。俗學雜學之輩は十ヶ條之內三ヶ條共合點參り間敷候。其段は我等愚に覺候。依レ之世上の無學成者に博學成者おとり候て人に笑れ候事出來候樣に覺候。然者鑄形なくして、鐵砲の玉をけづり、定規なくして紙を直に裁たんと仕候故、勞して功なく常に苦しみ候て、益更に無レ之、學を致候へば彌愚に成候樣に我等は覺候。

○只人たる道を盡すのみ也

學問之筋或は德を尊び仁をねり工夫靜坐を專と仕候も有レ之、或は身を修め人をたゞし世を治平せしめ功成名高きあり、或は書物を好み著述詩文を專らと致すあり、此品上中下に分ち候て樣々の心得に成行事に候。然るに我等存じ候者、德を以て人物を感ぜしめ、物言はずして天下自正、垂二衣裳一而四海平、修二文德一而敵自感服せしめ候黃帝堯舜之時代之義、末代之學び難き處なり。是をかた計似せ候ても其しるし無レ之事なり。依レ之如レ此心得候學者は、其志す所高尙にして終に世を背き山林に入り鳥獸を友と仕候事に候。又書物を好み詩文著述を事と致すは、學之慰にて日用之事にはあらず、但し文章も學の餘分なれば、是を嫌にはあらず、餘力の暇には詩歌文章は不レ可レ棄レ之也。我等存候聖學之筋は、身を修め人を正し世を治平せしめ功成り名遂げ候樣に仕度候其段は我等今日武士の門に出生せり身に付て五倫の交際有レ之、然者自分之心得作法外に五倫之交り共に武士の上に勤め有レ之、其上武門に付ての業大小品多し、小事にて言ふ時は、衣類食物屋作用具用法迄武士の作法有る事也。殊更武藝の稽古、武具馬具之制法用法あり、大事には天下之治平、禮樂之品、國郡之制、山林海河田畠寺社

四民公事訟訴仕置政道兵法軍法陣法營法城築戰法有レ之、是皆武將武士日用之業なり。然者武門之學問は自分計り修行致しても此品々にあたりてしるしなく功ち立不レ申候ては聖學之筋に而無レ之候。此故に右之品に付て工夫思案も有レ之舊記古實をも考る事有、然らば外に工夫默識靜坐等致候事、其暇不レ可レ有レ之也。左候とて極り無品々之業を習知り仕候は盡すと言ふにはあらず。前に言ふ如く聖學の定規いかたを能く知り規矩準繩に入時、見事能く通じ聞事明に成つて、いかやうの業來れりと言共、其品々勤やう明白に知るゝが故に、事物に逢て屈する事無レ之候。是大丈夫の意地たり。誠に心廣く體ゆるやか成共言べきなり。此學相積む時は智惠日に新にして德自高し、仁自ら厚く勇自立て、終は功もなく名なもく無爲法妙之地に可レ至されば功名より入りて功名もなく、只人たるの道を盡すのみ也。孝經言、立レ身行レ道、揚二名於後世一者、孝之終也。

右之品自讀の樣に聞え候へ共、各々非レ可レ令二遠慮一候間書付候所に、我等覺悟之所有レ之候間能々付候て讀可レ被レ申候。近年者配所へ參り十年に成り候。凡そ物は必ず十年に變ずる物なり。然者今年我等於二配所一朽果候時節到來と令二覺悟一候。我等始終之事處々へ書付置候へ共、御念頃の御方々も次第に殘少に成行候間、我等以前よりの成立勤め並に學問之心得能被レ留二耳底一、我等所存立候樣に被二相勤一候事所レ希候。最初に書候通、我等天道の冥加に相叶候而如レ此に候へ共、第一者乍二愚蒙一日夜相勤候故と被レ存候。然者各自分三才學にも可二罷成一と被レ存候。其時御咄したとへ物語迄不レ殘記置候。若輩成者は如レ斯事迄能覺候事尤に候。有二他見一事にて無レ之候間、文章之前後は任二筆頭一候。能々被レ遂二得心一、藤助令二成長一候はゞ、私祿能仕合の願者被レ差置、子孫迄不義無道之言行無之令二覺悟一候はゞ、我等生前之大望死後之冥慮候條、如此記置、磯屋平助に預置候。依而如レ斯候以上。

○我等生前の大望死後の冥慮に候。

延寶第三卯正月十一日

山鹿三郎右衞門殿
岡　八郎左衞門殿

四年以前卯六月、私儀奉レ蒙二御赦免一、八月御當地へ下着仕り、同十四日淺野亦

山鹿甚五左衞門判

○私儀御赦免奉蒙仰事

市郎家來大石賴母助同道仕り、久世大和守樣へ參上仕候。其節兩人へ御直に被ニ仰聞一候は、以前よりの近付衆へは出入可レ仕候。浪人抔集候事無用可レ仕候。住所は心次第に何方へ成共可ニ罷在一候由被ニ仰渡一、右之御意堅く今日迄相守罷在候。其節より淺草田原町と申候所借屋仕り、今以罷在候。近年は病者に罷成候て、乍ニ慮外一行歩不自由に御座候故、大方何方へも不ニ罷出一候。罷下候以後、此以前の筋目被ニ思召一、戸田左門公其外御使者被レ下候へ共、御禮迄申上候て、一度も御見廻不ニ申上一候。數十年以來由緒御座候而被レ懸ニ御目一候御方々樣へは自然掛ニ御目一候。是以四年以來度々得ニ御意一候御事も無ニ御座一候。淺野又一郎松浦肥州公御事は格別に候。是へも少々にして御見廻不ニ申上一候。津輕越州公御事前々より御念頃之筋目御座候て。私一類共一兩人御家中に罷在候。只今は拙者娘御家中へ遣置候。然者右三家御事主人同意に奉ニ存上一候間、折々從ニ此方一可レ然奉レ窺ニ御機嫌一事に奉レ存候へ共御斷申上候而大方參上不レ仕候。娘儀も御屋敷之內に罷在候故逢申度參候事も遠慮仕候而少々にては不レ參候。四年以來筋目無ニ御座一候者へ近付に不ニ罷成一候、尤御大名衆へ新敷御出入不ニ仕候。小身成御方へも一人も近付に不ニ罷成一候。殊更筋目無ニ御座一候家中之衆浪人者斷を申候而、近付に不罷成候。

○松浦肥州公御下所に罷在候事

上野御門主樣には爲ニ冥加一一年に兩度從ニ此方一必參上仕候。久世大和守樣土屋但馬守樣には、奉レ伺ニ御機嫌一候樣に折々參上可レ仕候へ共、御事多之內態と延引仕候。當年も年頭之御禮に漸正月末か二月頃に御兩所樣へ一度參候かと覺候。

人に道具遣候御沙汰御座候由、少も左樣の義無レ御ニ座候。世悴弟舜共に自然さび身の道具くれ申候事は御座候。急度仕候御方へ者不レ奉レ及ニ申上一候、家中牢人其外も道具遣候事終に無ニ御座一候。拙者儀松浦肥州公津輕越州公御家中之御仕置を口入仕候而、色々新法を立て下々痛候事申付候抔と方々沙汰仕候由風聞承候。中々存寄も無ニ御座一候。娘有付候時分隣家にも不レ存候程輕仕候故、松浦肥州公御近に罷在候へ共、在付候事も御存不レ被レ成、御使者も不レ被レ下候程輕き義に御座候所、是も右之時分夥敷書付を仕候而申觸し候中に一ヶ條も無ニ御ニ座候事に候、只今は世上に拙者名を賣候而方々兵學之師を仕候者多く御座候由

○浪人等堅く出入不レ仕候事

傳承候。書物屋にも拙者作の書物之由申候而高直に方々へ賣申候本御座候由承候、風聞故僞も不レ奉レ存候。四年以來拙者師を仕並書物他所へ取あつかい不レ仕候。乍レ憚申上候。拙者儀四十年以來奉レ得二貴意一候而懸二御目一候御方々御歷々樣者不レ奉レ及二申上一候家中之衆筋目御座候而自然參候。浪人迄不義不作法仕候者今月迄一人も不二承傳一候。先年惡人共徒黨仕候て罪科仰せ付けられ候時分も、私方へ出入候は不レ及二申上一、近付一人も無二御座一候。此後者拙者冥加に相叶候と奉レ存候。尤日比無二筋目一浪人等堅出入不仕候樣に隨分心懸奉レ存候御事に御座候。

拙者儀於二配所一朽果可レ申覺悟仕候所、各樣御影故不二存寄一冥加に相叶、母存命之內に罷下り、三年一所に罷在り、去冬母相果候、今生之願相達難レ有存候。其後私病者に罷成候。彌何方へも不二罷出一候。拙者儀元來凡下之者に御座候故、自前に御歷々樣へ從二此方一御斷申候而御出入不レ仕候。就夫酉年、大火以後高田へ引込罷在候て大方不罷出一候其時分より今猶以て老衰仕候故逼塞仕罷候、拙者儀之凡下の者御公儀樣御恩忝奉レ存候由申上候事慮外千萬成樣に奉レ存候へ共如レ斯御靜謐に御座候而、數年靜に相勤罷在候儀、乍レ恐天下之御恩不レ淺難レ有レ存候、殊更不慮に奉レ蒙二御赦免一御當地へ罷下候上は、彌々以日夜相愼罷在所事、似合之志にても可レ有二御座一候と乍レ恐奉レ存候。若たはむれにも不義不忠成事を口より申候へば、心も移申候間、冥加忽盡可レ申候。此段堅相勤候樣に世悴共にも平生敎戒仕候、然者御公儀樣を輕んじめ御法度をないがしろに仕り御作法を評判仕候事假初にも御座候はば、乍レ恐冥罰甚重に可二罷蒙一常々愼罷在候。就レ中四年以來者拙者儀御取持被レ下候御方々樣へ御苦勞を掛申候段、生々世々迷惑仕候而不覺悟成儀、聊無二御座一候樣に朝暮必懸罷在候、此段已前より被レ掛二御目一候御方々樣御存之所に御座候間不レ及二申上一候へ共、乍レ序如レ是申上候事に御座候。

○常々愼罷在候事

○大火以後高田引込罷在候事

○天道之冥加に相叶候事

以上。

十月十六日

右之通半紙壹通合紋一

山鹿甚五左衞門

拙者儀凡下無德之者に御座候而、御歷々樣方の御前へ罷出候體の者には無二

御座ニ候へ共、若輩之時分より御歷々様方被レ懸ニ御目一御取持被下候。此段聊私
徳義故などとは不レ奉レ存候。天道の冥加に相叶候事と奉レ存候。
右之通に御座候故彌逼塞仕り高田に罷在候て御近付衆をもはゞき申淺野因州
守松浦肥州守迄に奉レ得ニ御意一候様に仕罷在候。其外之御方々へは大方に仕候。
然所不慮に配所被ニ仰付一、十ヶ年彼地に罷在候。日々老衰仕罷下候而四年に罷成
候。只今者存命仕候而罷在候迄之體に御座候。今少々餘命御座候間何卒義理相
違不レ仕候様に相勤申候而相果申候返之覺悟に御座候。
右之次第自分之取合不ニ似合一申候而如レ斯書付申候段別而迷惑仕候。此以前
被懸ニ御目一候御方々皆以前御存被レ成候。就中松浦肥州公能御存之御事候、私配
所へ參り候以後十三年に罷成候、其内奉レ得ニ御意一候御方々御死去被成候而、只
今殘少に罷成候。然者新敷拙者儀被ニ聞召一候御方々様者、一己獨身之徒者の様
に被ニ思召一候へば迷惑仕候間、益も無ニ御座一候儀共如レ斯書付候へば、事新しく
御座候て如何敷奉レ存候、以上。

十月十六日

山鹿甚五左衛門

○口上之覺の事

右之通一通合紋二

當五月十四日渡邊源藏殿御事本多下野守殿へ振舞に仰出被レ成候由にて、拙者
所へ押懸御見廻被レ成候故、奉レ得ニ御意一候。此御一禮にも終に不レ參候。駿府へ
御立候御暇乞にも病氣故不レ參候。
酒井河内守樣御内地與一兵衛事拙者兵學之弟子筋、殊に淺野又市郎殿家老外
村源左衛門聟にて御座候故罷下り候時分より源左衛門度々近付に成候樣に申候
へ共、斷申候而延引仕候、當五月十六日外村源左衛門右與一兵衛同道仕候而參
候。私方よりは禮に使をも不レ遣、尤一度も見廻不レ申候。此外慥成筋目之家中衆
並與力衆自然に私所へ參候事御座候、筋目無き衆新敷近付不ニ罷成候一。
數年拙者へ被レ掛ニ御目一候は板倉内膳公淺野因州公松浦肥州公に而御座候。何
も拙者儀師恩難レ忘被ニ思召一候由每度御自筆之御狀被レ下、其御狀今以端々殘御
座候、然所内膳公御事座者儀不届有レ之候に被ニ仰立一候由風聞承り候。風聞の儀
に候間僞には可レ有ニ御座一奉レ存候へ共、無ニ心元一奉レ存候而、松浦肥州公迄委細
申上候御事御座候、右書付品々座調法に御座候而、文言之前後仕候所又は慮外

成る言葉御座候て若上々様御耳にかゝり申候所も可レ有二御座一候哉。乍レ恐無二心元一奉レ存候。拙者儀十ケ年蟄居仕り殊に罰下り候ても、今以逼塞仕罷在候故、彌世上無案内に御座候て、書違申所々も可レ有二御座一候間、入二御高覽一候はゞ用捨被レ下候様御取成可レ被レ下候、以上。

十月十六日　　山鹿甚五左衞門

右之通合紋三

○板倉内膳公と問答の事

板倉内膳公へ於二法泉寺一拙者御無禮仕候。御無沙汰御座候由風聞承候。板倉公御老中様に被レ爲レ成時分者、拙者親相煩罷在候、頓而相果候故。從二此方一終御目見不二申上一候。忌中幷忌明申候而も、度々御使者被レ下、毎度御念頃に被二仰下一候へ共、忌明候以後も、拙者病氣に罷在御禮にも參上不レ仕候。翌年四月五日初而爲二御禮一參上仕候。其節者御他行被レ遊不レ奉レ得二尊意一候。其後四月二十九日拙者近所法泉寺御出被レ成候間彼地へ參上仕候而奉レ得二尊意一候樣に被二仰下一候。尤誰も無二御座一、石谷市右衞門殿迄御出候間御閑談仕候樣に參上仕候へ共、御自筆之尊書被レ下候。就レ夫法泉寺へ伺候仕候、拙者參上以後板倉公御出被レ遊候て爲二御迎一庭上迄罷出候。御着座之後敷居を隔て度々御使被二成下一難レ有奉レ存候段御禮申上候。被レ仰候者、左樣に急度樣候而は難レ被二仰談一候間他所亦は人多候時分者尤に候。今日者いつもの如く內へ入り申候而無二遠慮一奉レ得二尊意一候樣に再三被二仰聞一候故、奉レ伺二尊意一、乍レ恐御一座へ入申候。御同氏石州公も御出被レ成二料理一出申候。小間御座候而御咄共御座候。板倉公被レ仰候者、不德の我等に大役被二仰付一難レ有レ被二思召一候へ共、諸事無二心元一思召候。第一天下之政者何事を專要に可レ仕と存候故と被レ仰候故、拙者式之凡下之者天下之御政道如レ斯可レ有二御座一などと存可レ申候事無二御座一候哉、自分之工天は無二御座一候。古來より聖人申置候は、天下之政者仁を本に仕候而禮を行候迄の由申傳候と申上候得者、少々御合點不レ被レ遊候哉、仁は左樣にも可レ有レ之、禮は大事の物に候由、輕御挨拶被レ遊候。

次に被レ仰候者保料肥後守殿御學問之筋者如何承候哉と被レ仰間、拙者儀者保科公へ不レ奉レ懸二御目一候間不レ奉レ存候由申上候得者、其方存寄はいかゞと被レ仰候故、不レ奉レ得二尊意一風聞迄にて、申上候事は必相違多御座候者に候間、難二申

上ニ奉レ存候由申上候へ共、達而御尋被レ成候故私申上候は、風聞迄に而申上候はゞ、御學問之筋乍ニ慮外一私共存候とは御相違御座候様に奉レ存候由申上候得者、被レ仰候には、此方も左様に被ニ思召一候との御事に御座候。

次に京都之所司代は誰を差候哉と被レ仰候故、拙者は不レ承候由申上候へば、石谷市右衛門殿永井伊賀守殿を指候由御申候。私申上候者、永井公者御年若に被レ成ニ御座一候旨申上候へば、被レ仰候者、年之老若には及申間敷候。器量次第の事にて可レ有レ之由被レ仰候。

次に世間如何様に風聞候哉を御尋被レ成候間、私申上候者、世上之風聞一圓不レ承候。風聞者指而益も無ニ御座一御事かと申上候得ば被レ仰候は世上能者多く可レ有レ之候間其者共風聞を聞き申事能く候由被レ仰候故、私申上候は、御歴々様方にさへ賢人君子に少く御座候。然ば下々には能者は大方無ニ御座一候、若能者御座候へば、風聞など申候事も御座候間敷、有ニ風聞一者大方御大名衆へ御出入仕候輕町人風情世上に賢き者の申候事に御座候と申上候へば、其世上賢き者申候事にて能候由被レ仰候間、私申上候者、乍レ恐左様の者不レ奉レ存候、世間に賢き者は御時代之勢ひを能務申候間、上々様の能々思召候者を能申、御にくみ被レ成候者をば惡候、少も秀申候者をばさゝへ候而、實者そしり惡申候。如レ斯者の申候御事御許容被レ遊候御事之事も能様申候而、我身之立候様に取廻し候、人ば大事の儀に奉レ存候由申上候得者、古より堯舜も賤しき者に事を尋られしこと有レ之と被レ仰候故、私申上候者、夫は賤敷者之可レ有レ存候事は賤者に御尋候と申事に御座候と申上候。此間答再三御座候て、少不レ入ニ御意一御挨拶に御座候へ共、私存寄申上候様に被レ仰候故、少も顧ず申上候、定而無禮之様に相見え可レ申候。其後私申上候者、只今者方々寺方多御座候て、路次にも佛體を出置候故、下々迄佛をば存候。日本之所々に孔子堂を取立申候はゞ、人々も亦聖人之名を可レ奉レ存候事に御座候哉と申上候得者、尤之由に被レ仰候。

御料理過候て頓而御立寄候所、私申上候者、乍レ恐申候事御座候。今度御老申様に被レ爲レ成、乍ニ慮外一御仕合能奉レ存候。乍レ然古より申置候者、仕合能候得者又夫程失は御座候物に御座候由申傳候。乍レ憚彌々被レ爲レ加ニ御愼一候様に奉レ願候、就レ中御威光に付息様方從ニ世上一御馳走可レ有ニ御座一候間、御勤第一に奉レ存

古池眞傳

候由申上候。是は伯州公御勤乍ニ慮外一無ニ心元一奉レ存候下心に申上候へ共、其御心得者無ニ御座一候御挨拶に御座候而、其方心入不レ淺被ニ思召一候由被レ仰、御大慶被レ遊候由に御座候。其日二條御番歸衆野間金左衞門殿猪飼五郎兵衞殿抔御宅へ御出候而御歸を御待御座候由申來候處、御歸被レ成候、其以後者不レ懸ニ御目一候右之段石谷市郎右衞門殿御存被レ成候。其後度々御自筆之御狀御音物被レ遊、石谷市郎左右衞門殿へも切々御傳言被レ遊、頓而御作事出來次第可レ被ニ仰下一候間參上可レ仕候。寺にて申上候品々今に御失念不レ被レ遊候由被ニ仰下一候。殊更御加增御拜領之時分も、御自筆之御懇書被レ下、別而御念頃に候。然ば御無禮仕候而不屆成儀と被レ仰候由、御風聞にて可レ有ニ御座一と、拙者奉レ存候而罷在候以上。

十月十六日

山鹿甚五左衞門

配所殘筆（終）

解題

古池眞傳は何人の作たるを知らず、俳家これを帳中の秘として傳ふるものあれど、恐らく俳禪一味の談を飾らんとして後人の創作に出るものならんか、されど芭蕉が佛頂禪師に參じて禪要を叩いたのは事實で、其間かゝる消息の存せしやも知るべからず、何れにするも俳諧の聖者といはるゝ芭蕉が禪に於て其の心要を養ひたるは否むことが出來ない。芭蕉は伊賀の人、初め同國上野の藤堂氏に仕へ、主の死に遇ふて遁世の志を起し、國を出でゝ國學を京都の北村季吟に受け、徒遊七年、後、江戸に出でゝ俳諧に一生面を開きたるは人の知る所、佛頂は常陸鹿島根本寺の僧にして亦近代の高僧である。芭蕉の江戸深川に庵室を結びし頃は、佛頂も深川長慶寺にあり、六祖五平は和尚の僮僕にして禪宗初祖達摩より六代目に當る慧能の眼に一丁の字なしと稱し碓坊にありて悟を開けるに比してかく名けられたのであるといふ。

古池眞傳

常州鹿島根本寺佛頂長老、博覽大悟の知識なり、桃青翁舊交の師なり、近來深川長慶寺へ移轉せられたるに、桃青を訪はんとて六祖五兵衛を供して芭蕉庵に至る。六祖先づ庵に入りて、

「如何なるか是閑庭草木中の佛法」

桃青答へて曰く、

「葉々大底者大、小底者小」

それより長老内にいり、

「近日何の有る所ぞ」

桃青答へて曰く、

「雨過ぎて青苔を洗ふ」

又問ふ、

○佛頂—法諱なば阿南と云ひ佛頂と號す。別に自ら靈蟹窟と稱す常州の人。

○桃青—芭蕉の別號

○六祖五兵衛—佛頂和尚の僮僕

「如何なるか是青苔未生以前の佛法」

とある時、池邊の蛙一躍して水底に入る音に應じて、

「蛙飛び込む水の音」

と答ふ、佛頂長老、

「珍重々々」

と唱へて持ち玉ふ所の如意を桃青に授與す。長老席上に紙毫をとりて、

本分無相、我是什麼物。若不レ會、爲ニ汝等諸人一下ニ一句子一看看ヨ、一心法界

法界一心。

と書して諸風子に示したまへば、其時法界と一心の水音に耳ひらけて、實に

桃青翁の省悟を各々隨喜しけるとなり。この時杉風謹で桃青翁を賀して、

「我師風雅に參禪の功を積んで、今に水音大悟の一句に、佛頂長老證明付法の

如意を授けたまへば、今は天下に宗匠たるべし」

とて賀儀をのぶ。嵐雪が云ふ、

「水音に俳骨こと〴〵く連續すといへども、未だ冠の五字をきかず、師是を定

めたまへ」

翁の云ふ、

「我もこの黠を思へり、しばらく諸子の高論を聞て、而後に定めんと欲す。二

三子試にこの冠五をいへ、きかん」

各々首をかたぶけて錬思す、やゝあつて杉風、

「宵暗や」

の五文字を出す、嵐雪は、

「淋しさに」

と伺ふ。其角ひとり、

「山吹や」

と色即是空空即是色の曲をつくして其姿を調へんとす。翁つく〴〵と見てい

ふ。

「吾子等の冠五各々一理を含んで平生の句にまされりといふべし。就中其角が

山吹や、は、はなやかさ、ちから有て好し。さりながらかゝる七五の冠たてん

は、觀相見様の理を離れて、只此庭のこのまゝに、古池や、とおき侍らん」とあるに、各々「あツ」と感じ入る。

古池眞傳　終

俳諧十論

解題

著者支考は美濃の人、初め僧となつて鎭臧主といひ、僧戒を持せしが、後、衣鉢を脫して俳道に入り、初め凉菟に學び、更に芭蕉の直弟子となり、終に十哲の一人と稱せらるゝに入る。其の佛門の出なるにも拘はらず洒脫の意氣は佛を呵し祖を罵り「蓮の葉に小便すれば御舍利かな」等の句あり、されど、一面俳諧の心要を叩いて、其理を論ずるに於て精到の見あり、僅に十七文字の此俳句に哲學的の論辯を用ひたのは此支考で、本書の如きは其の尤なるもので、俳諧傳、俳諧道、俳諧德、虛實論、姿情論、俳諧地、修行地、言行論、變化論、法式論の十篇を收めたので、元祿四年の頃、芭蕉翁と是等の事を論じた筆記に基くといふ。享保十六年二月、齡六十七を以て歿す、

俳諧十論

序

ある年、武江の芭蕉菴にて、茶話禪といふ錄をあみて、此翁の行狀をあらはし、我家の風雅をひろめんと、文は論語の述而にならひ、敎は維摩の問疾になぞらへて、此十編を艸稿せしに、故翁は例のゆるし玉はず、今や世間の俳諧を見るに、春の草木の萠出るが如き人のちからをもて刈つくすべからず、我いふ俳諧は夏爐冬扇にたとへて例のおかしくさびしく、桃紅李白の世情にあそびて、人のわきまへざらんにも道ある物のおこなはれずといふ事なく、我より人をためんとせば、かへりて人には惡まれなん、德はつとむに光あればと、口金の變をおそるゝより梓行の沙汰には及ざりき。此故に此論をも朝暮三の評のまゝ、獅子庵の遺稿とはなしけるなり。されば世の變は三十年にして生住あり異滅ありとや、此論もしや私なからんには永く三神の冥慮をかすめず、我門の

本華坊述

○茶話禪―古池眞傳參照。
○維摩―維摩經問疾品のこと。

風雅を世に傳ふべけん、例に俳諧の虚實ながら例に文章の過當なる誠に恐るべく誠に惧るべし。

第一　俳諧の傳

そも俳諧の傳といふは、もろこしの史記に滑稽の名ありて、齊楚の比より秦漢の間までに七八人の言行をしるし、太史公が天道の贊詞より或は笑言をもて、大道にかなふ共、或は談笑をもて諷諫すとも、滑稽は酒桶の喩なるよし、姚氏は俳諧のごとしといへる、畢竟は虚實の自在より言語に遊ぶのいひならん、しかれば俳諧の道たるや、本より虚實の級ならんには、其道は三皇五帝より禹漢文武に傳りて、其名は司馬遷が史記に定りぬと知るべし。誠に太極の道をはかちて儒佛老莊の昔より虚は實をもてつくろふべく、實は虚をもてほどくべければ、孔子に莊周ありて仁義をもとき、釋氏に達磨ありて經論をやぶる、いづれか俳諧の機變ならざらん、俳諧はよく儒佛をやはらげて今は詩歌の媒といふべし。ちはやふる我朝には天の浮橋に此心をつたへて、伊奘諾伊奘册の鶺鴒の喩

○滑稽―知識多くしてなる如何なる難問題にも窮せずに解答すること史記の樗里子傳を出處とするも、後世、專ら諧謔の意に用ゆ。

○達磨經論をやぶる―達磨大師を初祖とする禪宗は教外別傳、不立文字を立て前とする故に。

より、天照御神はうけつき玉ひて、虚實の間に道をひろめんとて猿田彦は其姿おかしく、天ノ鉾とは其情さびしく、愛に風雅の俳優を知れとならん。是より八雲のいろ〳〵に難波津の歌は其姿をあらはし、淺香山の詞其虚あつかふ萬葉はまして其さまながら、俳諧の名は古今集にはじまりてそれより和歌の一躰とはなりぬ。さるを俳諧と誹諧とに音訓の論ありて、八雲御抄にも二名をあげられ、二條冷泉の歌仙達も此風躰は分明ならぬよし、まして法式にも新舊の差別口傳あれば、芭蕉家の書法には人偏の俳諧を用べしと白馬に家訓の一條とはなせり。さて文明の比ならん、山崎の宗鑑法師は其世に俳諧の名あるより守武翁一もそれを學びて百韻をつゞり千句をつらぬ。貞德貞室は宗匠の名ありて、たゝ俳諧の言語をつたへられしが、貞室はやゝ芳野山の花を詠じ、隅田川の鳥に吟じ、其句は和歌の姿情にかなへば、今の風雅の根ざしとやいはん、其後難波の宗因は武城に談林の額うちて、俳諧の涅槃は破りたれど、耳に言語のおかしみを得て眼に姿情のさびしさをしらねば、是も其道に其法なしといはん。其法なきときは、其師なからんには其弟子もあらず、實にその比の俳諧といふは今様の人

○談林の額―江戸時代、田代談林軒が、西山宗因と共に始めたる俳風を談林風と

の輕口（からぐち）とおぼえて、歌よみ連歌する人も、一座の酒興にいひ捨て、俳諧の口をまねる人あれども、俳諧の心を傳ふる師なし、おろかや、今いふ俳諧は其道は唐虞の先にわかれて、其名は齊楚の後にあらはれ、其風は和漢の一躰となりぬ況んや其道に其法を定め世情をあつかふ教とならば、滑稽の心は吾翁に傳はりて、菅丞相の梅をさゝげて佛鑑の禪をつたへ玉ひしよりも、法然上人の夢あひて善導の法をさづかり玉ひしよりも、古池の蛙に自己の眼をひらきて、風雅の正道を見つけたらん、爰を天よりうけつきて自悟とも自證ともいふべきなり。世にいふ俳諧はいざしらず、俳諧はよく芭蕉菴元祖といふべし。

傳に曰此段は俳諧の根ざす所にして儒佛老の三道より千差萬別の岐あれども、歸する所は虛實の二なるに、今や俳諧の一道をもて虛實をあつかふ仲立といへる、媒の一字に十論をつくして、世法に時宜の二字ある事を信すべし。しかるに俳諧と誹諧の字論は古今集をも敷尾ノ反にて誹諧とはよむべからず。此類をさして故實の法といへば、やはり歩皆ノ反にて誹諧と訓すべし。他門に向て論ずべからずとは白馬の四十二法にあり。それらを爰の口傳とにや。そも〳〵故翁は伊賀の素生にして、其先は桃地の黨なるよし、壯年に仕官をしりぞき洛の季吟に俳諧をまなびて、埋木は書本にて朱點を加へたる物二冊あり、其傳は寛文のころならん、連歌の新式は幽叟より傳へられて是も頭書に朱點を加ふ。或は百人一首の秘抄あり、或は古今の序傳あり、すべては孔子に七人の師あるがごとき、道として學びずといふ事なく、法として傳へずといふ事なく、かくて天和の初ならん、武江の深川に隱遁して「古池や蛙飛こむ水の音」といへる幽玄の一句に、自己の眼をひらきて、是より俳諧の一道はひろまりけるとぞ。爰に俳諧の列傳を論ぜんには、史記滑稽より心を傳へて、古今集の名にひろむべきを、今は俳諧とにしねて新舊の名をわかち、天稟の一道を建立せしは、硯に雲夢の八九をひたし、筆に和漢の一二をあらそひて、道に文章自在の論といふべし、しかるに中古の俳諧師はおほくは名のみ書捨しに、ひとり貞室を稱せり。其句は今の世に讀すべし。

是は〳〵とばかり花のよしの山
いざのぼれ嵯峨の鮎くひに都鳥

いふ。用辭の滑稽なるを特とす。

誠や此二句の姿情を得て、今の俳諧の根ざしといへる、爰に風雅の私なからんには、爰に新舊の差別を信ずべし。蓋いわん此段の本傳は別に白馬經の弟子傳を見るべし。

第二　俳諧の道

そも俳諧の道といふは第一に虛實の自在より世間の理屈をよくはなれて、風雅の道理にあそぶをいふなり。誠に俳諧の寬活なる、其人にして此道ながらには、狂言綺語の假事ならんには、虛實の間に心をあそばしむる言語の設を宗としるべし。本より虛實は心より出ておこなふ所は言語ならんをや。世にいふ俳諧は莊老の風ありとするは黃白をしらぬ人のいひ也。そも〳〵莊老の道たるや、心の天遊を先として聖人の仁義を後とすれば、世情の理非をおしまげて虛實のはじめにあそばむとす。しかるに俳諧は理非をあつかひて、今日の世情をなぐさむれば、道を虛實の變化にかなひ、法を世情の和說にさばく、爰を一字錄のおほむねにして時宜の一法は立たる也。然れば俳諧の道といふは、儒佛老莊の間をつたひて、虛實に中庸の法ありといはん。本より儒佛の大道は虛實の先後に家をわけたるを俳諧はそれが仲人となりて、おかしきは俳諧の名としるべく、さびしきは風雅の人和は五倫の常法にして、人よく此三を知る時は身に千重の羅綾をかざるとも、薦一枚の躰と知るべし。人よく此三を知る時は身に千重の羅綾をかざるとも、薦一枚のさびを忘れず、口には珍の菓肴をつらぬとも一瓢の飮のたのしみをかへず、心に世情の變を知りて、笑言に耳をあそばむる、俳諧自在の人といふべし。しかるに我朝の俳諧は宗鑑をしたひ、守武をまなびて、俳諧の詞はひろまりたれども俳諧の心を傳へたる人なし。此故に吾翁は、俳諧に古人なし、といふ事をひそかに門人にさゝやきて家訓の秘文とはなせり。今はた我朝の滑稽を論ぜば、むかしの俳諧に道をわきまへず、今の俳諧に道を得たりといはん。爰におもへば代〳〵の撰集に此風躰の分明ならずとは、俳諧の詞の比興をまなびて、俳諧の心の風雅（口傳）を傳へざる也。いでや俳諧の詩歌とは詩に杜陵あり、歌に西行ありて物の姿情をすぐきまにいひながら、それが雅言と俗語とをしれるは、例に虛實の自在より、例のおかしく、例のあわれに風雅は、手爾遠波の事なれば也。

其外の詩人歌人達は風景かざり、言葉をあやにして歌をつくり、詩をつくれるのみ、いづれも上手の名はあらん、名人の場ははるかに遠からん、しからば名人と上手とのさかひは上手は十知の才にはたらき、名人は一字の信にあそぶ、信は萬物の道理にしたがへば、天地に變化せられて雨とそゝぎ風とそよぎ、鬼神も其歌に涙をこぼして花にたゝずみ、月にさまよふ、況や俳諧の卓犖たる信なき人の虛誕に落ざらんや。爰に儒佛の內證をさぐれば、名人は其信に道をおこなひ上手は其才に法をひろむ、是よし道〻の建立にして師となり弟子となるの冥符ならん。儒家に所〻賢のさかひもあるも、釋門に佛菩薩のへだてあるも、道に頓漸の法なりと知るべし。そはそれ古詩といひ、古歌といひ、其いふ所はすぐさまなれども、其代は文家もさだまらず、ことの心もとゞきがたしとや。詩經はひとへに敎誡にかたむきて花をめで、鳥をうらやむといへる、逍遙の心はかくれたるを漢魏の比より詩文にあそびて、淵明はやゝ風雅の花實をまじへ、萬葉は今の口狀にひとしく、あるは、艸木姿をあらはし、あるは男女の情を演るに其體かたつくにして、言語にあそぶ所すくなきを、人麿はひとり花實に自

○佛頂和尚—
天和貞享の頃
播磨の盤珪和
尚と並びされ
武州深川の禪
刹にありて芭
蕉庵に近し。

在なるや、かくのごときは道の元祖とあふぎてひろむるはよし十知の上手にあるべし。此故に吾翁は門下に十哲の名をそなへ、天下に三千の徒あれども人にむかつて俳諧をとかず、道は其人の信にまかせ、德は我身の功をつゝみて、武江の草庵に在ながら、佛頂和尚の禪室にまじはり、投子一碗の茶に平話をさとりて、俳諧のはこびを（口傳）知れるより、世間の理屈をよくはなれ、風雅の道理よくあそびて、奥(おく)の細道(ほそみち)に行脚のわびをつくし、湖南の幻住菴に山居の名を隱して、杜律の五言を枕とし、山家集をたづさえて貧閑すでに骨にいりぬ。玉帛の禮にも腰をおらず、淡薄やゝ身をわすれつ、衣食の產にも心をくるしめず、遠きは椎葉の糧をつゝみ、近きは杏花の酒を□□□□□□□□□□□□たづさえて、日影をおはずといふ事なし。さるは生涯の斗にも似て、移文のうき名も立べけれど、例のさびしく、例のおかしく、俳諧は心のあそびなるを尊むべし。そもや此道の功を論ぜば儒佛老莊の虛實をあつかひ、詩歌連歌の理をほどきて、國にいさむる臣あれば、家にあらそふ子あるがごとき、俳諧は天下の一助といふべし。しかれ共俳諧の人は宮所の春の花にたはぶれ、田舍の秋の

塵にまじはりて、工家商店のしわざにうとからず、酒肆婬房のあそびにくらからず、世界に幾筋の道あれども、向上の一路はあやうき所をつたひて、人を損するも此道ならんか、人を益するも此道ならんか、爰におもへば吾翁はたまたま人を誨るとて、俳諧は老後のたのしみといへる、此語は我家の遺金ならめと、およその人の聞過すべきをや、今はた此意を論ずるに、若き時は友達多くつづにあそびやすからんに、老て世の人にまじわるべきは、只此俳諧のみなれば是を虚實の媒にして世情の人和といへる也。誠や此道の嶮岨なるより、若からん人の學ぶべくして、若からん人のおそるべければ、是等の金言を世につたへて、物の始と終とをしらば、中は人間のあそび所にして、はじめて比道の平地なる事を知るべし。

傳に曰、今いふ俳諧の一道は、太極の一氣の動そめて物に虚實の變あるより、或は神農の姿を寫し、或は黄帝の時を傳へて、其名は史記にさだまりぬ。しかるに中古の俳諧にはいかりに其道を踏まへて、今の俳諧に此道を得たりとは、是等を例の過當ながら、爰を俳諧の頓挫としるべく、此故に白馬の證文をひきて、

○神農黄帝―爲辨抄に、神農は例の木葉衣をなるる其姿おかしく、黄帝は常に衣冠をたゞして醫道の理論に其情をつくさる其圖を虚實の論文と知るべし。

○六義―風、雅、頌を經といひ、賦、比、興を緯といふ。

○白馬―白馬奥儀解、支考著、芭蕉翁の俳諧二十五箇條を解したるものにて、俳諧新式、眞享式、白馬經等の名あり。

さばかりの大言をひそかに耳語するとはいへりけり、誠に此段の上論なる道に、三條の法ありて、儒に似て其實を說ざれば、佛に似て其虚をもとがめず、まして老莊の理非をまげざらんには、是を中庸の法にして、爰を俳諧の太宗師といふべし。さて此道の文章に六義の中の名を別ちて、是を口傳といへる事は、風は諷にして其物をよそへ、雅は正にして其詞を和らげざるは、詩經の大むねながら、畢竟は虚實の換名なるよし。全文は白馬の眞享式に見るべし、次に投子一碗の茶に俳諧のはこびを口傳といへる、爰に世情のはこびを評せば、其一は天地の虚におこりて、其二は人間の實にとゞまる。しかれば其の三は大事にして、虚實の變を知らぬ人は、或は五倫の實をとめて恩愛の闇に道を失ひ、或は五倫の虚にかちて慳貪の火に家をほろぼす、畢竟は道理と理屈とのさかひにしけれども、言語の理屈をはなれんとても、例に三句目のくるしければ、皆只虚實の三句目なるをや、いざや我家の俳諧とても、例に三句目のくるの附合とおぼへしが、今や投子一碗の茶に俳諧は、只平生なるをと三十九年の非をしりて其茶に夢のさめけるとぞ。

稽山章在投子會下爲柴頭投子一日與レ茶乃曰森羅萬象摠在二這裡一許柴頭潑レ茶曰森羅萬象在什麼處投子曰可レ惜一椀茶

君見よ投子の茶を點じて茶碗の中に世界ありとは、姿おかしく、情さびしく、其體も新しき發句なるに、柴頭はいまだ力味つきず、沒滋味の處に味をとめて、茶を打あけていづこにかあるとは、例に理屈の至極なるを、相手も三句目の理に有りしは、世にいふ、理外盡のいさかひにして、果わ山法師の抓合ならん。しかるに投子は平生を失はず、あたら茶盃捨けるよとは、誠に前句の道理をもそらさず、例に笑中の刀をふくみて、しかも平話の耳にちかき、誰か此地に俳諧をしりて、明暮の言語にあそぶべきや。君見よ俳諧ならずともかゝる世情のはこびありて、理屈をかさねなば、國をもほろぼし、身をも失ひけん、爰を此道の一大事にして師資の口傳とはいへるなり。そもや此道の世におこなはれて、虚實の間の糸筋をつたひて諫臣爭子の喩によらば、十年の死地に皮肉をさらし、十年の活地に耳目をあそばしめて、致知格物の條目にかなひなば、はじめて天下の一助とはなりなん。君しるや、此論の決する所は道に一字の位をしめて、

法に老後のたのしみをいへる、夜日におそれて學ぶべく、明暮になれてたのしむべきは、此俳諧の一道ならん。

第三　俳諧の德

そも俳諧の德といふは、道理と理屈との二名より、人理を捨て、天理にしたがふをいふ也。さて俳諧の德たるや、文にやわらぎ、武にいさむるは、仁勇の二にして、智は其德をあつかふ故にしも仁勇の本なるしるべし、されど其智には二ありて、世智は仁勇を外にかざり、眞習は仁勇を內につゝむ、たとへば張良が女兒の樣なるに知るべし、是を我家の白馬經には、俳諧の仁を、談笑の諷諫といひ、俳諧の勇を、文章の頓挫といふ。智はいさ俳諧の機變に越る物なからん。然るに俳諧の風體は、本より詩歌連歌より出て、詩歌連歌に敵すれば、氷の水よりもすさまじく、紫の朱をうばふとす。さはよし、家々の意地にして、爰を建立の一門とも、我道の風骨ともいへる也。しからば俳諧の一派を立ながら、詩歌連歌のみなかみを忘れざらん。それを此德の基としるべし。しかして此

徳をひろむる物は、道理と理屈とは、道理は全く善にして、理屈は全く悪なりと思ふべからず。道理は善と悪とありて、理屈はひとへに悪なる物なり。ましてて善悪に善悪の三つあらんをや、己れ十分の道理あれども、君父はあしざまに爭はれんに、君父にそむかざるも道理なれば、理屈にまくるも道理ならん、しかるにおのれが道理をまげず、君をいきどほり、父をうらむるは、道理の悪なる物なればなり。爰に道理のせまる時は忽ち理屈となれるを知らん、差別は水と氷とのごとし、夫を世間の諺にも理の剛するは一信といへる、すべては言語の虚實としるべし。それらの道理にて人をあざむかず、おのれは幾度も詞をやわらげて面白ふ人をいさなはん、爾はつかしと思ふは人間の虚なり。しかれば道理の天にして理屈のひとへに人ならんには、此理や世情をやわらげて、徳潤色といふべきなり。たとへば、道理と理屈のさかひは新狀は理屈につめられて、春行頭人も口をつくみてにくみ、俳諧は道理にいさめられて、大名公家もおかしとこそおほさめさるは言語の憎爰より道に文章あるのいひなり。抑滑稽の記する所は楚の優孟が木樵の歌をつくりし、秦の優旃が城をぬらんといひし、淳干兒は鵠をにがしたれど、不信の辨にやわらきて、祿をたまはり、東方朔は酒をぬすめども延命の理をつくして首をきられず、其外は張儀蘇秦がやからも王家をいさめ、敵國をやはらげて、文武ならず、といふ者ならざるは、宋玉が文章より客難賓戲の俳諧をもちひ、戰國は殊に利害をとけば、周秦の間はさらにして、晋宋齊梁の中比より、兩唐の御代の盛なる元明の今にいたるまで、史書に名を殘せし文武の人はいづれに仁勇の智をかねずして、風雅の佳名を傳ふべきや、曹操は詩に遊びて四百州の敵をなびけ、吳運は文をよくして十八賢の人ににくまる、しかまた其理の天なると、其理の人なるさかひより、世情に和あり、不和ある事を知るべし、俳諧はよく頓挫の機鋒ありて、武家の餘力には學ぶべき道なり、誠に儒佛の萬巻も其道の徳をひろめんとて、あるは虚といひ、實といひ、あるは詩につくり、歌によみて、人の心をいざなへる道に文章の感仰ならざるや、まして俳諧の門をかまへて、天下の公道たらんには、其人にして其仁なき時は、文章の過當をにくまれて、儒門に三千の徒をなつけがたく、其人にして其勇なき時は、詩歌の風流にかすめられて、佛家に八萬の衆をなび

○文章の感仰　文章の余情の哀怨なり。

けがたく、其智ば其道の鹽梅（あんばい）ながら、俳諧は殊に機變の法なれば、全く此三の德をそなへて、さて今日の文章にあそぶへく、さるは世にいふ言語の太皷にして、世事に多能の人に似たれど、我を知る時は、其人を敎へ、我を知らざる時は、其人とあそぶ、此語は我家の密法にして、詞の鼓舞とは此事なり。爰に俳諧の行路難あり、分別と無分別とは上手と名人とのさかひにして、分別は理屈の靜まらざるにおこり、無分別は道理の動かざるにすみやかなり、さるを芭蕉下の學者にも萬法放下の風雅人ありて、たま〳〵我家の俳諧は無分別の所にありといへる故、翁の一語を聞たがへて口にまかせて、言ちらすにきのふ誨れば、けふは師にまさり、けふ覺ゆれば、あすは上手となりて、江西湖南にその洒落（しゃれ）をしたへば、ほとんど我門の破滅にかよはんとす、尤なるかな、耳學の人は道理と理屈の岐にまよへば、分別と無分別との一步千里の大道をしらんや、まさにおそるべきは此一語ならん、そもや道理と理屈とに善惡の三を立たるは、儒佛兩門の八千卷にも、老莊は家の三萬言にもいまだ說ざる所なるを、俳諧の世法より聖賢の心を汲て、はじめて我道の公言とぞなせる。是を世法に用れば、

人と人との交をやはらげて、日夜にあそべども、五倫の道をやぶらず、是を俳諧に用れば附句と、附との死活を知りて、明暮におなじ俳諧なれども一字一點の手に波より變化は日々に新ならん。是只其日の陰晴にしたひ、其人の喜怒をあつかふ故なり。況や世情の附合に此理のさかひなからんには、文にも武にも論に及ばず、しからば此理の天にしたがひて、今日の世情にあそぶ人を、有德の師とはいふべきなり。さるや佛書の應機物も、老經の和光同塵も、論語にいへる愛衆親仁も、畢竟は世情の人和ながら、其和に溫厲の二をしる事は、いづれも其家の一節にして、爰に一双の眼力をそなふべく、しかれば其道は德にひろまりて、其德は文をもつてかざやかす、其文にして武なからんや、其武にして文なからんや、文武は天下の治具なればなり。かへす〳〵も我門の學者達は、第一に俳諧の道と德とをあきらめ、第二に俳諧の法と式とをわきまへて、道は莊老に落ざる所をつたひ、德は詩歌に及ばざらん事をはぢて、みづから愼み、我と虛にして、我と實ならば、蘭省の花にたはぶれて、迦葉の琴のおかしさも、盧山の雨にもてなされて、淵明が鐘のさびしさも、例に三條の法あらん

には哀樂の間に世法をさばきて、俳諧に誹木諫鼓の用を知るべし。

傳に曰、此段は骨節にして、道理と理屈のさかひにより、世情の溫和に德をつゝしめる、是を我道の大宗匠にして、爰に俳諧の內證を察すべし。誠に四民の家にわかれて、五倫の外の親疎あれば、利欲におぼれ、名欲にかゝはりて、公事の理論をこのむ人あらんに、是を敎訴の誠ながら物に勝負の公案とやいはんづつら〳〵一ぺんの親切を思ふに、始は物理の二變より、中には滑稽の人をあげて、道理に虛實の證文となし、終は例の世情ながら人和に強き柔の力をそへて、智仁勇の三を爰に結語せしは論語の和同禮節にして、彼いふ一節ならざらんや。君しるや此論は白馬の遺訓を說つくして、我を知る時は其人を敎へ、我を知らざる時は千人と遊べるゆへ、是を佛經に遊戲自在とも、仙家の詞に地行仙とも、それを禁庭の隱者といへるは、史記に滑稽隨一とせし東方朔が、俳諧の詞にして、爰に俳の德といふ事を信すべし。君見るや此論は前には詩歌連歌に敵し、後には詩歌連歌にはぢて、警愼の二字に虛實をとちめたる、たとへ俳諧の家風より天下の人の舌頭を坐斷すとも、道に虛實の方便といひ、誹木諫鼓の用なりとも見て、彼いふ信の一字より、此いふ德の一字に知るべし、小子かつてうけ給りぬ、祖翁ある時、高家にまねかれ給ひて、其殿のたばこめさられば、祖翁も其日はめさゞるよし、誠に俳諧の洒落より、樹下石上の隱者となりて、富貴の人を諛ふべきや、權威の家におそるべきや、これ等は大倉の一粒なれ共、これをもてそれをしるべければ、門人こゝに記ざらんや、德はかくれたるにつゝしめとは、ましてさる事の目立まじきをいへる、論語には醋をよふ小節をさへ、爰を此論の骨節にして人よく此門より、俳諧に入べし、蓋いふ迦葉に淵明の一對は、例に錯綜の法ながら樂天が詩に虛堂の頌をあわせたる、筆に返魂の術ありといふべし。

第四　虛實の論

そも俳諧の虛實とは、例に言語の設なるより道を說時の兩翼にして、それが變化を知るにはしかず、しかれば其虛は實をやはらげ、其實は虛を補ひて、いづれの道にかたしくならん。世にいふ、儒書は實學にして、佛經は虛誕なり

と、其人は猥懲の先後をわきまへず、言端虚實に尻をすへて、實はよき物と思ひ、虚はあしき物と思ふ。世情の變を知らぬ人のいひなり。さりや釋尊は馬麥のむくひにくるしみ、孔子は牛刀のたはぶれにあそべる、是等は虚實の證文ならずや、其經は法華を要として開權顯實としめし給へば、其書は論語を鑑として母必母、固をさとし給ふに、彼方は實をもて方便の門をひらき、此方は虚をもて理窟の關をやぶれり。これ佛儒の公言にして其書其經の奥義ならずや、世にいふ、連歌は實情にして、俳諧は虚頭なりと、其人も例の變化を知らねば、口にいふ所を習へども、心にあそぶ所を傳へず、たとへば佛家の戸口をちがへて、教家と禪家との意地のごとき俳諧は、連歌をもとかんとするものなり。しかるを或抄に花實を論ずるとて、和歌は其實を本とすべしとは、自己に花實の先後をわきまへず、世なみにいひをける文章と見るべし。いてゞ貫之が古今の序にも男女の中をやはらげ、多きものゝふをなぐさむるといへる、なぞや其實に居て理屈をせむべきは、虚になぐさめて道理になびくならん。そはいへ和歌の鑑ならんとて、古今萬葉の花實をと唱へたる百人一首の巻頭に、天智の御製

も持統の御詠も實にかりほの筥をかぶりて、御衣の袂をぬらし給はんや、實に一夜の夏をむかへて、山に晒をほすべき、詩歌は此虚を本として、六義に虚實の品ある事をしるべし。此故に吾翁は俳諧といふは、別の事なし上手に迂訴をつく事也とは、例に俳諧の端的底にして虚實不自在の人には聞まがひもあれば、虚實の虚實（口傳）といふ事を、俳諧の道の一大事と知るべし。一向道しらぬ無風雅の人も虚言をつくり、眞言をかまへて、夜遊の興にはいふなれど、口に出るを虚と覺て、心にとむるを實とおもへば、其虚は世にいふ不道化に落て、其實は心のほたしとなりなん。誰か知らん、此論には虚より萬物をとゝなへて、實より五倫をそこなはんとは、爰を莊周が喩にも家といふ物に、虚なければ、婦姑のあらそひはやまじといへり。爰に虚實の變を論せば、實は好惡の二にかぎりて、虚にはさま〴〵の變有べし。たとへば五倫の道をもていはんに、實は忠孝の本に似たれども、その忠言の耳にさかひて、其孝行の心にあわざるを、しらて其實をおこなふ人は、他國に行て君の恩にそむき我家にありて父の名をくだす、世は只其實をよき物とのみおもはめと、金くれるちかひのたかわぬは

〇不道化―道化にあらずといふのみでなく道化はつきて笑止なりの義なり。

うれしく、首とる恨のとけざるはくるし。實のよしあしは些々過ざらん。さて虚といふには虚實ありて、口に興するは遊人の放言なり。心にかまゆるは佞人の讒言也。しかまた文道に六義の虚をわかち、武道に三略の法を立たる、いづれも机に目をふたぎて千里の外の工面ながら、文雅には目に見へぬ鬼神をもよろこばせ武略には猛き者のふをいからしむ。其虚は喜怒の變ならずや、況や聖經賢典におゐて、道に此虚をおこなへば、それを方便説といふ也。故に此論は言語に虚實の自在を得て、利害の變をしれと也。そもまた虚實の大小を論せば、虚はおゝいにして、實はちいさし、たとへば針のちいさうしてしづみ、船のおほいにしてうかべるかごとし。我あに其針をおそれざらんや。人あに其船をとがむべきや。莊周も例の此船をほめたりかくはいへ、虚實のかたちくなるに似たれど、虚は先にして天地陰陽あり、其實は後にして君臣父子あり、是を大小の論とはいはず、是を先後の辯とやいはん。世はたゞ其實の行ひやすく、其虚の設かたからんには、爰を虚實にしてその天堂には遊やすく、かの地獄には入かたしといへり、さはよく、其道に先後あり、其物に始終ありて、出る所と入る所とを知れば、其虚の危からんよりは、其實の隱ならんには、（口傳）此語は我家の識文（しんぶん）にして、爰に新安の朱學士の大學の序を看破せば、爰に儒佛の内證をも知るべし。此故に吾翁は虚に居て、實をおこなふべし、實に居て虚にあそぶべからずとは、白馬の法の第一義にして人のとゞまる所をいへる大學の綱領ならざるや。其書は孔子の遺誡にして、明德は虚實をいひ、新民の新は變化をいへる、すべては虚實の二法より變化をしからざらん、今また虚實の先後を論ぜば爰に居る人は是非をとかめず、蚊虻のそしりに耳を遊ばしめ、實に居る人は親疎をわけて金石のちぎりに命をはたす、彼は仁にして是は義ならめと、仁義の好惡の變あるを知るべし。しかれば虚に居るも、實に居るも、例に兩翼の用あれば虚實の先後する所は、しばらく家〳〵の立派と見て置べし。さはいへど虚實のさかひはかへす〳〵も、聞まどひあらん、たとへば人ありて居の字をとかめむに、彼もし虚に居らばたちまち實となり、我もし實に居らばたちまち虚となならん。さるは其實のおこなひやすく、其虚のさばきがたき故なり。是に自在と不自在とを知るべし。むかし龐居士が遺言にも、願くは世の所有を空して、

○識文―未來記なり。

所無をも實とすべからずといへる。畢竟は虛實の公論にして、虛實も此事也、人は此語を座右に銘して起居に其言を工夫すべし。傳に曰、此一論は俳諧にもかぎらず、昔しより草陳の力をつくして、儒者は佛者にかちたりと思ひ、佛經は儒書にまされりと思ふべし、今いふ儒法にも虛實あれば、佛法にも虛實ありてあらそう入は、字面を學びて言語の表裡をしらぬかたに落べし、誠や虛實の設には迂詐の眞言といふ事あり、眞言の迂詐といふことありて、そこに唯佛與佛とかや、明眼の師によらざれば口傳はなまじいにまどふ人もあらん、しかるに其虛の危からんより、其實の隱ならんとは、祖翁の論者を動かして議に笑語せし所なれば、かの牛刀の戲とは詞に表裡のたがひありて、例の實地にまどひたる人には、爰を識文の口傳といふべし。君聞や此論の親切は虛實を再注して居の一字をいへる、たとへ般若の六百卷は智の一字より說ひろめたらん、これらの叮嚀には過ざるべし、況や孔夫子の遺書をひき龐居士が遺言をあはせたる、爰に儒をつくし佛をつくして、虛實は此論を鑑に見るべし、蓋いはん、此篇は馬麥牛刀の字對より、法華と論語の要文をあわせて、文武に其虛の喜怒をわけたらん針船の喩はさらにして、蚊虻金石は意對の妙ならん、まして大學の問題とせし明新の二字に注者をとちめて、俳諧の公案となせる、是等を奪胎換骨の法にして、爰に我門の文章ありといふべし。

第五　姿情の論

そも俳諧の風情とは、其體古今の差別あれば也、古風は耳に其情を聞て、言語の上の姿をとゝなへず、今樣は目に其姿を見て、言語の外の情を含む、然ば古は情のみにして、今は姿の論としるべし。物に情あらば姿ならんや、無情の草木も姿あればと、物知りはあらそはめと、誰か目前の姿をしらざらん。言語の姿の見がたき、まして其上の風と雅とを知らずば、世木男木女には姿情の論には及ばざらん。今いふ風言雅言の二ッは。俳諧の體の一大事なるをや。そも〳〵姿情の先後を論ぜば、天地の次に生じたれど、仰ぎて天といひ、俯して地といふより、三才の姿はさだまりぬ。天地は人のつけたる名なれば、人を姿のはじめにして、月星をさして天の姿といひ、草木をさして地の姿といへる古文の秘訣も

爰ならん。しからば姿は先にして情は後也と決すべし。たとへ君臣父子といへども情は天地の間にこもりて、姿は忠と孝とにあらはる。いざや其情は其姿にしたひてあれどもなきが如くなれば、今に姿の論といふ也。誠に君父の忠孝も甲冑を帯すれば、忠情そなはり、衣食を供すれば、孝情あらはる、世に人ありて情は先なりと論せば、君父の前に姿をくるしめず、寐て居て忠孝の情を盡すべきや、姿の先なるは論ずるに及ばず、此故に佛經にも、五逆の姿を地獄と名づけて、鐵の門に鑓薙刀をそなへ、十善の姿を極樂と名づけて、玉の臺に笙篳篥をかざる。さるを需佛のあらそひに、苦樂の情はさもあらん、地獄極樂の姿は迂詐ならんと、迂をとらへて迂詐かと疑へる、それを禪語に繫驢橛（けろけつ）といへり。本より佛經に方便あれば、儒書にも工面ならんや、爰を文章の姿とはいふ也。そもや中古の俳諧は双六な世の歳旦といへば、目出たしと詞をむすび、五畿内の虚にはつめた飯とつゞけ、それさえ情のみにして風なきを、風姿は夢にだも見ざるならん、誠や今の俳諧といふは、古池の蛙に姿は見定めて、情は全く無きに似たれども、さびしき風情をその中に含める風雅の餘情とは此いひ也。さるな

○繫驢橛―驢ヲ橛ニ繫ぐクヒのこと。禪の修行に於て徒らに他の語句に滯滯すれば、それに束縛せられて自由の妙用を得ざる喩ふ。

な俳諧のみならんや、世々の詩歌も此姿なるを知らぬは、中古の麁學とやいはん、爰に連俳の姿を論せば、月花をおしむは古今一情にして詩歌もおなじく連俳もおなじ、姿は詩歌連俳とわかれて出るにつけても千差あり、傾くにつけても萬別あり、是をもて是を思へば、連俳はおなじ歌道をゆけども、草履と木履とに姿かはりて、俳言連語の論には及ざらん。昔は連歌の情をもて、俳諧の姿をいはんとて、俳言といふ事を論ぜしとや、風情はよく古きをたづねて、風姿はさらに新しきを知れや、新古は時の附合によりて、物の變化に知るべき也。しかれば其情の其姿に隨ひて、連歌は知らず俳諧には姿はありて情なしといはんも、人を誨る端的の處ならん、爰に俳諧の附合を論せば、常に前句の姿を見て前句の情を聞には及ばず、此故に吾翁は耳をもて俳諧を聞べからず、目をもて俳諧を見るべしといへる、耳目は姿情のつかひものにして、彼には明暗のさかひあれば也。されど言語の姿といふは心得ぬ人も有るべけれど、あら寒しといふ時は兩袖をまきて首をちゞめ、あら暑しといふ時は片肌をぬぎて、膝をまくる、是を下品の姿と見たるはあらと置たる物語の變也。しかれば一字一默よ

り附合の姿もかわりゆけば、日夜に同じ俳諧をいふとも古いといふ事あるべき
や、此故に温故知新の四字より、今の俳諧の師たる事を知るべし。史記の評林
にも是等を賛して繁捷の變にして、學ぶ者は詞を失はずとも、或は好事の志を
して心を遊しめ、耳をおどろかすとも、すべては言語の形容より文章の虚實を
いへるならん。いざや我門の俳諧師は姿情は新古をわかつため也。新古は言語
のつきざる故也として、其言に儒佛神道をあつかひ、其語に詩歌連歌をさばか
ば、俳諧は言語の媒とも、新古の鑑ともしるべき也。

傳に曰、此篇は全く俳諧の論ながら、天地に三才の先後より、君忠父孝の姿
をつくり、儒佛に文章の姿をあらそひて、畢竟は連俳の姿情をつくしたる、
況や言語の姿より、耳目の明暗の差別を立たる道にあきらかに、文にこまやか
に、物に叮嚀の信ありて、人を誨て倦すとはいふべし、されや此段の評すべき
所は、温故知新の四字をもて俳諧の家の師の説となせる。聞者は爰に耳をかた
むけ見者は爰に眼をとむべし。蓋いわん占文の秘訣とは、簠簋の詞にや、いま
だしらず、結語の儒佛神道をもて、詩歌連歌に對したる神道は詩歌の詞をおこ

して、是は結前生後の法ながら、四字をもて三様を對したらん、是をも文章の
一格と見るべし。

第六　俳諧地

そも俳諧の地といふは、繪の事には素地といひ、染物には下地といひ、まし
て今様の諷物には地といふ物あり節といふ物あり、曲は其中の變相ならん、そ
も〳〵儒佛の大道と勸善懲惡を地形として、仁義禮智に王城の儀式をそなへ、
殺盜盜妄に地獄の躰相をつくる、此故に佛の説法も世界の耳をおどろかせし七
寶の華嚴は、三七日にして、何の曲もなく節もなき阿含は、十二年の骨折なり。
是に擬誘彈陶の教の次第を感ずべし。さてこそ論語といふ物の諸家の文章はす
ぐれたるも、人をあつかふ論談のかたやかに助語に心をふくめたれば、げにも
聖人の教と聞へて虚實の節といふ物は、五七章にも過ざらん。さはいへ節のな
からんも、我家の風言には結構人とあざ名して、例の笑ふも俳諧也。節は家い
への骨にして、一道建立の大事とは知べし。今や詩といひ、歌といひ、いづれ

か其地を飛越へて雲のあなたに道あらん。ましてや俳諧の地といふは、本より俗談平話にて、それに雅俗のさかひを知るは、例に虚實のあつかひより、例に風雅のさびしみを、いかに今の世の媚をかさねて、たとへ俳諧の席ならずとも、さる友達のましらひは、よき人ならんや、あしき人ならんや、世には糸竹の諷物さへ、骨折所は其地にして、秘する所は其節ならめと、されば其節の面白きとて始より終まで、聲にかたむき色をふくまんや、さまで數ならぬ小歌說經だに、自然と其理にかなへるを、いかに俳諧の無下なるや、歌人連歌の家をならべて、耻べきは只此事也。今はた遠國の俳諧をきけば、さまざまの買ひ集めて、夫か中の節を學びて地といふ。物を師にならはねば、をのれはある〳〵と思へど俳諧は日夜に行過て、そは史記にいふ和說にはあらで、馬に心經の喩なるべし。すべて六藝の節あるも、それを癖とはいふべきに、人の學ぶも其癖也、爰に人間の地を論ぜは、明暮に飯くひ茶をのみて、君父の前の禮をわすれず、男女の交をたがへず、まして月雪花時鳥の風雅の情をうつすにも、をのれとこはすには及ざらん。されど四時の佳節ありて、節供正月は詞をあらため、聟入嫁

〇六藝の節｜六藝とは士たるもの學ぶべき六種の藝、禮、樂、射、御、書、數をいふ。

取の晴たしきに染物の摸様も常よりははなやかに、人に對する詞づかひのすこし媚たるも、心にくからん、しかれば俳諧も世情をはなれず、物の節々は儀式だちて節供正月の三物なんど、まして撰集は時がましく天下の人に對すれば、おのがさま〳〵に、曲節をつくす、本より俳諧の地は知りぬ、其地の高低に自在なれば、一家一言に金玉の聲有て、好事の者の耳目をおどろかさざらん。さはれ其節は一夜にも學ぶべく、其地は十年の粉骨ならんに、彼いふ人々の俳諧を論ぜは、一尺の絹をもとゝなへず、天下の紺屋に難をつけて雛形をさがしあるくに似たらん。此地を佛家には平生心といひ。儒門には恒心（つねのこゝろ）とはいへる。いづれも道の心にして、心にふたつはなき物也。かならずよ我門の俳諧師は、俳諧は弟をめして、かゝるゑせ言のみいひたらん。俳諧はさる事にて今日の用の放埒ならんをと神にもちかひ、人にも耻て、つねに人間の地といふ事を知るべし。

傳に曰、此一篇は人間の常にして、いづれの道か此地をふまざらん。此道に歌人連歌に對して、自門の放埒をなげきたる俳諧に一箇の殊勝地ある事を信ず

べし。誠に華嚴阿含の二教に、其地と其節とをあらはして、四字に藏經の次第をいひながら、論語はひとへに助辭をほめて、いづれも道の虛實にはかゝはらざる。例の儒佛にあきらかに、例の文章にこまやかならずや、然るを論語の陰使なるより、其地に一節のちからを添たる、誠は我門の一脉にして爰を容易に看過す人は、闇に黒豆をかぞふる類ならん、汝達爰に其一節を知らば、矚然領下の光をつゝみて、常は人間の地に假臥べきをや。蓋いふ君父と男女との一對に、禮交の二字をもて、昆弟朋友の五倫を含たる、是を双關の文法といふ。

第七　修行地

そも俳諧の修行とは、其道をあとへ戻る事也、昔より儒佛の學者も修行は先へ行事かと覺えて、爰をさがしかしこを尋れど、くらがり峠を越かねて、あるは虛勞の理人となり、あるはなまづとりの媚人となる。ましてこなきさいたつまの名をだに知らず、芝生のかくれの花は、いざ心の手綱のかへすかたならん。誠や和漢の人情にて伊呂波をならひ、丘乙己をおぼへぬれば、庭訓はよし三月

ぎりにて、先とて文選の坂にかゝれば、古文眞寶は、磯の波の沖に鷗のうかれ心より、三線もひきたし、茶の湯も覺えたし、いそがしき心の猿の其手もつたなく、人をたのみて藁もしかと覺へず、況や俳諧は我身からに和歌所の式もさだまらず、里村家の掟もまたざれば、諸國にをのが道をつくりて、歌にもゆき、詩にもゆき、書籍目錄を枕として、寐るにも起るにも、行過て廿年工夫の俳諧をきけば、史記の俳諧といふ物にはあらで、世にいふ唐の寐言なるべし。そもいへ儒佛の證文にも愚なるが如しとも、悟了同未語とも、聞えたるは、學で先へゆけとにはあらず。其道をあとへ戻れとのいひ也。あなかしこ。若き人〳〵は始に五七の字數をならひて、發句の切字も附合のは躰もさし合はかくの如く、去きらひはかくの如し。例の師をふらびて、其故を學ぶべし。さて俳諧の世法なるを知れば、俳諧は常の夜咄を五七五〳〵の句につくりて、我もいふなれば人もいひ、きのふもすなり、あすもすなれば、百日の功をへざれども、廿年工夫の俳諧よりも、今樣の變化ははなやかならん、爰に老俳の若俳をねためども、例に修行のふみたがひより、親仁はこびたる下手にして、息子はあとなき下手

といはん、縦に世法の憎愛はありながら、いづれ俳諧の虚實をしらねば、例の道理と理屈とにまどひて、どちらも下手也とおもふべし。いなとよ我門の俳諧師は學びて十年の功をつみなば、其場に俳諧の眼をひらきて媚るは人情の病なりとや。俳諧は平生の詞にありて、外には五倫の人をなぐさめ、内には其情の我を和らげて、誠に今日の世法なりしをと、峠の松の風にも涼しく、十年の道をあとへ戻れば、前に骨おりて見置たるおのが故里の道筋なれば、野山の風姿も、花鳥の風情も、麥蒔田植のしはざまで、春は夜雨の晴はたりて、橋の出買のおかしさも、秋は夕日のさし入て、店の煮買のさびしさも、宮古の遊女は緞子にほこりて痞おさするも心にくげに、田舎次郎は蓬生にしのびで、痞ふるふも物あはれなる。武士の朝起も、大工の宵寐も、世界にありとある事は皆〳〵をのが知りたる事にて、何かは俳諧のむづかしかるべき。爰を遊心和說とも、該諧謔嘯ともほめ置しもろこし人、滑稽を我家の俳諧に傳へたり。しかるに其道をあとへは戻らずして、尚も行先をまよひありけば、山のあなたに宗匠の追剝有て、發句には切字の子細をほのめかし、第三には韵字の秘傳をかまへ、古今の三

鳥の傳授とやらん、戸をさしこめて、さゝやきまはれば、おろかなる人は、信心をおこして、果は金銀をも剝とられなん。言語道斷なげかはしき沙汰也。されば修行地の次第といふは、十年往く時は其事を見つくし、十年還る時は其理を知つくす、理と事とは道の馬車にして、此ふたつを得たる時は、二十年の功をつみたる俳諧の上手とはいふべき也。爰に俳諧の知と不知とを論ぜば、二十年の下手は論にも及ばず、二十年の上手と百日の下手と其場はおなじ麓にあそびて、馬といへば大名とおもひ、車といへば公家とおもへども、俳諧は其日の模様によりて、或は打越のはこびにかはり、或は四折の附合にちがひて、種〻と附合の變化あらんに、上手はしづまりて其理をさばき、下手はあはて其事にまどふ。彼は十年の始に居て、其道の物理にあきらかならぬと、是は十年の始にかへりて其道の物理にくらからぬと、明暗のさかひは遙にちかへども、物いふ所はあいちかし。爰に上手の下手に似ざる事を知るべし。是等は我家の訓言にして、唐には手短に不肖といへり。かくは俳諧の俗談平話にて、往くも還るもおなじ道規なるに戻りて、故里の俳諧にあそばざるや、一

字に媚たる人の來らんには、鰯の頭に柊木をさして堅く我門には入べからず。

傳に云、此一段は前の拍子に加はりて、例に俳諧の筆格より、硯の海の得手に帆をあげ、筆の林の言葉に花をさかす、さるは今様の艸紙にも似たれど、爰に雅俗の大事ありて、十段の中の變化を見るべし。全篇は世間おしなべて、眼前の俳諧を見すこして、七尋八竟のさまをいましめたる古人も、爰を歸と來共歸家穩坐ともいへりけり。今の論者の一字錄には、さら〳〵我家の俳諧は學力にもよらず、辨口にもよらず、全く俗語平話の中より、詩歌の風流を人にしらしめ、世法の一道を世に殘して、阿翁と三會の曉をちぎり、時宜の一灯をかゝげんといへる、それらに此論の親切を記さゞらんや、蓋おもふ、此一篇は十論の中の及出にして、文章の花實をまじへたる中にも、あら野の駒の形容より、芝生がくれの古歌をひきて、心の一字にいひよせたる、是等を鑽詞の文格にして、それより故里の道筋には、夏冬をかくし、春秋をあらはし、明仄夕暮を照らしあい、歌舞の遊びに哀樂を忘れざる、すべては士農工商をあげて、爰に隱見の文法をつくし、爰に互照の文格をつくし、況や字門の對類をつくせる、是を俳諧の文鑑といはざらんや。しかまた二十年の上手と下手とに、百日の器用者を形容して、古輩をねたませたる、まして上手の下手に似て、下手の上手に似ざるとは、白馬に一條の訓言なるをや、そも〳〵俳諧の文章といふは、目に莊周が文法をまなびて、たとへば解牛の姿を寫し、口に韓愈が理論をこのめば、おほくは獲麟の情をつくして、意は儒佛の中庸にあそばんとす、此故に俳諧は、例のおかしく例のさびしく例に世情の一節を知れとこそ、しかれば文章のよる所、句として長短に叶へざらんや、字として鳶焉を對せざらんや、さるは假名をもて眞名となさんに、一字のたがひもなからんがためなり。およそは四六の文法なるより、歌人連歌師の文章には、まぎれす、されど俳諧の諷詞には、額に木履のしるしあらんとも、粟穗に顔を撫ばやとも、それらを不根の持論と注して、つねに言語の姿をつくれば、聞人の感涙もいたづらにさめて、儒佛の歎呵には似ざれども、そこを不虛ともいへば、爰を談笑の諷諫にして、過當は例の虛實に聞すつべし、誠に此篇の文章を評せば、天下の俳諧師を掌にならべて、婢子を見るよりも尙あきらかに、現人といひ媚人といひ、上手と下

手とに三の品をわけて、四民の姿情をつくしたらん、世に俳諧の文章をまかひは只此一篇に透得すべし。

第八　言行論

そも俳諧の言行とは、口にいふ所を身におこなふ。さるは儒佛の大道より老荘揚墨の道とても、いづれか立行のふたつをはなれん。それが中にも風雅の道には詩歌連俳の品ありて、當時に歌よみ連歌する人の雲のうへ人は、いざしらず、中品以上の人とても。口に月雪の錆をいへども、身は花鳥の色にまどふ。まして町人百姓の質置の金をとめて、棄題の歌をつくり、麥刈の男を呼あげて、連歌の一順をまはす、よしや薦槌の歌よみて、をのれが身にもおこなふべけれど、薪に花の口質は遁れまじ。しかるに俳諧といふ物は、中品以下(口傳)に風雅をひろめんと、中品以下の立行をもて、中品以下の人をみちびかんに、何かは學びがたからん。其身其まゝの俳諧は、置て及ぬ空の月を望で、猿に烏帽子の喩ともなれる、なべておろかなる世情のならはせなや、世には俳諧〳〵とい

へれど、洛陽は風土のつやをかざり、武城は風俗のかさをとれば、世に知らぬ書物の媚をあつめて、作意に作意をかさねぬれば、行衞もしらぬ雲の塔にのぼりて、九重の階子をはづしたらんやうに、いかなる博知博覽の人も其句の埒を聞人なし、聞人なきは俳諧にあらず、されよ史記にも俳諧を注して樽の飲口にたとへたるは、物の先後をよくさばきて、詞の次第のみだれざるをいへり、しかれば俳諧は平話にして、尼も入道もしれる事を纔に雅俗のさかひより、かくは風雅の一道となせり、爰をたとへば都の賣物に氷菎蒻やさねかづらとは、聞なれぬ耳には附ぬ句なれども、丹波の人はさこそ思ふらめ、今は國〳〵里〳〵に宗匠門下の黨をむすびて、人の得しらぬを手柄と思ふは、おなじ穴に怪力亂神をかたりて、其黨の人はさこそ思ふらめ、聞へぬ事の面白くは、四方しら壁の謎をも作れよかし。去ながら我身の白狀には世に俳諧の晴がましき一座の人に、顔をまふられて、今更あさはかに思はれむはと、人の耳遠き詞をたくむも、世にある人情のけはひなれば、人をひとへに、にくむべきにはあらねど、さるは俳諧の明と不明より、若き人々はさもあるべし、たとへ俳諧は口にいは

ずとも、俳諧は只かくのごとく知らば、何の詞か古からん、何の心か新からん淳（すなほ）なる時は、すなほにして、媚てよき時は、こびもすらん、爰に言行のちがひを論ぜば、すべて町人も百姓も桑門の僧も、武家の侍も、をのが利用に聞へたる理屈をいひ、風雅の席には聞えざる俳諧をいへる、全く表裡の人といふべし、誠に俳諧は有がたき物也。公義に對してあられぬ不埒を申さば、そこに狂氣の手錠をさゝれんとは、當時に或人の名言とて談笑の家の誠とならぬ。かへすゞ〳〵も我門の學者達は、門前の姥にも聞合せて、合點をせぬは俳諧にあらずと、をのが心の行過を恥べし、儒にも其言をはぢて其行をすごすといへるは、東隣の老丘の詞とや、俳諧はまして目前にありて、口にもいふべし、身にもおこなふべし。

傳に言、此段もおなじく修行地也。爰に中品以下の四字より、歌人連歌の行儀にはぢて、言行のたがひをいさめたるは、諺にいふ裸談義にして、人を教るの親切ならん、誠に俳諧の道は虚實の間に一節をかまふて、儒佛衡をあらそへば、遠くは莊老の虚を補ひ、近くは詩歌の實をほとく、しかるに下品の言行をもて、下品の風雅をみちびかんとは、貴をもて、人にくたるを樂しむといへる、儒家に聖人の實語ならずや、しからば此四字の不可思議なる、我門の口傳は爰にとまりぬべし。爰に法然も親鸞にさゝやきて、愚禿の一門はかまへさせ給ふ、さるは儒佛をさしはさみて、信心不二の大乘法なるに、其後の僧達は愚禿の心得たがひもやあらん、いざや芭蕉下の門人達も、此段の口傳を聞過して、虚實の虚實といふ事を知らずば、かならず言行のたがひもやらあん。我よく爰を評すべく。人よく爰を信ずべし。君聞や、例の筆力にまかせて、天下の宗匠を踏破せしも、白狀の二字に我身をかへり見て、若き人々は詞を和らげたる、是を虚實の文鑑に見ならひて、明と不明との三字をもて、言中の響に人をはちしめたる、爰に俳諧の一節と知るべし。況や樂天か門前の詞より、論語の言行をいひながら、東家の丘に起結を合せたる、耻の一字は例の親切にして誠は俳諧の論語ならざらんや。されど俳諧は巽與の言にして、口によろこんで身におこなはざらんは、我家の夫子も手をつかねて、如何〳〵ともする道なからん。

第九　變化の論

そも俳諧の變化とは、世法に今日の心得にして、萬物の不定をさばくため也。大いなる時は天地の變にして、雨によろこび風にいかり、春は花と咲、秋は葉とちる、小さなる時は人間の變にして、君をおかしく臣をあかまへ、父にそむきて、子にしたがひ、きのふは南殿の花に遊び、けふは北邙の露にかなしむ、變化は天地のつねなるを、おとろくは人の知らねば也。變に俳諧の變化を論せば、おほいなる物は、古今の變にして、すこしきなる物は一巻の變也。されば昔の俳諧は始中終の三をもて、鼎のごとく尻をすへたれば、例の俗にして雅ならず、今の俳諧は始中終の二（口傳）をもて中に風雅の情を殘し、さて一巻の變といふは、全く附合の法にして、百韻すべて百色なるをいへり。されど附合の法といふは、皆〳〵附たるといふ事にはあらず、親しく附たるも變なれば、疎く附ざるも變にして、全く附るといふ事にはあらず、疎く附ざるも變にして、全く附るといふ物は、一見わたしに二句か三句かならんには、およそ其句には及ばざらん。是等は芭蕉家に祕藏の事也。そも〳〵我家

に三法の附方あり、第一を道心附といふ、和歌の有心にして無心には對せず、細に前句の姿情を見つくして、一字一言に心を賦る故也。其次を會釋といひ、其次を遁句といふ。一巻はすべて此三に變化すべく、されば俳諧の案方といふは、いづれの附句にむかふ時も、先とて我句を案すべからず。始に三句の打越を見さだめ、其次に四五句のはこびをかんがへ、其所に目立たるさし合を見合せて、其後我句の趣向を案ずべく、初念のあやまりはひきかへしがたし。爰に一念の先後論せば、たとへば色欲に身をほろぼし、博奕に家を失ふ人も、面白き方を先に思ふ故也。今宵しばらく橋にひかれ、今宵うちまけて鷹をかふらはと、くやしき方を先に思はゞ、たとへ一夜はあやまつとも、一たびは夢のさめざらんや、是等に俳諧の世法なるを知るべし。然るに世間の俳諧師は前念後念はさて置て、うちこしのはこびさへかへり見ず、何かな珍らしき作あらばと、前句の尾ひれに取つきて、をのが一分の趣向はなく、それを前句の噂とも、前句の斷とも難ずる也。此故に吾翁は趣向をさだむる法を立て、二十五ケの一條とはなせり。さて一分の趣向とは、前句の作者は其心ならねど、其句の言使に

心を賦りて、我句をそこへ附ぬれば、哀樂の姿も褒貶の情も、二句の間に見ゆるをいふ也。そこを俳諧の連歌と題して上にあまるを下にゆつろへ、下にたらぬを上におきなふ、いづれの和歌か、上下をわけて句の作意をほめたるや、今は前句の噂をいひて、一句の作をほむる世となれば、其事は纔に變ずれども、其心はおなじはこびにて、さるは附合の法にも及す、爰に一分の趣向といひ、前句の噂といふを知るべし。誠に附るといふ時は、多くは人倫のさまにして、士農工商のまち〳〵に、貧福の情あり、老若の姿あり、貴賤の品は其人にしたがひて、衣裳の模様も、身帶の格構も、前句の立外を見つくして、聊もおのが按排をつけず、それ〳〵の道理をさばきたらん、そこに其人を見るやうにして、一字の手にはをも殘さる、それを今いふ有心附と知るべし。さりとて百韻は百句ながら、一字一涙の脾胃を揉べからず。俳諧は本より心のあそびにして、まして離附の道理あるを、浮世のよひ事つくしに、腰に萬貫の銀をまとひて、鶴に乘て、楊州にあそばんといへる、それらの程をしらざらんには、さて會釋といひ遁句といへる會釋は、打越のむつかしき時に其人の衣類か喰物か、そこらの道具表色にて程よふそこを除く事也。さるは世間の諺に牢人あしらひといふ事も、むつかしき時の機變也。およそ百韻は六七十句も、此會釋にて過る物なれば、其中の模様はさま〳〵に變じて、世法の時宜も此間に修すべし。本より會釋といふ所にて、とちらへも變化の自由なれば、是を俳諧の地と名づけて、一巻の變化は此會釋によるべし。遁句は同體別名にして、風雨寒暖のたぐひより、時分時節のあしらひをいへば、遁句は輕く會釋は重し。爰に別句の故を知るべし。しかるに第一の有心附は、其日其場の模様に依る。或は寒いに物着るとも、或はひたるいに物喰ふとも、親疎は附所の變化にしたがひば、無理と理屈と其道同じく、よいとわるいも其場ひとしく、物の至極は危きにはありて、名人と初心との位地なるより、上手はおそれて附ぬ時も多し。かへす〳〵もおそるべきは、有心附のまされにして、此附方には先手後手の論あり。本より俳諧の案方も、碁將棋の工夫にかゝわる事なし。たとへば前句の模様にて、大名なれとて碁はお下手也とあらんに、相手は商人と趣向をさだめて損したいに、畏ると句をつくれば、商人は先手にして畏るは後手也。誠にお下手の風情をう

しなはず、おそれ入たる風姿をも見るべく、しかるに世間の附方は、先手に畏る者を案じて、もしや句つくりに、商人とも思ひよらめと、明眼の師は先後の理屈を知りて、それは前句の噂也と難ず。同じ口より同じ事を言へども、先後の上手と下手ありて、夢に俳諧の明暗をおそるべし。其餘はむかひ附といひ、前句の情を起すといひ、拍子附は語路の勢にして、宗因宗に今の姿をとゝなへ、色立は氣色の取合せにして、賴政の紅葉に白河の類也。さて向所といふことは、有心附の中の別名としるべし、例の打越に人ありて、人倫のさまはやかましけれども、或はあしらい、或は逃けはなし模様の面白からぬば、其時に自他の差別を見て、向附の法を用ゆべし。前句は例の大名に薄忌數奇也などゝあらんに、「山寺の老僧」を趣向にさだめて、麥飯を句に作るべく、世間は爰に酒か吸物か時の結構を案ずる、故に例の噂とも行とも斷ず、これらに麥飯の附合をば、或は俳諧のこなしとてもいへり、しかればよのつねの附方は、此方より彼方へ附るを、是は老僧をもて大名にむかへば、此名を向附といふ也、されど商人も老僧も、おなじ大名の相手ながら、前句の大名を動さず、お下手の詞に、下品の相手をこしらへ、畏る詞に前句をつなぎて、彼いふ有心の働を見るべし、後のは其人の風俗につけて、いくらも附やうのあるべきに、打越のさまのむづかしければこそ、其大名を動かして、薄忌を鷹野のもどりと、見たる物なき所に物おもてむかへは、此いふ向附の働を見るべし、前句を動すと動さぬは、大むねこれらの用なれど、附方は毫末の差別にして、爰に俳諧の叨と不明とを信すべし。さて前句より情を起すといふは、連座の人の變化を思はず、縮れば五句も三句もちゞまりて、人のさまのみやかましく、伸れば三句も五句ものびて、そこら風景かちならん、たとへば村雨の日影といへるに、田中の松のあつちこちと附たらん、爰にて前句の情を動かして、我は狐に化されたやらと附くる、是等は前句のあつちこつちといへる詞のあやを聞とがめて、無理に世情を拵へたれば、此名を起情とはいへる也。しかれば向附は縮む時の用にして、起情は伸る時の用と知べし。昔は貞享式をつくりて、響といひ走といひ聲といへる三名あり。中比は東華式には八體の附合あり、今は十論に四名を出して、附合の名は十五なれども、附方はたゞ三法にして、七名も八體も三法の中の細注と知る

べし。況や百韻の百變ならんには、附合も其時によるべし。さはされ連歌も俳諧も佳名は、發句に傳ふべけれど、發句は大極の一氣にして虛よりおこつて、實にとぢまれば、本より道理もなく理屈もなく、まして法もなく式もなく、畢竟は、信の一字より、其場は大名人と初心とにあり、上手の手つまは論ずるに及ばず、そも〳〵俳諧の工夫といふは、我宿にありて、枕を傾むけ、其事ならぬ遊山翫水に、人と〳〵物いふにも、虛實のさかひを心に忘れず、我身の道理には、他人の理屈をためし、他人の道理には、我身の理屈をはぢて、論語に門人をさとし給ふがごとく、是をもて四民の情をやはらげ、是をもて五倫の法をさはき、第一に草木鳥獸の名を知らば、風姿はいかん、風情はいかんと、更生の心に忘れざらん。それを俳諧修行の人といふべし。さて其席にのぞむ時は、衣食に一日の機嫌をとゝなへて、身は泰山の雲おさまり、心は流水の風しづかに、附合の三法をかむがふるには及ばず、五體十體の細注にもかゝはらず、例に無分別の所より、初念の趣向にたゝよふべからず。好きは其日の仕合にして惡きは其時の不運ならん。是を虛實の虛實といひて、十論の究竟は爰の變化也。されども一座の調子あれば、發をはやくはなつべからず。たとへば兵法を學ぶ人の、右轉左旋は平生の藝古にして、敵と敵とのさし向ふ時は、氷の刃をぬきはなして、眞甲ふたつに切割にはしかず、爰に此變をしらぬ人は、終に文武の妙所いたらず、十論はかへりて脚手まとひとならん。かへすがへすも、我門の學者達は、道理の理屈の世法の附合にして、虛實の變化の世情の心得なれば、俳諧は心の行所にあそびて、其時の變におどろかされる也。

傳に曰、此段は殊に惣論にして、人天の變化に哀樂を忘れざる、本より儒佛の設ながら、爰には世法の機嫌を知るべし。しかるを俳諧に古今をわかちて、百韻の變化の分明なる、三法四名の委細なる、たとへ佛の經文に一念の變化を說つくして、卒刹那に分たらんよりも、一念の先後に惡をこらしたる、爰に文章の公道を稱し、爰に俳諧の世法を信ぜざらんや、まさに知るべし。俳諧は附といふ事の專要なれば、第一には有心附といひて、第二第三をば其次にといへる、さるは三即歸一の道理にして、是等は文章の論にもあらず、例の俳諧に明也といはん。さて俳諧の古今を論じて三鼎の喩は、明なれども始終の二は、不

會底の人もあらん、爰に古今の證文を評せば

始
五畿内に　中
降しら雪や　終
つめた飯

始
古池や　終
蛙飛こむ水の音

されば此類は數多ながら、昔の俳諧の其三をつくせる、此外に人の聞べき情なし、姿はましていづこの雪をか詠めん、今の俳諧の其一を殘して、中にさびしき情をふくめる、それを詩歌の餘情とも、文章の優美ともいへるならし、今や其二と其三とを評せば。儒佛は其三を說つくして、律義にをしふるを、教誡といひ、詩歌は其中の一を殘して幽玄にあそぶを風雅といふ、君聞や、風雅と教誡の論は、張子厚が書室銘にありて、矻愚と訂頑の質なるを難し、東西の名の文なるをも難す、さるは參力乎といひ崇伯ヵ子といへる、其外はすべて風雅の文にはあらず、あの名は勸學文ともいひ、座右の銘ともいふべきやと、白馬の文章訓に此論あり。爰には人のまとふべき所あれば、始終の二を師資の口傳とはいへり。さて附合の四名の中に、拍子といろ立證文を評せば

追手　三千　土用　八雪

宇治勢田の灸箸をそ引たりける

此句は檀林の名にひゝきて、例に言語の拍子なから評せは、橋のおもかけより、今の俳諧の姿にも似たれは、是等に聊の差別を知べし。拍子は殊に其姿を忘るべからず。

都にはまた青葉にて見しかとも
紅葉ちりしくしら河のせき

此歌は賴政の物數奇にて、全く能因の歌をとりながら、彼は陸奥に萬里の情を詠し、是は白河にて色の姿をかたる、本より遠近の用不用ありて、姿情のさかひの各別なるに、今も等類の沙汰ありとやらん。其世に判者は知り給ふにこそ、すべて故事をとり、古語をとる事は本據なくても、聞ゆるをよしとす。今世の連歌俳諧には其故事を知らず、其古歌を知らねば、何やら聞えぬ事多し、それ等は同意とも等類ともいはんと、白馬の類說に此歌の論あり。しかれば是等の風景を俳諧には色の取合せといひて、遁句の中の一體となせり。蓋おもふ

四名の文法は、始は起情と向附をいひ捨て、中には拍子と色立と兩句の對を書ならべ、終に前の二名を細注せし、是は隔句の錯綜なから、双關の法も、倒裝の格も、句讀の長短も、語ろの斷續も、すべて此間に知べき也。蓋おもふ此段の不可思議は、第一の發句には、鹽梅をつけず、上手の手つまは論に及ばすと や、爰に俳諧の虛實をさぐり、爰に十論の信僞をためさゞらんや、況や論語の詩經をひきて、四民と五倫の二句をもて、興觀群怨の四意をつくしたらん、さるは白馬の文章訓に、怨の一字より、邇遠の二字を讀して、畢竟は鳥獸草木の用ならんといへる、爰に第一の詞をもて蟋蟀の法も、是が爲にして、評者の口譯は爰にとゞまりぬべし、誠に此の段の畢竟は、千變萬化も期すべきにあらず。大事は有心附の名にありて、道理にしたがへば、花鳥も新らしく、理窟におつれば、父母も古からん。新古は今日の變化にして、作者の働になるべき也。そもいへ、俳諧の公案を、兵家の刀法にたとへたる、此外に鬼谷が一卷を傳ふるとも、我家の手段は覺束なき所あらん。爰に氷及の一句をもて、此十論を看破せば道理と理屈とは、世情の和をあつかひ、虛實の二論は人事の變をさはきて、

俳諧はたゝ其日の遊なればと、涅槃の一字不說よりも、理屈はすべて賊後の弓なるべし。

第十　法式の論

そも俳諧の法式は、連歌の家に見ならひて、手に遠波のさし合も、草木鳥獸の去きらひも、一座の一句の物は二句とさため、七句なる物は五句となし、五句なるものは三句となし、三句の式に二句より一句にはぶきけり、本より聖典の掟にも、道はおごそかならん事をおもひ、法はやすからん事を思ふ也、さて一卷は歌仙のつかひより五十韻といひ、百韻といふ。一部の式は百韻にしるべき也。そも〳〵俳諧の法式は、貞德の御傘より埋木に斧をいれ、噓艸に穗を拾ひて其事は今も覺へたる者多ければ、其理は古も明なる人まれ也。理事は萬法の翼ならんをや、發句の切字より、脇の韻字も、第三の手に波も哉と來（けり）との和訓はいかん、櫻と花との意趣はいかんと、指合は何の故なるや、去嫌は何の故なるや、四花は月は誰かしらざらん、我は明暮にすなれども、俳諧は何の爲なる

ぞと、法式の名字はさし置て、其故といふ事をたつねば、其爲といふ言下に知べし、其いふ論語に、夫詩のをしへも、君父の道はさらにして、獸木の名をしれといへる多論の二字を聞とかめて、詞の先後きむかへば、今いふ故と爲とは知りなん、遠くは儒佛の學問にも、近くば詩歌の藝古にも、博く學びて其事は知れども、其理はいかにと心をかへさねば、耳から耳につたへ、口より口にいへるのみ、心にもちゆる人は稀也、況や俳諧は平話にて、我事を我といひながら、何の故とも何の爲とも、我を知る者は一人もなし、學者はすべて此費を出ざらん、たとへ千式萬法も文字に出たる書物あらば、一夜か二夜に覽もすらん、道に法式の故をしらさねば、其人は例の輕口にうかれて、歌人連歌の家になぶられ、傾城猿樂の媒となりて、俳諧はいさせぬかたやまさらん、此故に、貞亭式には、宗匠の法と、判者の法とを、新式の二條にわかち、執筆の法を一條となし、亭主の法あり、連衆の法あり、五條は、例の心得と知べく、さて宗匠の心得といふは、第一に其座の人情を見とゞけて、我句に人を屈すべからず、人は宗匠の顏き見て、待心より調子を失ふ、よきもあしきも風雅の運なれば、其

日の俳諧の始と終とをかんがふべし、さて人々の附句あらんに、第一は附心の道理か理屈かを聞わけて、附句の趣向を稱すべく、前句の噂を難ずべし、第二は三句の打越より、四五句のはこびを論ずべし。四折の變化は、勿論の事也。かならず當句の面白みになづまされ、句作のあしきは宗匠より直すべく、趣向のあしきは作者へ返すべし、指合の事は執筆の役なれば、宗匠の心をついやすべからず。然に表紙といへる俳諧は、殊に新式なれば一座の設（口傳）といふ事有て、宗匠のよしあしは、此時の用なり、多くは月花のあつかひより、二季にまたぎたる彼岸の類も、四季にはたりたる世名の祭も、發句にすれば季となる物あり、附句にすれば雜となる物あり、詞のさし合も物の去嫌ひも、其場にしたがひ、其人によりてとがむるもあり、とがめぬもあり、新式のかけたるをおぎなふ時あり、古式のかたくなるをためる時もあり、是等をおほやけの私といひて、其才にたへざれば、人も感ぜず、其和をそなへざれば、人も信なし、さらば此理を先につたへて、其式を後にまなびなば、はじめて宗匠の名はよびぬべし。爰に古人の詞あり、君にも重からざれば威あらず、威あらざれば信なしとは、

道をまなび藝をならはんに、妙所は信の一字より入れば、俳諧もなど有徳の師によらざらん　されど俳諧のおかしみより、笑言をもて人をみちびかむに、例の一節をしらざらんには、古人の詞の聞まがひもあらん。次に判者の心得といふは、宗匠の一體別名ながら、釋門に佛と菩薩とのごとき三十二應の自在を得て、世法をあつかふに分別あらん、されば詩歌の勝劣は昔より、君子の射にならひて、連歌賭物をあらそふ時も、何れは道を損するも判者にあり、道を益するも判者に有り、況や百韻の點式には、長默の法あり、圈點の格あり、秀逸の印は例の危ければ默も無默も判者の變といふべし。第一に判者の心得は、俳諧一道の默といふ事を知べし　本より其卷にむかふ時は、宗匠の附合を聞に殊ならず。指合は筆者の役なれど、目にあたる時は斷るべし。さて一道の默といふは、判者の心の好所を捨て、例に當るのよしあしになづまず、附合のちゝこひの會釋と見へは、たとへ心にいらずとも、一默かふるは勸懲の法なり。以てそよ一本の草を動からし、一國一城の人をなびけ、西へも東へもむかず、つぎに其人は判者の癖をまなへば、判者は其癖に化粧をつけて、果は其黨の相詞となり

なん。されど點者の額うちて價をまつ人は、此論に及ばず。そもや判者の宗匠にすぐれて、世法をあつかふ大事とは、世界の俳諧のよしあしをば、判者の心にはよくしれども、といへばかくいひ、かくあればとありて、このむ所のさだかならぬより、其黨の俳諧をまどはせば、其中に大夫の人ありて、例の難所をあとへ戻りて、俳諧はとにもかくにもあらず、上手といつは其理のあきらかに、下手といつは其理にくらかりしをと、はじめて自己の眼をひらきて、判者の虛實を看破せん。爰を醫書には藥の眴眩といひ、祖錄には干疑一決といへり。これらは儒書內證にして、下愚の人には、沙汰すまじき教化の人の大秘事なり。されやむかしの俳諧には、俳言なしといふ判あり、其世は例の輕口をたくみて、連歌師の餘興にもいひ捨たれば、さる脇書もすべけれど、今や我門の俳諧には、俳諧の心といふ物は、何れも俳諧に詞といふ物はなし。たとへ筑波の體をつくし、八雲の詞をかさぬとも、連歌と俳諧の姿は別なり。此故に我家の點式には、雅言のぬかりには、俳諧の體なしとも、俗語のいやみには俳諧にあらずとも、そこの兩樣を、書わけよと新式に故翁の傍訓也。爰に雅言といひ、俗語といひ、

どちらも俳諧の公用なるに、ぬめりといやみとを、それが病ひとは、是等に俳諧の明白を察すべし。誠や世の中の善言も惡言も口ある者の口占ならめと、それに病の有無をいへる、式目の委細を稱せざらんや。世にまた俳諧にくらき人の黠者は、十國十色なるには、俳諧はすこぶるいひかちなりといへる、それらは放下の人にして、此中の論にはあらず、次に執筆の心得といふは、宗匠の機變をよくはからい、連衆の調子を失はず、假名と眞名の配りを（口傳）おぼへて、たとへ偏畫のまぎれありとも、手づかひはやく書たらん、それを第一の心得といふべし。例に指合と去嫌は本より執筆の役なれば、人の附ざる以前よりあしからん物は見置べし。さて指合のある時は、宗匠の顏を見て竊に其事を申べき也。其場其人の句によりて、其儘さし置事もあらん、それも世情の人和ながら、一座の禮節を知らざらんには、公私のさかひに道をあやまつべし。爰に此法の故を論ぜば、指合といふは、手爾遠波の事也。語路の拍子のあしき故に、去嫌といふは、象物の類也。草木鳥獸のちかからんは一卷の變のあしき故に、詮義にこれらの故をしらねば、法にあやまつ所あらん。さて一順を文臺にあげて、

發句はふたゝび讀かへし、次第に作者の名をよむ事は、其句は誰かし、此句は誰かしと、宗匠に顏をしらるべき爲也。これ等の道理にある故に、滿座の擧には名をよまぬ也。すべて此類は誌抄に委しければ、我知り顏に世をもときて、しいて法式をいはんにはあらねど、道に其爲を知る時は、法に此故を知れとなり。次に亭主の心得といふは、膳手の馳走に立さわがす、喰物の次第を挨拶の人にしらせて、それを宗匠に通ずれば、始と終とに心得るなり。されば我家の面通言（かしこと）になら茶三石喰ふて後、はじめて俳諧の意味をしるべくとは、ある時に故翁の戲ながら、論語の精にはいひまさりて、名をさしていへるは、例のさびしみなり、されど厭はずとしつめたる文章の優には、おどろきて、爰に雅俗のさかひをしらば、子成が文質の論をも知らん、さて新式の饗禮に其序は一汁二菜に過ず、茶とたばことはかぎりある物から、其器物に氣をつけて亭主の結構にまかすべし。酒は二獻に過べからずとは、誠や茶人の時分ばりも、俳諧の供給は大事とはいはん、おそき時は待心に屈し、待得る時は昏睡におこたる、またざらんほどは亭主の心得なり。かく饗應の輕からんも、ひとへに儉約の心には

あらず。例のねむらず、例のさびしからん其故あるを知るべきなり。世に客發句といひ亭主脇といへる、さよとひとへに思ふべからず、發句は客の位に似て、其さまもおぼつかなく、詞の外に心をあまし、脇は亮主の働に似て、其心あきらかに發句の餘情を調ふる故なり。脇の韻事も此沙汰に知べし、世に又名殘の花をさして、句の花といふ事あり、此名は俳諧の儀式たちて、奉納追善のたぐひには、發句の作者へ其花を望むべし。始と終とに其心をあしらひて、爰に其事を句はす故なり、其座に亭主の心得は、執筆は名殘の表みちて、裏一順と斷る時に、亭主より其花を望むべく、そこに一順を待あはす爲也。其席は擧句もつねならねば、或は一座の老人が、或は一家の故あるべく、其日の時宜を見合せて、花の次手に擧句をも望むべく、かくて滿座の再吟に發句をば、吟じかへさず、句の花より擧句へつゞけて、押返し二度よむべし、其事の儀式を上る重ずる心なり、是等の故は諸抄に論せず、名のみおぼえたるは覺束なく、次に逐衆の心得といふは、例に衣食の機嫌をとゝなへ、其日其席の時刻におくれず、おの〳〵其所にあつまりて、文臺のたゝぬ先はみだりに宗匠の居間に出いらず、

そこに一順を調ぶる時は、取次をもて其句を窺ふべし、連座の前の威儀に屆せざらん爲也。いづれの席にも小懷紙の用意して面々硯にて草稿すべし。本より文臺に遠ければ、趣向の間に差合にまとふ。さて其席に臨む時は、おほむね座配の次第ある物なれば、辭義にかまひすぎてはかへりて無禮也。膳中の詞の世なれたるもいやし、附句は手をさけて執筆へ申べく、宗匠もをのづから聞知りに及ばず、すべて俳諧の席を論ぜば、第一に世情の人和をとゝなへて、論語に温厲の變をおもへ、第二は談笑の風俗にあそびて、闕唯に哀樂の頌をしれや。俳諧は其句の陰晴にひとしくよきもあしきも、一時の變ならん、かへすゞ〳〵も我門の俳諧師は、俳諧は俳諧のよしあしにもあらず、俳諧はそも何の爲なるや、法式はそも何の故なるやと、其道をあきらめ、此論をとがめて、平話の中の風と雅とを知らば、道理も理屈も今日の戲にして、虛實はをのづから風雲の變にかなひ、姿情はをのづから花鳥の和にあそばん、其人はよし俳諧をまなびて、たとへ烏焉の字を知らずとも、和漢に滑稽自在の人といふべし。

○五條一貞享式の條目にて、一、諸禮停止、一、小語低聲、一、出合遠近、一、一句一直、一、月花一句

傳に曰、此篇は全く我家の法ながら、他門の式にもかはらねば、其書此抄に聞なれて、犬うち童部も知らめと、爰には理事の二を論じて、其法は何の爲なるや、其式は何の故なるやと、法式の所謂をしれとなり、すべては貞亭の式目をつみて、五條の心得をいへりけり。さて宗匠の心得に一座の設といふ事は、其日に其場の機轉なれば、其事は日夜に變すべく其理は古今に返すべし。

宵闇はあらふる神の宮うつし
　北より萩の風そよきたつ

此句は歌仙の初折にて、月秋の七句目なるに、宵闇の月の附かたければ、萩に神風の威靈をあしらふ、しかれば其次の殊にむづかしきを、例に遷宮の宵闇は、ほのかに月影を含たればと、爰には月といふ字ばかりを出して

　八月は旅をもしろき小幅綿

是等は一座の名譽なりとて、其比に書つたへて待しが、我門の太龕生はいづれの巻の宵闇をも、月と覺へたる沙汰もあれば、爰を宗匠のよしあしとはいへり、此故に一座の設にはそこはゝの條目を書ならべて、公私の二字に結語せし

爰に一犬の虚實をおもはざらんや、蓋おもふ、此段に風雅の運といふ詞は、白馬の祖翁の常語なるが、さるは黄門の家訓にも道の冥加といひ、高運といへる風雅の詞の須便ながら、俳諧には例の殊勝地といふべし。次に執筆の心得として假名と眞名との配をいへる、但此事は古法にはあらず、東華式の文格より、我家の書法とはならぬ、連歌には多く假名をもちひて、俳諧には多く眞名を用れば、眞名と眞名とのかさなりて、上下の連續の心得がたき時あり。たとへば古池や蛙とび込水の音のごとき、込水のつゝき隱ならず、古池や蛙とび込水の音とは勿論にして、眞名にかゝねばならぬ事あれば、其時は飛込む水の音と無用のむの字を加ふる事は、いはく大和の風躰にして假名と假名との配にもウフの通用を知るべきなり。此外にフヒへの音韻も、イキンクの竪横も、芭蕉門の假名遣とて、貞享式の一條となせる、例の口傳とは此類なり。昔より物の法式には道理を破りて、時にしたがふ事あり。古傳のあやまりを用ゆる事あり。何の故とも知れぬあり。それを古實の法といへれば、例の師をえらびて先知るべきは、只此實の一法ならん、蓋や第二の條目に、俳諧の黨をまとはずとは、道に

敎化の大秘法にして、儒門は是を孫言といひ、老家には是を寓言といふ。況や佛書の虛實自在なる五千餘卷は、すべて方便說なり。是等に指月の喩を知らば、爰に俳諧の用と無用とを知らん。蓋や第三の條目に一座の禮節といふ事は、前に人和の溫厲ながら、今は公私の二字に結して、法の私曲をいましめたる、爰に十論の公道をあふぎ、爰に十論公法を學びざらんや。是らを百世の五條目としるべし。おいな我門文通は、道德の一篇に實をほどき、法式の一篇に虛をおぎなふ。是よく虛實の設にして、讀人これらの變を知らば、此十論に鼻息を通じて、はじめて俳諧の名をよばれて、天下に橫說竪說すべし。君見よ儒門の四教とても、忠信の敎は諸道のつねにして、孔子の道は文行の學にあり。かく其道の差別を知れば、三家の意地をしれる人といはん。唯おそれてもおそるべきは俳諧の道の地にして容易の人のふみまよふべきをや。

そも〳〵十論の次第より、それが要文を評するに、第一は俳諧と俳諧とにして、古今の差別あるより、俳諧は儒佛をやわらげて、今は詩歌の媒といひ、第二は老後のたのしみにといへる、其一に俳諧の理卽をしり、其二に俳諧の究

竟を知べし、第三段には其德をひろめて、詩歌連歌のみなかみを忘れざる、その本立て道ならざらんや、詩歌連歌の德に及ばずとも、其用は日に〳〵俳諧をうらやむべし、まして道理と理屈とに善惡の三をわけたらん、此名に世法を說つくして、諸家の理論を推ざらんや、しかるに其和の溫厲といひ、其家の一節といへる、爰を我家の風骨にして、醋吸の三聖も、默識の要文ならん、其外は俳諧の法式をあかし、文章の法格をしらしむるに、或は上手の下手に似て、下手の上手に似ずといへる、爰に六藝の至極を知るべく、或は言語は口占ながら、詞のあやに病を聞わけたる、爰に俳諧の機變をしるべし。況や中品以下の四字にて、俳諧の一門をかまへたる、道として其爲を信せざらんや、法として其故を學びざらんや、すべては今日の理を說て世法をつくさずといふ事なし。いざさらば十論の趣向といふは、始より終まで儒佛の兩道を證文にひきて、詩歌の二門に功をあらそへるそれをば、俳諧の論語ともいひ、是をば俳諧の法語ともいはん、誠は述の一字より竊に老彭に比するなるべし。いざゝらば十論の畢竟といふは、我をしる時は、其人を敎へ、我を知らざる時は、其人とあそべる、

孔子に春秋の歎息も（口傳）達摩に楞迦の密法も、（口傳）其家〳〵の祕訣にして、右に十條の要文はしらず、今いふ一條に俳諧をつくして、十論の中の要文としるべし。君見るや論語の四百八十章も、始は學の一字より、終は言の一字をもて、言を知らざれば、人を知らずと、萬古不易の大道を結語せしかば、其言といふは、論談なり、論談といふは、俳諧なり、俳諧は只虛實にして、其虛を談ずれば、釋老となり、其實を論ずれば、孔孟となる。爰に論語の名をもしるべし。いづれの言語が虛實によらざらん。いづれの虛實が先後によらざらん。法は變化の檝（かぢ）としるべきなり。君聞や佛書の五百四十函も、經に論あれば論に律ありて、其言を知りて其人を知るより、三界一音の教といへる。しかれば儒佛の大道すら阿難迦葉（あなんかせふ）の其言につたはり、有若曾參の其語にひろまりて、道に文章の數奇不數奇とはあれど、迂詐か眞言かの論萬には及はず、まして和漢の風雅を評せば遠くは詩經の三百篇も、魯頌の一言をもて、世をおほひ、近くは歌書の八代集も、浮橋の詞をたねとして、よろづの歌とはなれりける。今や十論の經者として、爰に論者の大功を評せば、儒門に木鐸の喩は知らず、例に俳諧のおかしみより、佛家の龍樹も、菩薩の名をやめて、此道の論師となれるなるべし。

十論の讃

我聞此十論者和漢傳（テ）二滑稽之心一而勤（ルニ）レ之擬（ラヘ）二論語之風諭一（ニ）些懲（ニ）之㑚維摩（ノ）之彈呵（ニ）一歷誠不文而可學質而可信焉耶言則謂俳諧之論語矣若（カク）夫分（ヲ）三道理與（ヲ）二理屈一而所（ル）レ謂（ニ）物干先後之序（ヲ）一此名者（ハ）出我家之發明而四民麼可遊此理了則六藝麼可講其序梟矣尤憶花巖之次第則佛麼宣（ヒキ）下給勤（メ）二世情（ノ）法先後一以智分別（スト）上居來其經者爲誨出世之樂焉乎此論者爲レ說（カ）二世上之遊（ヒヲ）一虖哉爰知（ラン）所レ謂下俳諧之和發二儒佛一而詩哥之媒（ト）上意（ヲ）天焉爾有（シカラバ）則俳諧之一道者不レ爲下學佛兮學儒兮實老莊揚墨之虛上兮常知虛實之變而將（シニハ）レ設（ハ）二今日之世法一爾者歌人麼（モ）不レ隔二臥猪之床（ヲ）一兮連歌麼不レ爭千鳥之友（ヲ）兮姿者搆（ヘテ）二文武之門一而情者爲同花鳥之道矣假令爲（ルヰト）レ虛（ト）二於其實（ヲ）一了共不（ス）二可爲（トハ）一實二於其虛一與者遇レ名老居士之遺言也何不レ有レ善焉（ヨカラ）其以祖翁之令レ授道（ケシ）也則是以先師之爲（セル）レ記法（ナラン）也止今也憶（ヘハ）二選場之時節（ヲ）一則祖翁之滅後三十年而殆可（シト）下遂二此論之功一

而傳中其道之德上矣夫此故再撰此十論而令レ成二和漢文操之別錄一者也享保己之亥歲林鍾晦日獅子房二爾申

十論の挍

例のいふ獅子庵に廿餘艸の遺稿ありて、それに中に五秘の傳寫あり、今いふ十論も其ひとつ也。昔武陵の芭蕉菴にて祖翁と此事を論じ給ふは、元祿のはじめと聞ゆれば、先師の奥羽に行脚ありし庚午の明る年なるべし。爰にその頃、草藁を默撿と見ゆる也。さて十論の評者とせし朝暮三といふ者は、其頃は深川の菴に侍りて、世間の餅搗の賑しきに、今一日も聞て寢ばやといへる名言の小坊主なるが、そのゝちの名を傳へざれば、これらは竹林の撰集の時も、かくのごとくの役人附と見るべし。扨こそ全篇の評を見るに多くは口傳の秘事をいへれば、文は客詞の答にならひて、發語に傳曰の二字を置事ならん。されば十論の次第を按するに、第一は和漢の俳諧に以心傳の道あるより、公任經信のこゝろを汲て、俳諧の躰のさだかならぬをいへる。第二第三は道德を論じて天下に文武の一助たらんには、爰に滑稽の諷諫をもて、治國齊家の媒といはざらんや。第四第五は此道の至論ながら、虛實は俳諧のみならんや、儒佛は是をもてをどろかし、老莊は是をもて己をあそばしむ。まして其道を傳へるに姿情は文章のよる所なるべし。さて第六の實地には、物に一節のちからを添たる、第七第八も其地にして、俳諧は只平話なれども、それに雅俗の品あるより、文章に鼓舞のはなやかなる筆に管絃の術ありて、爰に儒佛の氣を轉ず、第九は俳諧の用ながら、變化は天地のつねといへる、迅疾風の冠にも及ばず、鬼拉躰といふべし。第十は本より家法ながら、式には新舊のたがひめをいへる、一座の設は貞享式をつみてこれらに五秘のおほむねを察すべし。しかれば第一より第十まで物の先後の俳諧をさばき、詞の虛實に文章をあつかひて、一字一點のわたくしをいれざらん、世さらに此論を鑑とせば、俳諧は自己の面を照してぬ惡はみづから知るべき也。おなじく享保のごとく文月のはじめ門人渡部ノ狂うけ給はりぬ。

十論の解

十論之奥書云々此論者粗紛副墨而可感前後之相紋枭共阿翁自加給口苅之筆則今將不忍改草稿我後及子雲之論也則二三子其惟察之實麼看此論之故事與古語則皆々乍引儒佛之證文就中有多論語之詞了者謂儒書與佛經之多少矣乎謂擬論語之風諭矣夫不其心在玆焉耶門人某等仍解

俳諧十論　終

目なし用心抄

解題

石田梅巖によつて唱道せられし心學は其の門に手島堵庵出づるに及んで、盛んに神儒佛の三道を一心に打して其の要を傳へんとするに至つたので、本書は有名なる一休禪師の通俗に禪の必要を解せしめんとして著はされたる「水鏡」を手島堵庵が更に平易に說述して、世の肉眼のみ明かにして心に目なき徒輩に心眼を開かしめんとしたもので、簡にして頗る要を得たものである。一休禪師のことは「文藝篇」に堵庵のことは「民衆篇」に述べたれば、こゝに略す。

目なし用心抄

序

いかなるをか目なしといふ、目とは我なり、我とは私案なり、私案なければ身を忘れて自性の光のみあきらかにして、我なしといへる言葉也、我なければ、何の惡をかなすべき、かの石川五右衞門とかや、閻魔の廳に付所なしと悟道を踏み迷ひしは、人我をもつて自性天然のひかりをつぶせしものなれば、此世から地ごくの釜へふみかぶりしなり、是を見かれをきゝて用心あれかしと、一休様の夢想なりとある人かたりき。

堵庵

目なし用心抄

手島堵庵

目なしどち〳〵。

めなしとは、人家の私案なしといふ名にて、本心のことなり。どち〳〵とは、たづぬる言葉なり。自性の光、これを心の官は思ふといふなり。此思ひが無我を求むるなり。

ころについてましませ。

私案をすつれば、活きながら身は覺えぬもの也。此時は我卽虛空に似たり。其虛空が萬の音聲を聞くなり。これは我なきに何が聞くぞと明けくれさがし求むれば、一旦忽然として我なき故よく聞くといふことを知る也。其知

る智恵もまた、更に智恵あるにあらず、あらずとてひとへに知らぬにもあらず、此智をたとへば人常に顔は忘れてゐれども、顔なきにあらざるがごとし。

そも〳〵皆人たちの、悟とやらんいふことを、悟るならひ、はじめに父母もなき、とつと巳前の我身は、なきものぞ、いへきかんといふ。

父母とは天地なり。天とは心なり。地とは身也。とつといぜんとは、人常には身心ともに忘れて居るをいふなり。そのわすれてゐる所をいへとなり。

何として知らぬことが申さるべく候や。たゞへんてつもなきもの也と思ふべし。

知らぬとは、忘れてゐるをいふ。忘れてゐれば、我といふ目はなきなり。其所はいはれぬなり。故に申さるべく候やとなり。あやまりてへんてつも

なしとも有りともおもはゝ、それははや我といふ目あるなり。又知らぬとて、何もなしといふ事にはあらず。忘れて居ても、此身が消えたるにもあらず。心もまたかくのごとし。

古人曰、空寂以爲二自身一無レ認二色身一靈知以爲二自心一無レ認二念妄一とあり。自性の靈光本分の知見は、絶つとも捨てらるゝものにあらず。學者のやまひは、知見に見をたて、心に心を生ずるを以て、頭上に頭を安ずるとていやがる也。根本生れつきの外に、我見を起すを目とする也。目なしとは、其我目なしといふこと也。我とは私知のはからひ、私案妄分別也。

たとへばよし野初瀬の花もみぢ、いろ〳〵に咲いて散りて、又本の根にかへるがごとし。

これ人の念のおこり又さるも、天地の間に四氣の流行するも、同じ事なり。此はたらきをさする、主人公をなしとせんや、能く〳〵工夫有るべし。人念々の起る思ひは、目なしのはたらきにて、正念とも無念ともいふ也。私

案は思ひの邪になりたる也。それを妄念とも有念ともいふなり。何とて思ひを無念といふなれば、正しき念慮は、目なしにさからわぬゆゑ、覚えなきがごとし。一を挙げていはゞ、歩行するに、思はずして歩行はならず、思ふといへども、更に思ふとは自身も覚えぬなり。それゆゑ正念とも無念ともいふ也。また其足少しも行くまじき方へふりむけば、直に思ひが邪になりて目なしにさからふ故、覚える也。是れを妄念とも有念ともなづくるなり。無念といへばとて、念なしといふことにはあらず。

ほんらいもなきいにしへの我なれば死ゆくかたも何もかもなし。

本來もなきとは、其はじめを知らずといふ事也。はじめを知らざれば、終りも知らぬ也。いにしへの我とは天也。死にゆくかたもなしとは、天何としてか去來すべきぞと也。天とは目なしのかへ名なり。

ゆく水に數かくよりもはかなきは佛をたのむ人ののちの世

ゆく水に、數々の事をくりかへし〳〵書くとも、何ぞ益にたつべき、無益なりとの事也。ことに佛を頼みにして、惡などをなすは、大にはかなしと也。つれ〳〵に萬の事は頼むべからず、身をも人をも頼まざれば、是なる時は悦び非なるときは恨みずとかや。只目なしまかせにして、頼み事をやめよと也。さりとて神佛を信ぜずといふにはあらず、神佛を信ぜぬは、直に我が力を頼みにするものにて、彼の我慢大目あるなり。

とへばいふとはねばいはぬ達磨どの心の中に何かあるべき。

問はねばいはぬは、なきに似たり。とへばいふからは、心の中ひとへになしとはいふべからず。

人死ぬるといなや、やきもしうづみもし、のけてなくなるこおもへば、又もなくならずして、たましゐといふもの、來世とやらんへゆき、あらおそろしや、ゑんまわうが手にわたり

なば、しやばにてつくりしつみを、くろがねのちやうにつけて置いて、鬼に見せて、これほどの罪人なり、呵責せよといふとき。

人死ぬるといなや焼もしうづみもしのけてなくなると思へばとは、人悪事を縦になしおふせて、しすましたりと憶ふ邪念をいふ也。又もなくならずしてたましゐといふもの來世へゆくとは、第二念を、目なし第一の臣下正念といふ閻魔が善なれば極楽へ通ず、悪なればゆるさぬ也。しやばとは現在也。をしやにくやかあいやと様々の事に身の私をして、主親をなかせ、夫婦互にむごく情もなく、兄弟あらそひ、友だちに眞實をうしなひ、世間へ無理非道をし、都て慈悲憐愍なく、愚痴ゆゑ人のあるまじき事をいふたりしたり、忽ち畜生道へ落ち、ほしがるまじきものを貪り、萬に慾ふかくして餓鬼となり、身勝手をして腹たていかりて、瞋恚の焔をもやし、修羅におちいり、黒縄、衆合、炎熱、紅蓮、叫喚、無間あらゆる地獄を、己が

○五蘊―色とは身、愛想行とは心のはたらきをいふ

○三毒―貪欲

胸中にくり出して、くるしむありさま、言ふも及びがたし。これは他人の知らざる所にして、自ら知る所也。微塵も悪を思へば、直に目なしといふ淨はりの明鏡にそのかげあらはるゝ也。まして悪をなすをや、其かげ再びはげがたし。是を鐵札につけて、さま〴〵私想し、あしきことを行ひ、此身いろ〳〵の事を受るにつけるといふ也。鬼とは色受想行識の五蘊なり。何かと身の最負のみして、意識に執着ふかきゆゑ、胸中顛倒錯亂するが、鬼のせめくるしむるといふもの也。故に罪の重きほど〳〵にせめて、少しもゆるさぬ也。恐るべきことなり。

どく薬へんじて、薬となるなれば、罪のおもきは、佛にやならん。

一切毒も用ひやうにて、薬となる也。故に薬も又用ひやうあしければ、毒となる也。罪も同じ事也。罪も至りて重き時は、却て佛ともなるなり。罪は貪瞋痴の三毒より大なるはなし、佛は衆生を救ひたしと貪るなり、衆生